

九州地震帶

委員理學博士今村明恒

目次

第一章 阿蘇地震帶

第一款 地震概說

第二款 顯著地震

- 甲 明治二十二年七月二十八日ノ熊本地震
- 乙 明治二十七年八月八日ノ阿蘇地震
- 丙 明治二十八年八月二十七日ノ阿蘇地震
- 丁 明治三十一年十二月四日ノ肥後東部ノ地震
- 戊 大正五年三月六日ノ竹田地震

第三款 火山

- 甲 阿蘇山
- 乙 金峯山
- 丙 九重山
- 丁 鶴見岳
- 戊 溫泉岳

第三章 霧島地震帶

第一款 地震概說

第二款 顯著地震

- 甲 明治二十六年九月七日ノ知覽地震
- 乙 明治二十七年一月七日ノ日置郡近海ノ地震
- 丙 大正二年五月、十月ノ真幸地震群及ビ同四年七月ノ栗野地震群
- 丁 大正二年六月二十九日三十日ノ日置郡地震
- 戊 大正三年一月十二日ノ櫻島地震
- 己 大正五年十二月二十九日ノ水俣地震

第三款 火山

- 甲 霧島山
- 乙 櫻島
- 丙 開聞岳
- 丁 誠訪ノ瀬島及ビ其他

第四章 阿蘇霧島兩地震帶ノ活動關係

第一款 最近ノ地震噴火

第二款 過去ノ噴火

第一章 緒 言

九州ノ内部及ビ其ノ周圍ニ於ケル著明ナル地震帶ハ東方太平洋沿岸ニ並行シテ洋底ヲ走レル大地震帶有リ其一支脈ハ豊後水道ヲ貫通ス北部ニハ山陰地震帶ニ接續スル一地震帶アリ此等ノ地震帶ノ成因ハ孰レモ造山作用ニ基ヅクモノナルガ此以外ニハ九州ノ中部ヲ東西ニ横斷スル阿蘇地震帶アリ南部ニハ薩隅及ビ其ノ南方ノ火山島嶼ヲ縱貫スル霧島地震帶アリ而シテ此ノ後ノ兩地震帶ハ主トシテ火山性地震ヲ發生シ又之ニ含マレタル火山ヲシテ時々活動セシム

造山作用ニ基ヅケル前記ノ二地震帶ニ就イテハ曾テ其帶上ノ一地震ヲ記述スルニ當リテ之ヲ論ズル所アリキ即チ前者ハ明治四十四年六月十五日ノ喜界島地震ニ於テシ（本報告第七十七號九十四頁乃至九十七頁）又後者ハ明治五年二月六日ノ濱田地震ニ於テセリ（本報告第七十七號六十八頁乃至七十四頁）故ニ本篇ニ於テハ再ビ之ヲ記述セズ

阿蘇霧島ノ兩地震帶上ニ起レル地震ハ概シテ火山性ナルヲ以テ固ヨリ破壊的ノモノアルコトナク隨ツテ歴史上顯著ナル地震ノ記録ナシ故ニ此兩地震帶ノ調査ニ當リ地震記録トシテハ僅ニ明治十八年以後ノ中央氣象臺報告ニ依頼スルノ外ナシ此等ノ地震ハ各地震帶ニ於ケル火山作用ノ陰性活動ニ基ヅケルモノナルガ此作用ノ陽性活動ニハ其地帶上ノ諸火山ノ噴火アリ而シテ阿蘇地震帶ハ中央ニ阿蘇山ヲ有シ東方ニ九重山及び

鶴見岳等ノ死火山活火山アリ西方ニ金峯山及ビ温泉岳等ノ死火山活火山アリ（温泉岳ハ霧島火山系或ハ中國火山系ニ屬セシムベシトノ說アレドモ便宜上前記ノ如クセリ）又霧島地震帶ハ北ニ霧島山アリ其南方ニ於テハ櫻島、開聞岳有リ更ニ南方硫黃島、諫訪瀬島等ノ寶七島ヲ經テ沖繩鳥島ニ至ル諸火山アリ此等ノ諸火山ハ或ハ陽性活動タル噴火ヲ起シ或ハ陰性活動タル鳴動地震ヲ起シ以テ此等ノ地帶ニ於ケル顯著ナル地震ノ不足ヲ補ヘリ就中阿蘇山ノ噴火記錄ハ本邦ノ諸火山中最モ整備セルモノニシテ霧島山之ニ亞ギ共ニ兩地震帶ノ活動沿革ヲ窺フニ足レリ而シテ兩者各々其特有ノ習性ヲ示スノミナラズ其相互ノ間ニモ亦特種ノ關係アルコト曾テ大森博士ニヨリテ指摘セラレタルガ如シ之ヲ要スルニ阿蘇霧島ノ兩地震帶ハ地震ノ勢力ノ大サヨリ見ルトキハ極メテ微弱ニシテ論ズルニ足ルベキモノニアラザレドモ而モ其性質ヨリ見ルトキハ猶ホ興味アル一問題タルヲ失ハザルナリ

本篇ニ於テハ阿蘇霧島兩地震帶ニ於テ起リタル明治十八年以後ノ地震ニツキ其一般ノ経過及ビ特徵ヲ講究シ又兩地震帶上ニ於ケル火山特ニ各々ノ盟主タル阿蘇山及ビ霧島山ノ噴火上ノ習性ヲ論ジ以テ兩地震帶ノ將來ヲ推測スルノ資トナサント欲ス

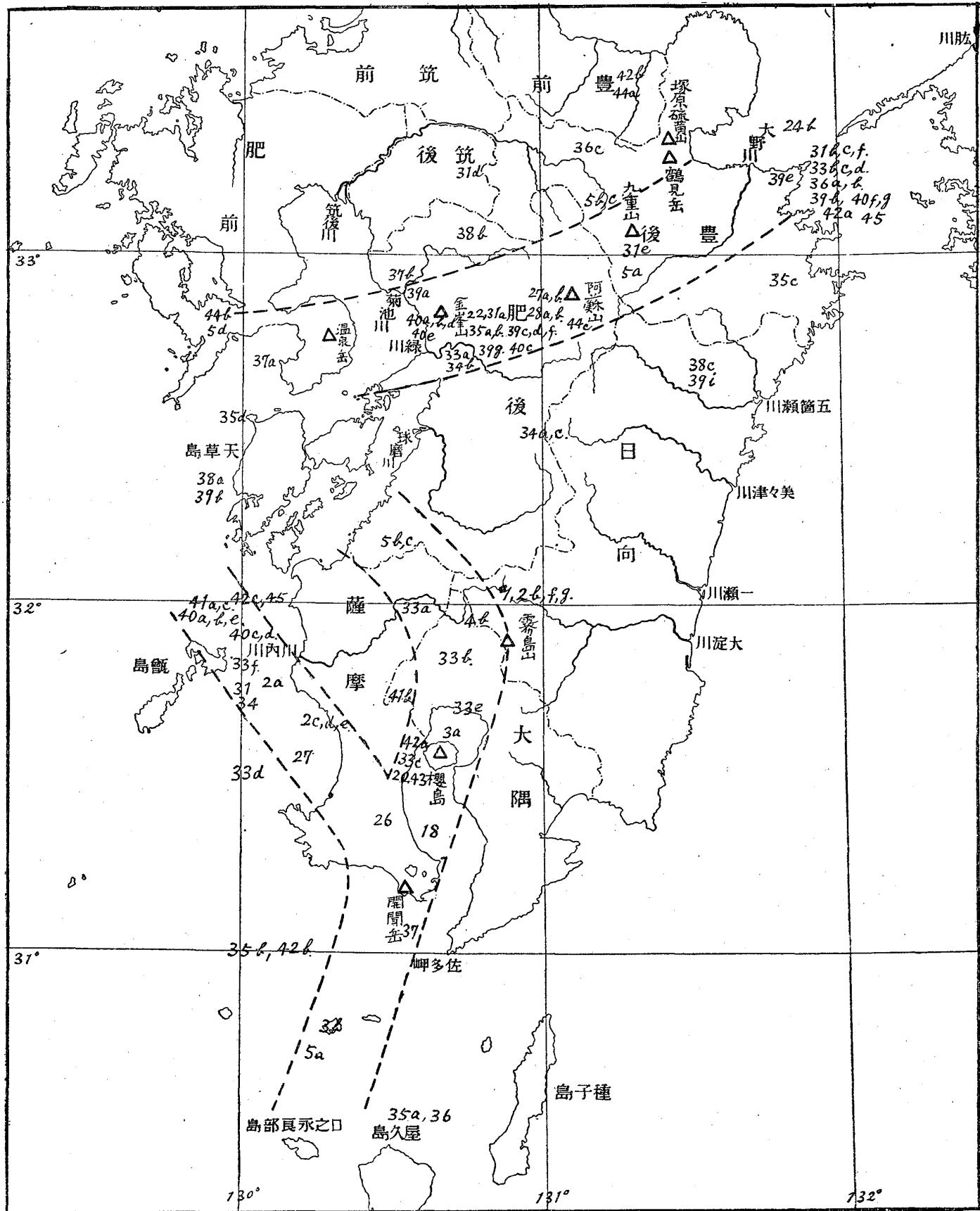
第二章 阿蘇地震帶

第一款 地震概說

明治十八年以來阿蘇地震帶ニ起リタル弱震程度以上ノ地震ハ第一表ノ如シ其一般ノ震原ニ就イテハ中央氣象臺報告ニ基ヅキ之ニ熊本、大分兩測候所ニ於ケル普通地震計記象、大分測候所ニ於ケル地動計記象及ビ兩管内ニ於ケル各觀測所ノ震度等ヲ參考シ尙ホ附近測候所ニ於ケル初期微動繼續時間ヲモ加ヘテ之ヲ定メタルモノナリ但シ顯著ナル地震ニ就イテハ一々特別ナル講究ヲナセルコト本章第二款ニ述ブルガ如シ

第一表 阿蘇地震帶ノ地震

(一) 分萬百二) 布分原震帶震地島霧蘇阿 圖一第



上ノ表ニ就イテ見ルニ明治十八年ヨリ同二十二年ノ熊本地震ハニ至ルマデノ状況ハ稍不明ナルモ此最後ノ半破壊的地震ハ多數ノ餘震ヲ伴ヒ翌年ニ至ルモ全ク靜謐ニ歸セザリシヲ以テ此時期ヲ以テ阿蘇地震帶ノ明治十八年後ニ於ケル活動ノ初期トスベシ（假リニ之ヲ乙期ト名ヅク）次ニ明治二十七年ヨリ同三十二年ニ至ルマデヲ阿蘇帶活動ノ他ノ一期（丙期）ト見做スベク而シテ明治三十五年ヨリ同四十年ニ至ル六年間ハ同帶ノ活動頗ル旺盛ナリシ最後ノ一期（丁期）ナリ之ニ反シテ明治二十四年乃至二十六年及ビ同三十三年三十四年ハ一時靜謐トナリシ期間ニシテ斯ノ如キ休息ハ明治四十一年後ヨリ今日ニ至ルマデヲ最モ著明ナリトス今之ニ此地震帶ノ中心タル阿蘇山ノ活動ヲ加ヘ考フルニ同山ハ明治以後ニ於テ同五年、同十七年同二十七年及ビ同三十九年ニ於テ稍顯著ナル噴火ヲナセリ即チ最後ノ二回ハ十八年以後ニ於テ起レルモノナル

					* 45	44c
5d	5c	5b	5a	大正 五、三、一、元	四、八、三、七、四	
喜々	長崎	同	附	肥後小國	近阿蘇山	近阿蘇山
津縣	前	近	三二、一〇	竹田附近	豐後海峽	豐後海峽
三〇、〇〇	同	三一、一〇	三二、一〇	三三、一〇	三一、五〇	三一、五〇
三、四九	前	一、八〇	一、八〇	七、五〇	五、二〇〇	三、一〇〇
高瀬	府	春日	二秒間	大分市初期微動	熊本市初期微動	三秒間
十四日及二十九日	大分市	東大野、宮原、別府	強宮地、限	大分市初期微動	大分市初期微動	大分市初期微動
局部地震十四回	伯	城井、竹門	弱佐	強宮地、限	強宮地、限	強宮地、限

ガ其孰レモ同帶活動ノ期間ニ起リシコトヲ注意スベシ
以上ハ阿蘇地震帶ヲ一括シテ之ニ下シタル見解ナルガ更ニ其
各部ニ亘リテ講究スルトキハ活動ノ中心ニ二元アルコトヲ注
意スベシ一ハ阿蘇山ニシテ他ハ金峯山是レナリ今前記ノ活動
期ヲ此二元ニ配當シテ考フルニ乙期ハ金峯山ニ屬シ丙期ハ阿
蘇山ニ屬ス而シテ丁期ハ兩元同時ノ活動タリ若シ之ニ明治十
七年ノ阿蘇山活動（之ヲ甲期トス）ヲ加ヘ考フルトキハ甲乙
丙ノ期間ニ於テ二元ハ凡ソ五六年ノ間隔ヲ以テ交互活動ヲナ
シ此間ノ休息時期モ比較的ニ短カ、リシガ最後ニ明治三十九
年ヲ中心トシテ旺盛ナル同時活動ヲナシタルガ爲メニ之ニ繼
續セル休息期間モ比較的ニ長シ斯クノ如キハ他ノ場合ニ於テ
モ往々認メラル、性質ニシテ此關係ヲ時ノ前後ニ延長シテ推
測スルトキハ明治五年ト同十七年トノ阿蘇活動ノ中間ニ恐ラ
クハ金峯山ノ陰性活動アリシナルベク又大正五年ニ於ケル阿
蘇附近ノ地震ハ此地方ノ戊期活動トシテ多少ノ暗示ヲ與フル
モノ、如シ（第一圖參照）

第一款 顯著地震

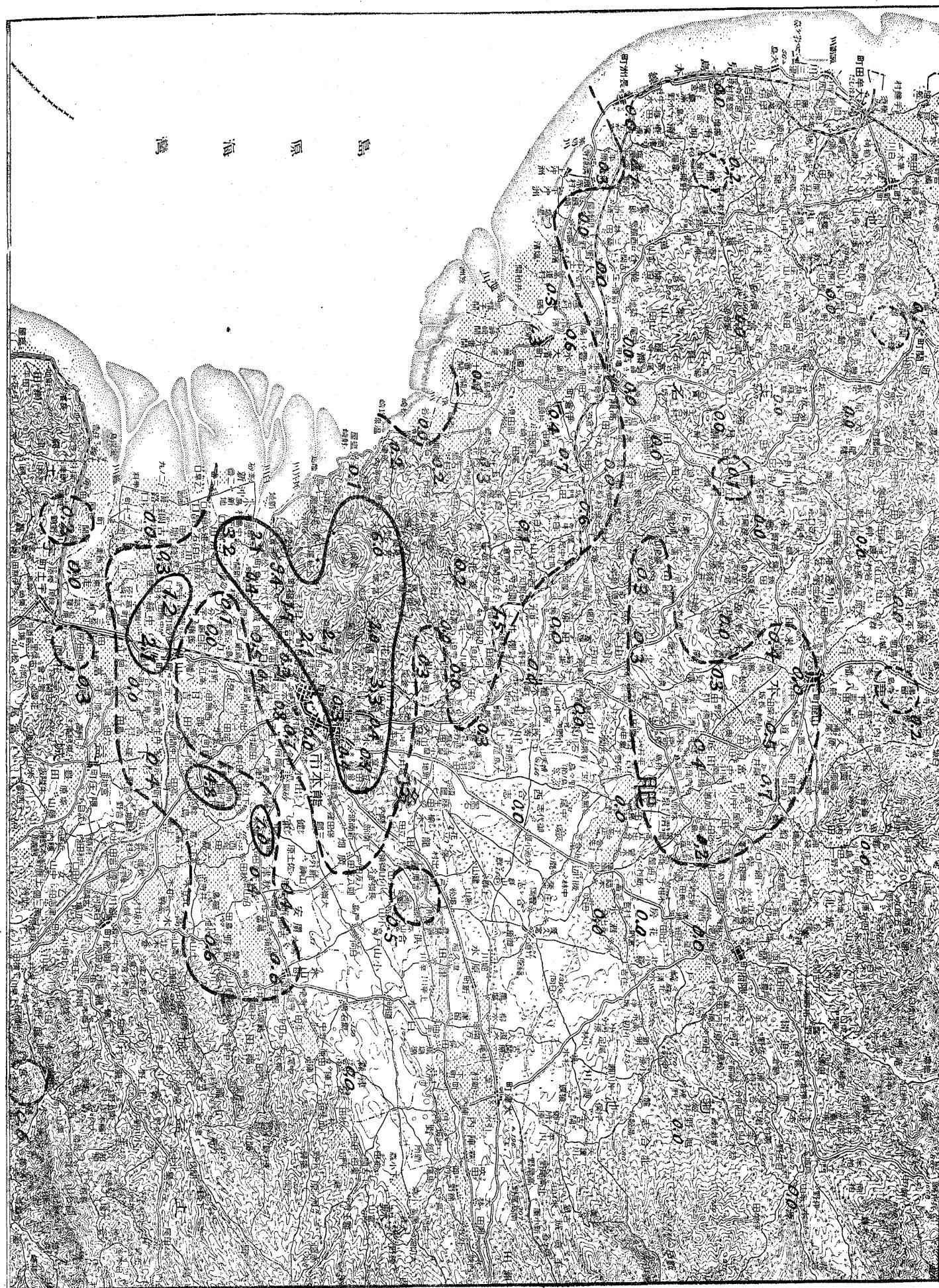
甲 明治二十二年七月二十八日ノ熊本地震

總說 此地震ハ本邦ニ於テ器械觀測開始以來ノ最初ノ大震ニ
シテ烈震區域ハ熊本市及ビ附近ノ地凡三十方里ヲ占メ全瀆家
屋二百三十九軒壓死者二十人ヲ出スニ至レリ此地震ニ就テハ

當時小藤、關谷兩博士ノ實地調查セラレタルアリ其結果ヲ綜
合スルニ震原ハ金峯山ニアリシモノ、如シ金峯山ハ一ノ死火
山ニシテ曾テ文政九年ニ於テモ六十日間地震鳴動セリト云フ
此既往ノ地震鳴動ハ今回ノ地震ト共ニ死火山ニ特有ナル地震
活動ナリシナルベシ餘震ノ數モ頗ル多ク同年八月十八日マデ
二十一日間ニ二百九十二回ヲ算セリ

發震時ハ凡ソ午後十一時四十分ニシテ感覺アル震動ハ五分時
間繼續セリ震災ノ比較的ニ大ナリシハ熊本市、高橋町、小島
町等金峯山ノ東南麓ニ位スル卑濕ノ地ニシテ多數ノ倒潰家屋
及ビ死傷者ヲ出シ火山性地震トシテ極限ノ震度ヲ示セリサレ
バ此等ノ區域ニ於テ恐慌混亂ヲ起セルハ止ムヲ得ザル所ナル
ガ越エテ八月三日午前二時十八分ニ於テ餘震ノ大ナルモノ襲
來スルニ及ビ人心ノ危惧ハ一層甚シク加フルニ金峯山將ニ破
裂セントストノ流言ヲ生ズルニ及ビ事態其極ニ達シ士民ハ荷
擔シテ難ヲ近郷ニ避ケ熊本市ノ如キハ街上人ナク一二ノ銀行
モ休業スルニ至レリ幸ニ出張セル博士等ノ說ニヨリテ人心モ
次第ニ鎮靜シ讒ニ事無キヲ得タリト云フ今日ヨリ之ヲ見ルト
キハ事實ヲ誇大セラレタルガ如キ感アレドモ當時餘震ニ關ス
ル知識乏シク又死火山ニ對スル見解モ今日ノ如クナラズ且ツ
該地方ハ大地震ノ經驗ヲ有セザリシ（續日本紀ニ曰ク天平十
六年五月肥後地震ヒ天雨フル此時地二百八十個所ニ破裂シ又
天草、八代、葦北ノ諸郡水害ヲ被リ人命ノ損失無慮千五百人
ナリシト斯ノ如ク肥後一國ニ限リタル震災ハ天平以後其記錄

城震震地圖二 第



ナシ）ヲ以テ前記ノ如キ混亂ニ陥リシハ是亦止ムヲ得ザル所ナリトス

此地震ノ概念ヲ得ント欲セバ左ノ各市郡ニ於ケル震災表及び第二圖（震城圖）ヲ一覽スルヲ以テ捷路トスベシ附記ス金峯山ハ當時疑問ノ中心タリシガ阿蘇山ニ對シテモ亦注意ヲ拂ヘリ但シ後者ハ何等ノ異狀ヲ呈セザリキ

第二表 市郡震災表

合計	宇土郡	下益城郡	上益城郡	合志郡	菊池郡	山本郡	山鹿郡	託麻郡	玉名郡	飽田郡	熊本市	種別	
												市 郡	家 屋
三九	一	二	四	一	八	二	三	二	一	五	三	全潰	
三三	一	一	一	一	六	四	三	三	二	三	二	半潰	
二〇	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	死 傷	女男
二七	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	負傷	女男
二三	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	裂地	
二二	一	二	三	二	六	四	二	一	一	五	三	道路	
二一	一	一	三	一	一	三	四	四	一	九	一	崩	
一八	一	一	一	二	一	一	一	一	一	三	一	山林	
一三	一	一	一	一	五	二	六	三	二	三	一	耕宅地	
一五	一	一	四	一	一	一	一	一	一	二	一	堤防	
一四	一	二	四	一	一	一	一	一	一	三	一	壞落	
一三	一	一	三	一	一	一	一	一	一	二	一	破損	
一元	一	一	一	一	一	二	二	一	一	五	一	増	
一二	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	減	
一三	一	一	一	一	二	三	三	三	一	七	三	濁	井水

熊本市ノ状況 家屋、器物、石碑等倒レ溪泉、河川、池沼等水溢ル主要ナル震動ノ方向ハ概シテ南北ニシテ家屋或ハ石碑等概不南ニ向シテ顛倒シ土壁ノ如キハ東西ニ面セシモノノ破損多カリキ裂地ハ十三ヶ所ニシテ延長凡ソ八百十七間ニ及ビ幅廣キハ三寸ニ至レリ特ニ大ナリシヲ長サ四百間ニシテ幅一寸ナルモノトス其方向ハ南北ナルモノ大多數ナリキ家屋ノ被害ハ概シテ北部坪井町寺原町出町等ニ多ク南部ハ稍輕シ尙ホ

之ヲ詳細ニ検スルトキハ左ノ如シ

熊本縣廳

一、廳舍ノ壁ノ龜裂 室外百三十九坪許 室内、廊下、天井百七十九坪餘

一、窓下雨切ノ墜落 四ヶ所

一、廳舍胴服ノ墜落 四間

一、附屬舍ノ壁ノ破損 十四坪餘

一、土藏下家葺留慰斗瓦葺ノ破損 三十間

一、人民控所外壁ノ破損 九坪

一、廄外壁ノ破損 五坪

一、門衛所ノ壁ノ破損 八坪

一、官舍外壁ノ破損 一番官舍三十八坪、二番官舍四十一坪、三番官舍四十一坪、四番官舍五十二坪、五番官舍二十二坪

第六師團

一、家屋周壁及ビ瓦ノ破損又ハ基礎ノ動搖若シクハ彎曲セ

シモノ 百五十五棟

一、玄關ノ瓦ノ轉倒セシモノ 十五棟

一、家屋ノ半倒セシモノ 五十一棟

一、土藏ノ破損セシモノ 二十棟、

一、煉瓦石造ノ破損セシモノ 二棟

一、柵ノ倒レタルモノ 百二十二間

一、柵ノ傾キタルモノ 四百六十八間

一、土塀ノ傾斜シタルモノ 百三十五間

一、井戸ノ破損シタルモノ 二十ヶ所

一、下水道ノ破損シタルモノ 二百五十九坪

一、土壘、石崖、的阜ノ決壊シタルモノ 百八十五坪

一、通用門ノ破損シタルモノ 三ヶ所

一、石垣ノ崩壊 二十九ヶ所、八百二十坪

一、崖ノ崩壊 五ヶ所、三百六十坪餘

一、各局周壁ノ龜裂 數ヶ所

一、構内地盤ノ決裂ノ延長 五六間

一、石垣ノ崩壊ノ延長 十三間餘

熊本郵便電信局

一、壁ノ破損 外面階下高サ一間幅二十間、角石壁三間

一、土藏軒下ノ破損 高サ二間、幅八間

元熊本遞信管理局

一、舍壁及ビ土藏ノ破損 數ヶ所

第五高等學校 異狀ナシ

熊本市役所

一、周壁外面ノ破損 少々

以上ハ市内ニ在ル各官衙ノ狀況ナルガ尙ホ一般ノ觀察ハ左ノ如シ

京町方面

一、觀音橋ハ東西ノ橋基際ヨリ裂ケタルモ通行ニハ先ヅ差支ナシ

一、觀音坂ハ北方石垣數十間崩壊附近宅地少シク損ジ其石垣上ノ宅地裂ケ通行ニ危険ナリ

一、加藤神社一ノ鳥居ヨリ二ノ鳥居迄ノ道路堀際裂ケタルモ石垣等ニ異狀ナシ

一、元二ノ丸門際(石間、石垣)七合目位ヨリ上部横七間崩壊ス

一、向臺寺町北方屋敷石垣崩壊ス

一、出京町筋ニ於テ下家一ヶ所倒レ老人下敷ニナリシモ難ヲ免ル

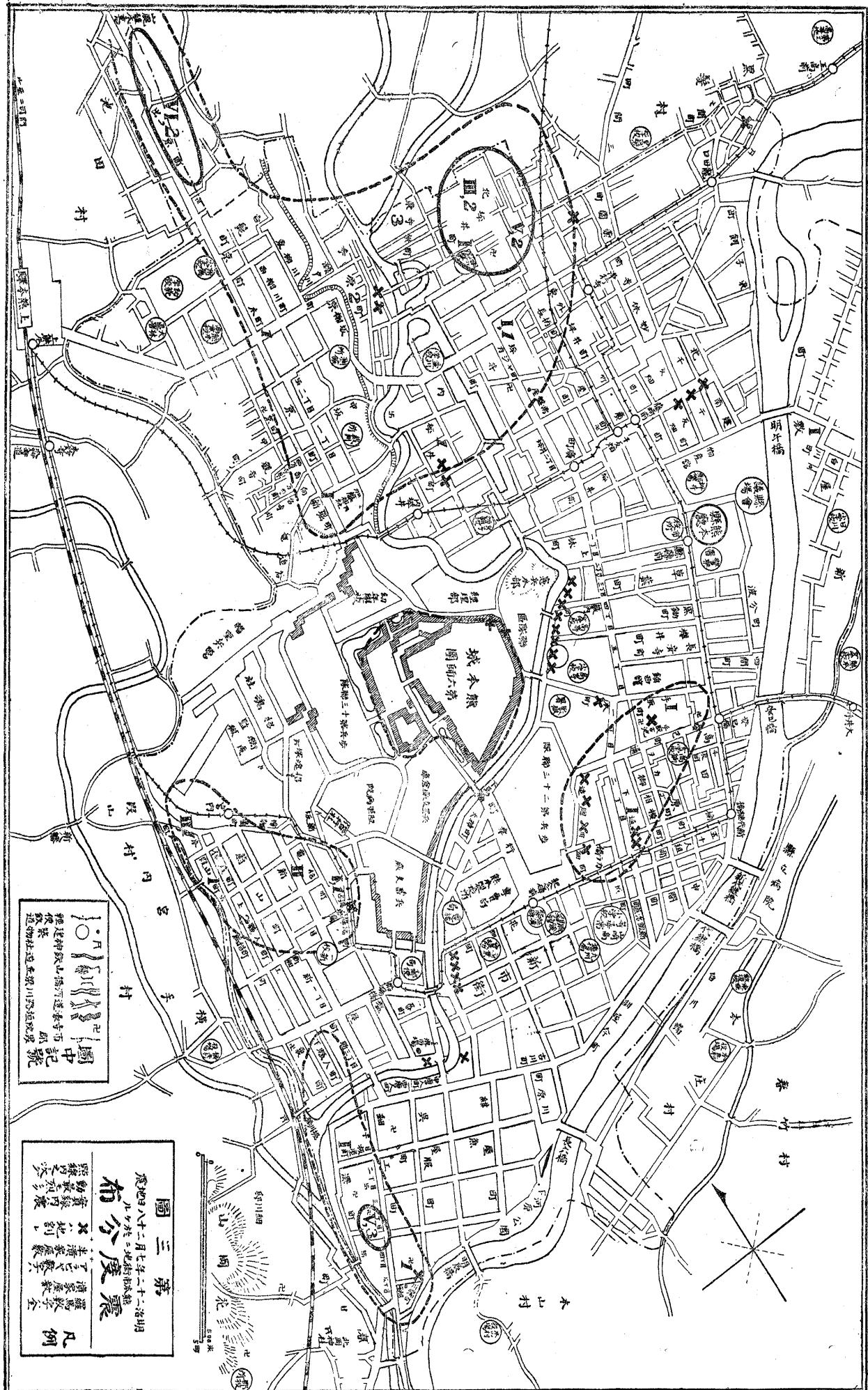
南部下町方面

一、下通町四丁目ニ倒家一軒但シ死傷ナシ

一、山崎町炊事場一棟右ニ同ジ

一、三年坂交番所南側道路ヲ横ギリ地裂ケ(小)三ヶ所

一、下通町道路横或ハ斜ニ地裂ケ(小)各一ヶ所



一、長六橋南ノ橋基際横ニ地裂(小)一ヶ所

リ廄屋橋ノ間ニモ三ヶ所ノ裂ケ目アリ其大サ前者ト同様ニノテ河ノ生道路又ハ川ニ皆ニ一方墜落ノ伏アナセリ

リ廄屋橋ノ間ニモ三ヶ所ノ裂ケ目アリ其大サ前者ト同ニシテ河レモ道路又ハ川ニ沿ヒ一方墜落ノ状ヲナセリ

一、熊本活版舎側古城ニ入ル橋梁ノ上部破損廣サ三間四方

一 堀端活版舎四ツ角ヨリ起ツ堀ニ沿ヒ地裂ケ
三十間製ケ用ノ架サ四五斗幅一寸乃至四五寸

一、右堀端町古城灰質ノ藏石崩壊

一、同町家二軒半バ破壊ス

紅屋記一丁

一、細工四丁目裏一駄橋破壊橋際家二間崩ル

一、板屋町土藏二棟外壁崩ル
二、石尾町重三郎一間主

高麗門塹津緑ニ長一間許土崩ル長國寺門ニ土崩リ少々
蔚山町四軒倒レ懸ケ新町一丁目一軒潰ル

一、明十橋破壊シ通行シ難シ唐人町川筋石垣崩壊ス

一、進步銀行倉庫外壁十五間許倒化
一、高麗門土喬(唐川喬)止來，中止

高麗門二橫

一、同町一軒外壁十二三間倒化

一、同所妙延寺ニ至ル小橋崩レ通行シ難シ同所實成寺外壁
及び本堂間壁悉ク崩壊

一、洗馬橋ヨリ下馬橋ニ至ル道路上ニ點々數條ノ裂ケ目ア

リ長サ二十間乃至三十間深サ六七寸以下

ケ目アリ長サ十間乃至十五間深サ四寸以下又監獄署角ヨ

卷之三

數ニ加フルニ半潰家屋數ノ半ヲ以テシタルモノヲ總戸數ニ對シテ其百分率ヲ算出セルナリ

第三圖ハ熊本市街地ニ於ケル震度分布ヲ示スモノニシテ上表ニ於ケル家屋被害百分率並ニ震度ノ輕重ヲ區別スル線ヲ記入セリ此ノ中赤色ノ實線ハ震度最大ナル區域ニシテ其最モ著シキヲ北部ノ中坪井、北坪井ノ地域トシ北端ナル出京町ノ區域及ビ南端ナル細工四丁目ノ區域之ニ次グ此等ノ區域ヲ圍繞シタル一層廣大ナル區域（赤色ノ點線ヲ以テ境セラレタル部分）ハ震度前者ノ次位ニシテ而モ他ノ安全區域（境界線ナキ部分）ニ比較シテハ被害多シ此程度ノ區域トシテハ猶ホ右ノ外熊本城、古城堀端及田端邊ヲ各中心トスル部分アリ

以上ノ如キ震度分布ヲ生ズル原因ハ震原ニ對スル地形ニモ存ズルコトナレドモ土地ノ構造ハ其最モ重要ナルモノナリ此關係上地震ノ際生ジタル地裂線ハ重要ナル参考トナルモノナレバ之ヲ震度分布圖ニ記入セリ熊本城築造以前ノ模様ヲ肥後國誌、熊本城史梗概等ニ據ツテ案ズルニ熊本市街地ハ金峯山彙東南東ノ平地ニ在リテ城地ノ位置ニハ火山泥ト岩屑トヨリ成レル阜丘アリ之ヲ茶臼山ト云フ此阜丘ハ北々西ニ向ヒ次第ニ狹隘トナリ遂ニ一條ノ鞍部ヲ作リ以テ出京町北方ノ臺地ニ接續セリ又市街地ノ西方ニハ井芹川アリ東方ニハ白川アリ其中央ヲ流ル、ヲ坪井川トス茶臼山ハ坪井、井芹ノ二川ヲ以テ東西ヲ限リ東部ハ絶壁ヲ以テ坪井川ニ蒞ムモ西部ハ勾配緩ナリ坪井川ハ坪井町ノ邊ニ於テ廣漠タル地沼ヲナシ下流ハ手取、

田端ヲ經テ現今ノ長六橋ノ南ニ至ツテ白川ニ合ス或ハ白川ハ小幡淵ヨリ西走シテ坪井川ニ入リシトモ言ヘリ曾テ斯ノ如キコトアリシナランモ其ハ恐ラク本流ニアラズシテ一時氾濫ノ結果ナリシナランカ本妙寺内淨池公廟碑ノ銘ニ曰ク（略前）都下壺川舊入白川、白川水迅難碩、下流積沙易致填壅、公慮失船故都下皆蒙其利、云々即チ此銘ニ據レバ壺川即チ坪井川ガ前記ノ如ク長六橋ノ南ニ至ツテ始メテ白川ニ合セシモノ、如シ又若シ小幡以西ニ白川ノ本水路アリシナランニハ其痕跡著シク現ハレザルベカラズ特ニ川床ノ遺跡ハ地震ニ際シ震度頗ル强大ナル部分トシテ現出スルヲ通常トスルニ此場合ニ於テハ坪井小幡間ニ斯ノ如キ關係存在セザルニアラズヤ

以上ハ丘阜河川ノ大觀ナルガ尙ホ稍詳細ニ觀ルトキハ坪井川、井芹川ノ川筋ニハ池水沼澤、田地モ多カリシナルベシ今其一二ノ事蹟ヲ擧グ

長柄小路

本坪井町ノ東南ニアリ昔此邊ハ泥田澤水ニテ廣

キ濕地ナリキ

本坪井町起原 往日此邊ハ壺井村ノ田地ニシテ即チ此處ハ壺井村ノ迹、慶長四年地ヲ夷シ検考シテ清正侯城下ノ市店トナストキ民衆追々諸方ヨリ集リ來リ忠廣侯ノ時ニ至リテ成就ス又元町筋ノ南裏ニハ大ナル溜池アリキ

家鷗丁 寺原大工町西裏岸下ノ町ヲ云フ舊日淨國寺境内ニシテ大ナル池ノ迹ナリ泥土深クシテ人家ヲ築造シ難シ水草

田端ヲ經テ現今ノ長六橋ノ南ニ至ツテ白川ニ合ス或ハ白川ハ小幡淵ヨリ西走シテ坪井川ニ入リシトモ言ヘリ曾テ斯ノ如キコトアリシナランモ其ハ恐ラク本流ニアラズシテ一時氾濫ノ結果ナリシナランカ本妙寺内淨池公廟碑ノ銘ニ曰ク（略前）都下壺川舊入白川、白川水迅難碩、下流積沙易致填壅、公慮失船故都下皆蒙其利、云々即チ此銘ニ據レバ壺川即チ坪井川ガ前記ノ如ク長六橋ノ南ニ至ツテ始メテ白川ニ合セシモノ、如シ又若シ小幡以西ニ白川ノ本水路アリシナランニハ其痕跡著シク現ハレザルベカラズ特ニ川床ノ遺跡ハ地震ニ際シ震度頗ル强大ナル部分トシテ現出スルヲ通常トスルニ此場合ニ於テハ坪井小幡間ニ斯ノ如キ關係存在セザルニアラズヤ

菰蒲生茂リ鴨家鴨ノ類ヲ放飼セル故家鴨丁ト稱セリ享保年間坪井大火ノ後泥土ヲ埋メテ屋敷トス 手取古池 往時白川（坪井川カ）ノ流此邊ヲ通リシ迹ニ大ナル池アリテ魚鼈多ク生ズ

慶徳堀 山崎ノ南今ノ船場二丁目ノ邊深廣ナル溝アリ漸々ニ埋メテ今ヤ市店ノ裏ニ纔ニ其迹ノミ残レリ

田端（追廻田畠） 山崎ト高田原ノ間ニ在ル水田ヲ云フ古河原田ト稱ス往昔坪井川此處ヨリ白川ニ落合ヒキト云フ

慶長年間加藤清正熊本城ヲ築クニ當リテ山河其舊態ヲ改メタルハ自ラ其所ナリ其最モ著明ナルモノヲ二トス一ハ即チ茶臼山ノ加工ニシテ二ハ坪井川水路ノ變更是レナリ茶臼山ノ加工ハ或ハ低キヲ埋メテ臺地トナシタルモノアルベク又高キヲ削リテ平地トナシ若シクハ掘鑿シテ溝トナシタルモノアルベク而シテ此工事ハ啻ニ城地ノミニ止マラズシテ其周圍ニモ及ビタルナルベシ斯ノ如キ地變ニシテ地震ニ影響ヲ與フルハ埋立テ若シクハ築キ上ダラレタル土地ナリトス是ハ城内各所ニ存在スルノミナラズ城ノ北部地域ニモ擴ガルモノト思ハル現ニ出京町ノ街道筋ハ高低ノ凸凹ニ富ミ加工ノ跡歷然タリ凡ソ埋立地ハ地震ニ際シ土地ノ震動擴大セラル、ヲ以テ熊本ノ城地竝ニ其以北ノ地ニ於テ被害ノ比較的大ナリシハ天然地盤ノ間ニ錯綜シテ存在セル埋立地ニ基因スルモノナルベシ

坪井川ノ水路變更モ亦築城ニ際シ著シキ變動ヲ蒙リタルモノノ一ニシテ前ニ述べタルガ如ク舊水路ハ山崎城趾ノ麓ヲ經テ

南走シ手取、田端ヲ過ギテ長六橋ノ南方ニ於テ白川ニ合流セシモノナルガ新水路ハ藤崎臺ヲ繞リテ南西ニ向ヒ城ノ外濠ヲ作リ終ニ井芹川ニ合流スルモノナリ以上ノ異變中地震ニ關係アルヲ舊水路ノ遺跡ナリトス即チ市街震度分布圖ニ於テ大小長短ノ地裂線ハ點々之ヲ示セリ尙ホ町家ヲ開クニ當リ次第ニ埋立テラレタル沼池或ハ田地跡モ亦同様ノ結果ヲ生ジタルコト勿論ナリ

郡部ノ狀況 飽田郡ハ震央地金峯山ヲ有シ土地ノ陥沒隆起、龜裂等ノ地變最セ多ク又高橋町、小島町、川尻町ノ如キ被害

最大ナリシ市街ヲ含メリ主要ナル震動ノ方向ハ概ネ西北及び東南ニシテ家屋ハ概シテ東南ニ向ツテ倒レタリ土地ノ龜裂ノ最大ナリシハ金峯山彙中ニ於ケル芳野村大字野毛ニ於ケルモノニシテ長二百五十間幅三尺餘アリキ又土地ノ陥沒隆起ノ最大ナリシハ小島町大字下松田ニ於ケルモノニシテ地震前高低ノ差一尺餘ナリシ田ト畠トノ中前者（面積二町五反步餘）ハ八寸餘隆起シ後者（面積二町二反步餘）ハ却ツテ八寸餘ノ陥沒ヲナセリ又黒髪村大字立田村ニ於ケル煉瓦製造所（熊本監獄管理）ニ於テハ家屋三棟潰レ竈二個破壊シ煉瓦二萬本ヲ損セリ

震度飽田郡ニ亞グヲ託摩郡及ビ玉名郡ニ於ケル主要震動ノ方向ハ東南ヨリ西北ニ向ヒ又震度モ東南ニ於テ大ニシテ西北ニ遠ザカルニ隨ヒテ次第ニ輕シ而シテ彌富村大字立願寺ガ甚シク震動シ僅ニ十町餘ヲ隔タレル石貫村ガ震度輕微

ナリシハ前者ガ洪積層上ニアルニ反シ後者ハ花崗岩上ニ立テルニヨル又横島村ニ於テ大字京泊ハ震度甚ダ大ナリシニ拘ラズ大字大園ニ於テ人皆熟睡シテ動搖ヲ多ク感ゼザリシハ前者ガ暴露セラレタル海岸ノ埋立地ナルニ反シ後者ハ其東南ニ横タハレル安山岩ノ阜丘ニヨリ東南ヨリ進行シ來レル震動ヲ遮ラレシニヨルナリ玉名郡ノ東南部ハ震央地ニ接續スル山地ナルヲ以テ土地ノ變動夥シク特ニ山北村大字西安寺字久満防ニ於テ南西部崖地ノ割裂百餘間ニ及ビシカバ同字殆ンド舉ツテ轉居ノ止ムナキニ至レリ

託摩、玉名ノ二郡ニ次ギテ震度ノ大ナリシヲ上益城、山鹿、山本ノ三郡トス上益城郡内ニ於テ震動特ニ大ナリシハ木山町ヨリ西南西ニ當リ綠川流域中沖積層ニ屬スル土地ナリ但シ此等ノ區域ト震原地方トノ間ニハ比較的ニ堅牢ナル洪積層ノ區域ガ西南西ニ向ツテ突出セリ又山本郡ニ於テ震動大ナリシハ震央地ニ近キ洪積層ノ土地多キニ因リ之ニ反シ山鹿郡ガ稍遠隔ノ位置ニテ而モ震動著シカリシハ比較的ニ堅牢ナル地盤ニヨリテ圍マレタル冲積層上ニ多クノ町村ヲ有スルニ由レリ以上列記セル外下益城、菊池、宇土、合志、八代等周圍ノ諸郡ニ於テハ震動次第ニ輕減セリ是レ啻ニ震央距離ノ大トナルガ爲メノミニアラズシテ第三紀層、古生層、花崗岩、火山岩等堅牢ナル地盤ニヨリ裂震區域ノ外壁ヲ築クニ由レリ

今左ニ前記諸郡ニ於ケル震災表ヲ掲グ
第四表 郡部町村別震災表

第九十二號 九州地震帶

玉名郡（總戶數八明治三十二年調）

山本郡（總戶數小計八推定）

前表被害百分率ヲ用ヒテ震度分布ヲ畫キタルヲ第二圖トス此圖ニ於テ赤色ノ實線ハ被害百分率一〇以上ノ區域ヲ劃シ同色ノ點線ハ被害百分率〇・一以上ノ區域ヲ劃スルモノトス今

最大被害ノ區域ヲ追跡スルニ其主要ナルモノハ金峯山ヲ中心
トスル一區割ナリ但シ此區域ハ金峯山彙ト必シモ同心圏ヲナ
サズシテ寧ロ東、西及ビ南西部ニ突出セリ其東南部ヲ阻止セ
ルモノハ前ニ記シタルガ如ク此區域ト綠川流域トノ間ニ突出
セル洪積層ノ西端ヲ繞リテ川尻町ヲ圍繞スル最大被害區域ト相
此洪積層ノ西端ヲ繞リテ川尻町ヲ圍繞スル最大被害區域ト相
呼應スルノ勢ヲ示シ又此洪積層ヲ越エタル部分ニ於テ再ビ其
鋒銛ヲ健軍、畫圖ノ小區域ニ表ハセリ震央ノ決定ニツキ被害
ノ程度ニ最モ重キヲ措クトキハ金峯山彙中ノ芳野村ヲ取ルベ
シト雖モ其以北ノ區域ハ同ジ安山岩上ニアリテ震度急ニ輕ク
ナリシカノ感アリ火山彙ノ主峯タル金峯山ヨリモ稍東方ニ
偏シ荒尾嶽ニ接近セル位置ヲ震央トスベシ

速ニ衰退シテ遠方ニ擴ガルニ至ラズ是レ一ハ震原ガ淺カリシ
ニ由ルナラン又西北方ニ於テ稍々遠ク擴張シタリシハ金峯山
彙ノ安山岩ガ高瀬町附近迄擴ガリシニ由ル之ニ反シテ震度東
方ニ發展セザリシハ廣漠タル洪積層ノ原野及丘陵ノ存在ニ關
スルモノニシテ山鹿郡ノ一廓ニ於テ再ビ稍著シキ震度ヲ示
ナル地盤ニ圍マル、ニ由レリ之ヲ要スルニ震原ヲ金峯山ノ主
峯ヨリ東方凡ソ一里ニ於テ餘リ深カラザル位置ニ取ル事ハ前
記ノ如キ震度分布ヲ生ズルニ足ルベシト思惟セラル、ナリ

以上ノ方法ニヨリ又熊本市ニ於ケル餘震ノ觀測ニ於テ其震動
ノ方向主トシテ北々西ナルコトヲ顧慮シテ震央ヲ決定スルト
キハ其位置東經百三十度四十分、北緯三十二度四十九分半ヲ
得第二圖ニ於テハ赤色十文字ヲ以テ之ヲ示セリ
餘震 餘震ハ主要地震ノ大サニ比較シテ其數割合ニ多ク最初
ニ記シタルガ如ク初發ヨリ八月十八日ニ至ル二十一日間ニ二
百九十二回ヲ算セリ是レ熊本縣廳ニ於テ記錄セル所ナルガ當
時關谷博士ハ地震計ヲ携ヘテ震災地ニ出張シ八月十二日ヨリ
同十八日マデハ金峯山中芳野村大字嶽ニ於テ驗測シ引キ續キ
器械ヲ金峯山ノ南麓城山村大字大塘即チ高橋町外ニ移シ以テ
八月二十九日ニ及ベリ爾來器械ハ之ヲ縣廳内ニ移シ年ヲ踰エ
テ猶ホ驗測ヲ繼續シタリキ今縣廳ニ於ケル初期ノ目測ニ其後
ノ器械觀測ヲ加フルトキハ餘震總數ハ次表ニ示スガ如ク五百
六十六回トナル

第五表 餘 震

月 日	種 別	計				
		一	二	三	四	五
八月 三十一日	○○○○○	○	○	○	○	○
二十九日	一	一	一	五	三	三
三十日	一	一	一	三	一	四
一	○	○	六	三	一	〇
二	七	四	二	三	三	三
三	八	二	一	五	七	〇
四	九	八	七	六	五	四
五	八	九	八	七	六	五
六	九	八	九	八	七	六
七	一	一	一	〇	二	一
八	一	五	三	五	五	二
九	一	六	〇	五	六	九
十	二	二	四	二	二	三

第九十二號 九州地震帶

*初期微動五秒間繼續セシモノ、如シ

以上ノ餘震中震度稍強ナルモノヲ選ビ其主要動ノ方向ヲ見ルトキハ九月七日(最大動一〇厘)ハ東南、同十九日(最大動七

厘) ハ北々東、十月一日(最大動一二厘) ハ北々西、十月十六日(最大動六厘) ハ北々西、十一月三十日(最大動六厘) ハ北々西、十二月八日(最大動一〇厘) ハ北々西ナリ即チ六回ノ地震中一ヲ除クノ外ハ震動ノ方向概シテ相一致シ北々西ヨリ北西ノ間ヲ示セリ餘震ノ震原ハ主要地震ノ震原ト必シモ相一致セザレドモ今回ノ如キ火山性地震ニ對シテハ甚シキ相違ハアラザルベク少ナクモ多少ノ参考トナルベキモノタリ故關谷博士ガ其病驅ヲ呵シテ本地震ノ器械觀測ニ從事セラレタリシハ其效果前記以外ニモ猶ホ多カルベキモ余ハ本問題ノ講究ニ於テ同觀測ヨリ有益ナル資料ヲ得タルヲ喜ビ茲ニ故博士ニ對シテ敬意ヲ表スルモノナリ

乙 明治二十七年八月八日ノ阿蘇地震

此ノ地震ハ阿蘇山ノ西麓ニ起リタルモノニシテ熊本市ニ於テ
ハ初期微動四秒間繼續セリ其勢力ハ去ル明治二十二年ノ熊本
地震ト大差ナク唯震原地方ノ地盤堅牢ナルガ爲メニ數十軒ノ
家屋土藏ニ破損ヲ生ジタルニ止マリキ餘震數ハ同月三十一日
ニ至ル二十四日間ニ百二十一回ヲ算セリ

丙 明治二十八年八月二十七日ノ阿蘇地震

丁 明治三十一年十二月四日ノ肥後東部ノ地震
此地震ハ前二者ガ阿蘇山ノ西麓ニ於テ起リシニ反シ同山ノ東
麓ニ於テ起リタル強震ニシテ強震區域ハ約千六百方里ニ達シ
此區域内ニ於テハ壁ノ龜裂物品ノ顛倒ヲ生ジタリシト雖モ震
度比較的ニ大ナラザリシハ震原ノ深カリシニ由ルナルベシ大
分ニ於ケル初期微動繼續時間ハ五秒間ナリシト見テ大差ナカ
ルベシ

戊 大正五年三月六日ノ竹田地震

此地震ハ強震部六百三十方里ニ達シ一說ニヨレバ震原ハ別府附近ニアリトノコトナルガ震動ヲ最モ強ク感ジタルハ豐後ノ南西部大野直入ノ二郡ニシテ大野郡三重町ニ於テハ忠魂碑（竿石高サ六尺五寸幅三尺七寸厚サ一尺二寸、臺石第一層十二尺角高サ四尺第二層八尺角第三層六尺角第四層四尺五寸角第二層乃至第四層高サ各一尺）ノ北々東ニ倒レタルモノアリ直入郡宮砥村ニ於テハ墓碑（竿石七寸角高サ一尺二寸、臺石第一層一尺八寸角高サ七寸三分第二層一尺二寸角高サ六寸）ノ北微西ニ倒レタルモノアリ前者ハ竹田町ノ東方四里、後者ハ南々西二里半ノ位置ニ在リ各地ニ於ケル感覺ハ左ノ如シ

同	馬見原町	弱	水平動
同	竹田町	強（稍，弱）	
長湯村	宮砥村	同	水平動、墓碑一個倒ル
弱			
水平動			

己　大正五年三月十五日ノ阿蘇山北麓ノ地震
大分測候所ニ於ケル地動計ハ此日午前六時二十三分ト同六時
四十五分トニ於テ前後二回ノ地震ヲ記録セリ前者稍大ナル

下益城郡西砥用村	同	水平動、聲響アリ
玉名郡	高瀬町	同 水平動
熊本	市	同 水平動
球磨郡	人吉町	上下動、性質緩
弱	弱	水平動

大野郡	今市村	強（稍弱）	水平動、上下動
同	三重町	同	水平動、忠魂碑一個倒ル
同	東大野村	同	
南海部郡佐伯町	強（稍弱）	水平動、上下動	
速見郡	別府町	同	
同	北由布村	弱	
大分郡	西庄内村	同	
玖珠郡	野上村	同	
下毛郡	城井村	同	
西國東郡高田町			
同			

モ兩者ノ形式全ク同一ニシテ共ニ同一震原ヨリ起リシコトヲ想像シ得ベシ其初期微動繼續時間六秒ヲ算ス一説ニヨレバ其震原前者ハ別府附近ニシテ後者ハ肥後菊池郡ニ在リキトノコトナレドモ前記諸項並ニ左記震域ヲ綜合スルトキハ兩者共ニ

阿蘇山ノ北部裾野ニアリシコトヲ思ハシム震域概要左ノ如シ

午前六時二十三分ノ地震

震度強 阿蘇郡宮地町、菊池郡隈府町、飽託郡春日町

震度弱 阿蘇郡馬見原町、同北小國村、玉名郡高瀬町、熊

本市、宇土郡三角町、球磨郡人吉町、南海部郡佐伯

町、玖珠郡野上村

震度弱（稍、弱）直入郡竹田町、同長湯村、大野郡今市村

同犬飼町、日田郡日田町、同中津江村、玖珠郡森町

北海部郡佐伯町、大分郡西庄内村、速見郡別府町、

宇佐郡南院内村、下毛郡中津町

震度微 宇佐郡四日市町、直入郡宮砥村、北海部郡佐賀關町

町

午前六時四十五分ノ地震

震度強 菊池郡隈府町

震度弱 玉名郡高瀬町、阿蘇郡北小國村

震度弱（稍、弱）大分郡西庄内村、宇佐郡南院内村

震度微 阿蘇郡宮地町、阿蘇郡馬見原町、直入郡竹田町、

同宮砥村、玖珠郡野上村、下毛郡城井村、西國東郡

高田町

以上ノ觀測點ニ於テ隈府ハ沖積層上ノ町村中最モ震原ニ近キ位置ニアルヲ以テ兩地震共ニ比較的ニ強ク感ジタルノミナラズ後者ノ發生少シ前ニ更ニ輕微ナル地震一回ヲ感ジタリ

第三款 火 山

甲 阿蘇山

阿蘇山ハ其噴火ノ記錄古ク且ツ其度數ノ頻繁ナルコト淺間山ニ比スペクシテ之ニ優リ全國ノ火山中第一位ニアリ但シ噴火餘リニ頻繁ナルガ爲メニ勢力激烈ナルハ比較的ニ少ク天明ノ淺間噴火ノ如キ慘害ヲ與ヘタルコトハ絶無ニシテ霾ト稱スル降灰ノ害ハ間々之レ有リ此爲メニ阿蘇南北兩鄉ノ田園ヲ荒廢セシメ又白川ニ入リテ魚介ヲ死滅セシムルニ至ルコトアリ阿蘇山ノ地質構造ニ就イテハ伊木理學士ノ報文（本會和文報告第三十三號）アリ外輪山ノ直徑東西四里南北六里餘ニシテ世界最大ノ火口ナリト稱セラル但シ同理學士ノ説ニヨレバ是ハ土地ノ陷落ニヨリテ生ジタルモノナリトノコトナレバ外輪山ノ内部全體ヨリ噴火シタリト速斷スベカラズ中央火口丘竝ニ活火口ノ排列ニハ阿蘇系ノ火山ニ特有ナル點アリ火山帶ノ線即チ東西ニハ西ヨリ算ヘテ烏帽子岳、中岳、高岳、根子岳アリ更ニ西方ノ引長上ニ立野火口瀬アルヲ發見ス是レ即チ火山帶ニ並行ナル裂線ヲ示スモノナルガ更ニ之ニ直角ナル裂線上ニ他ノ中央火口丘アリ北ヨリ算ヘテ杵島岳、往生岳、烏帽

子岳、御竈門山トナス尙ホ現時唯一ノ活火山タル中岳ノ有スル數箇ノ噴火口ガ略ボ南北ノ向キヲ取ルモ構造上當ニ然ルベクシテ偶然ノ結果ニハアラザルナリ

阿蘇山ノ活火口ハ中岳ノ頂上ニ在ル三個ノ噴火口ニシテ三個

相接シテ南北ニ並列ス（震災豫防調査會報告第三十三號伊木

理學士報文參照）北ニ在ルモノヲ北ノ池或ハ一ノ池（第四圖

1）ト稱シ中ニ在ルヲ中ノ池或ハ二ノ池（同圖2）トシ南ニ

在ルヲ法施崎南ノ池或ハ三ノ池（同圖4）ト稱ス噴火休止ノ際

何レモ大抵水ヲ湛ヘ噴火ニ當リテハ熱水ヲ迸出シ或ハ之ヲ涸

ラシテ噴烟ス古來北ノ池ヲ阿蘇ノ開祖、健磐龍命ノ居所トシ

中ノ池ヲ其妃阿蘇都媛、法施崎ヲ其子速瓶玉命ノ居所トセリ

此等ノ火口ノ外隣接セル二個ノ小火口アリ一ハ中ノ池ト法施

崎トノ間ニ介在シ（3）他ハ法施崎ノ南西部ニ寄生セリ（5）然

レドモ其活動ノ時代ハ沿革上詳ナラズ而シテ三個ノ大火口中

最モ多ク活動シタルハ北ノ池ニシテ中ノ池之ニ亞ギ法施崎又

之ニ亞グ伊木理學士ハ北ノ池ト中ノ池ト合シテ第一火口ト

名ヅケ以下順次ニ南方ニ算ヘテ第二火口、第三火口、第四火

口ノ名稱ヲ附セリ又納富理學士ハ北ノ池中ノ池ヲ區別シテ第

一火口ヨリ第五火口ノ名ヲ附シ更ニ明治三十九年火口ヲ新火

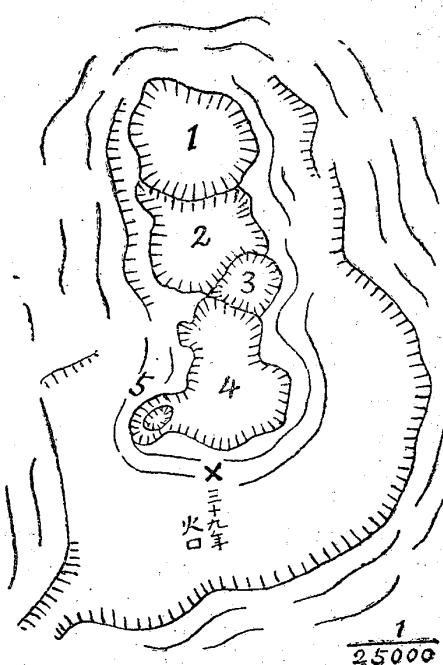
口トセリ尙ホ此等ノ火口ノ外ニモ其側壁上ニ時々新ニ噴口ヲ

求メテ噴出セルコト次ノ噴火記事ニ掲グルガ如シ

（因ニ記ス大森博士ハ最近ノ報文ニ於テ1ヲ北ノ池甲、2ヲ

北ノ池乙、3ヲ中ノ池トセラレタリ）

図四第 阿蘇山中岳ノ噴火口



第七表ハ下文噴火記錄ノ摘要ナリトス

第七表 阿蘇山噴火概表

番號	本邦曆	西紀	記事
----	-----	----	----

八	七	六	五	四	三	二	一
十 二 月 二 十六 日	寛 喜 二 年	承 和 七 年	貞 觀 六 年	十月 三 日	延 長 三 年	五百 五 十六 年	欽 明天 皇 十四 年
千 二 百 三 十 九 年	千 二 百 三 十 九 年	九 月 二 十一 日	八 百 四 十 年	八 百 四 十 四 年	八 百 五 十六 年	五百 五 十三 年	
一 月 八 日	一 月 八 日	五月 十一 日	十一 月 九 日	八 百 六 十七 年	六 月 二十 日	八 百 六 十七 年	
							此噴火後三百七十年間ハ史乘 徵スペキモノナシ 疑ハシ

二十九	文明十六年	千四百八十五年	一月五日	千四百八十五年
三十	永正二年正月	千五百六年	四月六日	千五百五年
三十一	永正三年三月三日	二月十五日	五月二十五日	二月十五日
三十二	大永二年正月九日	正月十五日	六月十五日	正月十五日
三十三	天文十一年三月五日	三月五日	七月十七日	三月三十三年
三十四	閏五月五日	五月五日	四月二十九日	四月二十九日
三十五	永祿元年二月上旬	二月上旬	四月二十九日	砂山ニツ池中ニ出ヅ
三十六	永祿五年四月一日	五月一日	五月三日	千五百四十二年
三十七	永祿七年十一月	十月十五日	千五百六十三年	千五百六十二年
三十八	天正元年七月	正月十九日	千五百七十三年	白河ノ魚死ス
三十九	天正四年正月十五日	正月十五日	十一月十五日	千五百七十六年
四十	天正十一年正月十五日	正月十五日	二月十七日	千五百八十二年
四十一	天正十五年正月十一日	正月十一日	十二月二十四日	千五百八十三年
四十二	天正十五年正月十一日	正月十一日	千五百八十七年	野ニ青草ヲ見ズ
四十三	天正十五年正月十一日	正月十一日	砂山ニツ出ヅ	野ニ青草ヲ見ズ
四十四	文祿元年正月十五日	正月十五日	翌年七月硫黃ヲ降ラシ野ニ青	野ニ青草ヲ見ズ
四十五	慶長三年十二月	十二月二十日	砂山出來ス	砂山出來ス
四十六	慶長十八年六月二十六日	六月二十六日	翌年ニ至ル	翌年ニ至ル
四十七	元和六年五月三日	五月三日	砂礫郡中ニ満ツ	砂礫郡中ニ満ツ
四十八	寛永八年十一月	十一月同		
二十八	文明五年十月	十月同		
二十九	延應二年文永二年十月十五日	文永二年十月十五日	同十一月朔日特ニ甚シ	同十一月朔日特ニ甚シ
三十	文永六年七月文永七年十一月十五日	文永七年十一月十五日	文永七年十一月十五日	文永七年十一月十五日
三十一	文永六年七月文永九年十一月十五日	文永九年十一月十五日	千二百六十九年	千二百六十五年
三十二	文永十年七月文永十一年四月十六日	文永十一年四月十六日	千二百七十二年	千二百七十一
三十三	文永十年七月文永十一年四月十六日	文永十一年四月十六日	千二百七十三年	千二百七十二
三十四	弘安四年六月弘安九年八月三日	弘安四年六月弘安九年八月三日	千二百七十四年	千二百七十五年
三十五	弘安四年六月弘安九年八月十日	弘安四年六月弘安九年八月十日	千二百八十一年	千二百八十六年
三十六	嘉元三年八月三日	嘉元三年八月三日	千二百八十六年	千五百二十二年
三十七	弘安四年六月弘安十一年九月七日	弘安四年六月弘安十一年九月七日	千三百五十五年	千五百三十三年
三十八	弘安四年六月弘安十一年九月七日	弘安四年六月弘安十一年九月七日	千三百五十五年	千五百三十三年
三十九	弘安四年六月弘安十一年九月七日	弘安四年六月弘安十一年九月七日	千三百三十二年	千五百三十三年
四十	弘安四年六月弘安十一年九月七日	弘安四年六月弘安十一年九月七日	元弘三年五月ニモ噴火ス	元弘三年五月ニモ噴火ス
四十一	建武二年正月五日	建武二年正月五日	中北池噴烟二月二十三日噴烟	中北池噴烟二月二十三日噴烟
四十二	興國二年正月四日	興國二年正月四日	一千三百四十一年一月二十九日	一千三百四十一年一月二十九日
四十三	興國四年天授元年十一月十九日	興國四年天授元年十一月十九日	一千三百四十三年	一千三百四十三年
四十四	興國四年天授元年十一月十九日	興國四年天授元年十一月十九日	一千三百七十五年十二月二十日	一千三百七十五年十二月二十日
四十五	中ノ池噴烟翌年正月十五日同	中ノ池噴烟翌年正月十五日同	中ノ池噴火天授二年正月二日	中ノ池噴火天授二年正月二日
四十六	中ノ池噴烟四月一日同	中ノ池噴烟四月一日同	法施崎	法施崎
四十七	中ノ池噴烟四月一日同	中ノ池噴烟四月一日同		
四十八	中ノ池噴烟四月一日同	中ノ池噴烟四月一日同		

翌年ニ至ル、北池中ニ砂山出
ヅ僧徒大半山ヲ去ル

阿蘇山噴火記錄

四十九	寛永十四年 八月十七日	千六百三十七年 十月五日
五十	寛文八年正月 慶安二年六月	千六百四十九年
五一	延寶三年正月 二月十六日	千六百七十五年
五二	天和三年五月	千六百八十三年
五三	元祿四年四月	千六百九一年
五四	寶永五年八月	千七百八年
五五	明和元年十二月 中旬	千七百六十五年
五六	寶永五年八月	千七百六十年乃 至千七百八十年
五七	安永年間	千七百六十五年
五八	天明年間	至千七百六十八年乃 至千七百八十年乃
五九	文化元年八月 二日	千八百四十年
六十	文化十二年	九月五日
六一	文政九年十月 二十三日	十一月二十六日小池生ズ
六二	文政十年四月	安永ニ亞ゲル大噴火ナリシナ ニモ小噴火ス
六三	文政十三年二月	九月二十三日新穴一ノ鳥居ノ 南側ニ生ズ
六四	安政元年正月 二十九日	四年(天保元年)六月二十三日 神池ノ西方ニ山生ズ
六五	安政元年正月 一日	二月二十六日
六六	明治十七年三月 二十一日	大噴火、白川ノ魚介死ス翌年 三月以後特ニ甚シ
六七	明治二十七年三月 六日	田園荒廢ス
六八	明治三十九年六月 八日	千八百八十四年
六九	明治四十三年四月 三日	千九百九十四年
七十	千九百六年	火口南側ニ新穴ヲ生ズ明治四 十二年ニ至ル降灰ノ害甚シ
七一	第三火口小噴火	

(一) 欽明天皇即位十四年(西暦紀元五百五十三年)阿蘇山ニ烟立ツ(阿蘇家傳池變ノ條ニ舊記云トセリ)

(二) 延曆十五年(七百九十六年)七月太宰府言肥後國阿蘇郡山上有沼其名曰神靈池水旱經年未嘗增減而今無故涸滅二十餘丈(日本後紀)

(三) 天長二年(八百二十五年)閏七月四日太宰府言肥後國

阿蘇郡神靈池無旱澇增減而無故涸渴二十餘丈(類聚國史、

日本紀略)

(四) 承和七年(八百四十年)九月二十一日太宰府奏阿蘇郡神靈池涸四十丈(續日本後紀)

(五) 貞觀六年(八百六十四年)十二月二十六日太宰府言肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命神靈池去十月三日(十一

月九日)夜有聲震動池水沸騰空中東西洒落其落東方者如布延繩廣十許町水色如漿黏著草木雖經旬日不消解又比賣神嶺元來有三石神高四許丈同二石神頽崩(三代實錄)

(六) 貞觀九年(八百六十七年)八月六日太宰府言肥後國阿蘇郡正二位勳五等健磐龍命正四位下(姬神缺カ)所居山嶺去五月十一日(六月二十日)夜奇光耀十二日朝震動乃崩廣五十餘丈長二百五十餘丈(三代實錄)

(此後國史モ備ハラズ社記モ全カラズシテ凡三百七十年ノ間ハ詳ナラズ)

ク前代未聞ト稱ス
翌年正月大ニ噴火シ寶池ト拜

所トノ間ニ烟穴多ク生ズ

甚シ末迄ニ至リ降灰ノ害最モ
秋ノ月詳ナラズ小噴火ナリシナ
ルベシ

年月詳ナラズ大噴火ナリシナ
ルベシ

(七) 寛喜二年七月二十六日(千二百三十年九月十一日)天

晴已時參相門云々鎮西阿蘇宮地水涌揚怪異事(明月記)

(八) 厲仁元年十二月二十六日(千二百三十九年一月八日)

靈池蛇形ハル、コト三十バカリ黒烟大ニ昇リ大小石ヲ雨フ

ラス(阿蘇山上奇瑞記)

(九) 延應二年(千二百四十年)池中大蛇九ツ現ス其中一ツ

最大ナリ水逆上スルヨト四五丈(同上)

(十) 永文二年十月十五日(千二百六十五年十二月一日)阿

蘇山復燃出セリ(一本ト言フノミニテ出處詳ナラズ)

(十一) 文永六年(千二百六十九年)七月阿蘇山ノ御池ヨリ

烟立ツ(肥州名勝略記)

(十二) 文永七年十一月十五日(千二百七十一年一月四日)

申時寶池鳴動如大地震一時ノ内二十四度、同八年地震如前

(阿蘇山上奇瑞記)

十一月十五日申時阿蘇山上烟始テ立ツ(肥州名勝略記)

(十三) 文永九年三月十日(千二百七十二年四月十六日)寶

池鳴動雷ノ如シ電光耀テ砂礫四方ニ散落池水涌出セリ同十

一月朔日(十一月二十八日)晝夜震動已マズ火石降下スル

コト雨ノ如シ(同上)

(十四) 文永十年(千二百七十三年)七月砂石ヲ雨シ雲ヲ霾

シテ闇夜ノ如ク火石空中ニ相擊ツ(阿蘇山上奇瑞記)

(十五) 文永十一年(千二百七十四年)中池涸渴シ火石ヲ雨

スコト殊ニ甚シク南北郷深谷陸トナリ高岸壑トナリ田野悉

ク荒レタリ奇變ニ非ズ(同上)

(十六) 弘安四年(千二百八十一年)六月ヨリ靈池焰火天ニ接シ石ヲ雨ス(同上)

(十七) 弘安九年八月三日(千二百八十六年九月十日)申刻鳴動シテ龍形ノ雲烟池中ヨリ起リ乾方ニ去ル(同上)

(十八) 嘉元三年三月晦日(千三百五年五月二日)申刻池中ヨリ日輪ノ如キ火三ツ出デ空ニ昇リ坤方ニ飛去ル(同上)

(十九) 正中元年八月十日(千三百二十四年九月七日)黒烟火石大ニ昇ル(同上)

(二十) 元弘元年(千三百三十一年)三月火大ニ燃エ烟中ニ龍形ハル、三年五月ニ至リテ神池鳴動火石日夜相撃ツテ聲ヲナス(同上)

(二十一) 建武二年正月五日(千三百三十五年二月七日)鳴動同六日辰刻鳴動火石砂礫ヲ雨シ烟中ニ物アリ車輪ノ如シ

中ハ白シ中、北ノ地ヨリ出デテ空ニ入ル堂舍悉ク破ル二月二十三日(三月二十六日)火石砂ヲ雨シ黒烟天ヲ掩フ(同上)

(二十二) 興國二年正月四日(千三百四十一年一月二十九日)申刻鳴動如雷黒烟大ニ昇リ炎光天ニ接シ火石ヲ十方ニ雨シ堂舍多ク破ル同月十九日(二月十三日)北池ヨリ砂山出現ス高サ山頂ニ出ヅ(同上)

或ハ曰ク興國二年正月四日申刻寶池鳴動黑白ノ烟相交ハリ泊干蒼天火坑光ヲ放チ雷ノ如ク火石ヲ碧天ニ吹上ゲ十方ニ散落スルヨト恰モ雨ノ降ル如シ然ル間ニ上下兩所大行事ノ

御社火石落掛リテ破損シ訖ンヌ凡疊藏ノ外横山嶽ノ邊法施
崎以下大小ノ火石降下満山ノ住僧等驚キ迷フ同月(月不詳)十
九日巳ノ刻北ノ寶池中心大島出現ス新山ト號ス當山ノ頂ニ
表出スト

(二十三) 興國四年(千三百四十三年)寶池ヨリ水上リ本堂
破損ス(阿蘇山上奇瑞記)

(二十四) 天授元年十一月十九日(千三百七十五年十二月二十日)中ノ寶池鳴動火石ヲ雨シ水溢レ流ル同二年正月二日

戌刻(一月三十一日)水又溢ル同三年三月二十日(五月六日)已刻火石ヲ雨シ水大ニ溢レ堂舍流漂一本ニ本堂流失トアリ(同上)

(二十五) 元中四年五月二十五日(千三百八十七年六月十九日)上宮法施崎中央新穴出現濁水砂石令涌沸其高假令一丈

有餘爲體如游鯨鯢萬里之波濤矣同閏五月三日(六月二十七日)卯刻俄新穴變火坑自御甌烟火石指登蒼天棚引未申方其後連日白烟巍々而無斷絕譬白雲凝大虛似山岳岫追日增盛以往文永弘安之鳴動中比建武曆應之神變近來者正平文中之瑞相不可過之歟(大衆註進狀)

(二十六) 永享六年三月二十二日(千四百三十四年五月十日)未刻自中池黑烟大ニ昇リ泥水溢流同四月一日(五月十八日)辰刻中池ヨリ火石大ニ昇ル(阿蘇山上奇瑞記)

(二十七) 永享九年十二月五日(千四百三十八年一月九日)未刻中池火大ニ起テ天ニ接ス同十年正月十五日(二月十八日)中池鳴動火大ニ燃ユ(同上)

(二十八) 文明五年(千四百七十三年)十月ヨリ翌年ノ春ニ至テ火大ニ燃エ烟中ニ日ノ如クナルモノニツ形ハレ火石ヲ四方ニ雨シ堂舍多ク壞ル(同上)

一本ニ曰ク文明五年四月十一日(五月十六日)靈池震動而靈烟登空以後無斷絕也ト

(二十九) 文明十六年十二月十日(千四百八十五年一月五日)ヨリ十七年ニ至ルマデ火石黑烟大ニ昇リ北池中ニ砂山出來

僧徒等大半去山(阿蘇山上奇瑞記)

(三十) 永正二年(千五百五年)正月黑烟火石大ニ昇ル(同上)

(三十一) 永正三年三月三日(千五百六年四月六日)阿蘇御嶽御鳴動、火石アガル(八代日記)

(三十二) 大永二年正月九日(千五百二十二年二月十五日)火石黑烟大ニ昇リ砂山ニツ池中ニ出來ス其山ニ日ノ如クナルモノニツ出ヅ(阿蘇山上奇瑞記)

(三十三) 天文二年六月十五日(千五百三十三年七月十七日)烟大ニ昇リ泥水四方ニ溢流ス(同上)

(三十四) 天文十一年閏三月五日(千五百四十二年四月二十九日)阿蘇山御鳴動、火石卯時又午時(八代日記)

(三十五) 永祿元年(千五百五十八年)阿蘇嶽新穴出來ス(阿蘇山上奇瑞記)

(三十六) 永祿五年(千五百六十二年)二月上旬黑烟砂石硫黃上ル白河水濁テ衆魚皆死ズ(同上)

(三十七) 永祿六年四月一日(千五百六十三年五月三日)阿

蘇山御鳴動ノ由申候（八代日記）

（三十八）永祿七年（千五百六十四年）十一月火大ニ燃エ黒
烟大ニ昇ル（阿蘇山上奇瑞記）

（三十九）天正元年（千五百七十三年）七月阿蘇山砂石硫黃
ヲ降ラス野ニ青草ヲ見ズ十二月四日夜砂降ル（明光院古書）

（四十）天正四年十月十五日（千五百七十六年十一月十五日）
火燃エ黒烟天ニ昇ル（阿蘇山上奇瑞記）

（四十一）天正十年正月十五日（千五百八十二年二月十七日）
黒烟火石大ニ昇ル（同上）

（四十二）天正十一年十一月十一日（千五百八十三年十二月
二十四日）靈水涌出シテ本堂ヲ破リ慈惠大師最榮讀師ノ像
ヲ流ス同十二年七月砂硫黃ヲ雨シ野ニ青草ナシ（同上）

或ハ曰ク天正十二年七月砂石硫黃降リ南郷色見邑荒蕪スト
（四十三）天正十五年（千五百八十七年）火大ニ燃エ砂山二
ヶ池中ニ出來ス（阿蘇山上奇瑞記）

（四十四）文祿元年（千五百九十二年）黒烟大ニ昇リ砂山出
來ス（同上）
（四十五）慶長三年（千五百九十八年）十二月ヨリ四年ニ至
リ石ヲ雨シ黒烟大ニ昇リ火燃ユ（同上）
（四十六）慶長十八年六月二十六日（千六百十三年八月十二
日）苦水沸騰黒烟天ヲ掩ヒ火石上リ砂礫ヲ雨シテ郡中ニ満
タル飛禽ハ烟ニ咽ビ死スルアリ（同上）
ツ（同上）

（四十七）元和六年五月三日（千六百二十年六月三日）苦水

沸騰ス（同上）

（四十八）寛永八年（千六百三十一年）十一月鳴動黒烟火石
昇リ苦水溢出テ其ノ下流猶熱湯ノ如ク行人渡ルコトヲ得ズ
（同上）

（四十九）寛永十四年八月十七日（千六百三十七年十月五日）
黒烟大ニ昇リ砂硫黃ヲ雨ス（同上）

或ハ曰ク八月十一日及ビ十七日黒烟山頂ヨリ上リ砂石硫黃
ヲ降ラスト

（五十）慶安二年（千六百四十九年）六月ヨリ七月ニ至ルマ
デ鳴動如雷黒烟火石昇リ硫黃ヲ雨ス（阿蘇山上奇瑞記）

（五十一）寛文八年（千六百六十八年）正月大ニ鳴動同七月
ヨリ鳴動年ヲ越テ不止（同上）

（五十二）延寶三年正月二十二日（千六百七十五年二月十六
日）大ニ鳴動火石上ル（同上）

（五十三）天和三年（千六百八十三年）五月鳴動如雷泥土沸
騰ス（同上）

（五十四）元祿四年（千六百九十一年）四月ヨリ北池鳴動雨
砂越月不止五月二十七日（六月二十三日）巳刻ヨリ午刻ニ
至ル迄鳴動甚シク火石大ニ昇リ黒烟東北方ニ棚引キ坂梨村
宮地村ノ間晦暝ニシテ燭ヲ秉テ至ル行人途ニ迷ヒテ石ニア
タル飛禽ハ烟ニ咽ビ死スルアリ（同上）
六月十七日阿蘇山石ヲ雨ラス（寛元日記）

八月四日阿蘇山水赤キコト血ノ如シ魚鱗皆死ス（野史）

元祿四辛未年此ノ年阿蘇ノ煙前代未聞ニ在ラセラレ候、五

月日、阿蘇中闇トナリ晝タイマツヲモス（渡邊玄察日記）

（五十五）寶永五年（千七百八年）八月ヨリ南池水色變ジテ

赤クナリ十二月ニ至リテ涸渴ス六年正月四日（千七百九年
二月十三日）鳴動池傍ニ新池出來ス大ナルハ十五ヶ處小ナルハ算フベカラズ泥土逆上スルコト三四間苦水溢流シ炎火砂石大ニ昇テ鳴動ス（阿蘇山上奇瑞記）

或ハ曰ク鳴動、拜所寶池トノ間烟穴新ニ出來シ大ハ十三ヶ所小ハ數ヲ知ラズ泥土ヲ吹上ゲ砂烟立ツト

（五十六）明和元年（千七百六十四年）十二月中旬ヨリ山上御池ノ烟當ヨリモ強ク立登リ同二年正月下旬ヨリ同年ノ秋ノ末迄御池鳴動シ或時ハ如雷或時ハ千仞ノ峯ヨリ大石ヲ轉

ガス音ノ如ク三四里ノ間ハ戸障子ニヒキテ安眠セス豊後路鶴崎府内筑後肥前薩摩、當國ハ八代葦北天草邊迄十里ノ間砂ヲ降ラス別テ當地箱石坂梨、乙姫、永草邊砂強ク降リ

四月十三日（千七百六十五年六月一日）ニ永草村ノ農氏蓮ヲ敷テ檢セシニ朝ヨリ暮ニ至リ一坪ニ砂八升程降リ積リタリ風ニ隨ヒ日毎ニ諸方ニ降リ草木ノ枝葉ニ積テ押撓ミ積雪ノ如ク少シ風吹ケバ泉水山、米塚、蛇ノ尾邊ノ草木ニ着タル砂ヲ吹立ル颶卷夥ク阿蘇谷中ハ霧烟ノ如ク五六町隔テハ

山林藪樹モ見分ケ難ク耕農行人モ眼ヲ明ケ兼ナル難儀也右ノ如ク毎日積タル砂春雨ノ折々ニ道尻川西河原役大原ノ二川ニ落込川ヲ埋ムルコト平地ノ如シ云々（財津八郎左衛

門永輝著阿蘇山鳴動附道尻川荒記）

（五十七）安永（千七百七十二年乃至千七百八十年）年度ノ噴火尋常ニアラズ

寶永以後ハ明和安永文化ノ變ヲ甚シトス常ノ變ハ舉グルニ違アラズ天明ニモ變アリツレド右ノ兩度ニハ比クベクモアラズ（肥後國誌ハ明和九年ノ撰ナリ隨ツテ此以後ノ分詳報ヲ得難シ）

（五十八）天明（千七百八十一年乃至千七百八十八年）年度ニ小噴火アリ（肥後國誌）

（五十九）文化元年八月二日（千八百四年九月五日）神池鳴動ス同十一月二十六日（千八百五年一月九日）山鳴震シ小池忽焉トシテ出來ス

（六十）文化十二年（千八百十五年）阿蘇山大ニ噴火ス（文化十一年ニモ噴火セリト云フ（鈴木理學士報告）

神池ハ水湛ヘテ靜ナルハ平常ノ象ナリ水涸テ鳴震スルハ不穏ノ兆ナリ文化十二年ノ變ハ安永ノ變ニ亞ギテ最モ甚ダシク目ノアタリ見置タル事ナレバ其起レル狀ヲ此ニ記シテ猶ホ後人ニ告ゲントス先ヅ常ハ水湛ヘシヲヨリノニ涸テ四月ノ末ニ至リテハ皆涸竭シテ池底ニ火坑出來ス其火ノ勢熾ニシテ坑邊ハ燒焦サレテ紫黃色ニナリ火坑ノ中ハ鳴震ヒテ硫黃ノ氣甚ダシク吹上ゲツ、アリケルニ五月始ニナリテ黒烟大ニ昇リ日ニ添テ強クナリ行き六月ニ至テハ其烟ノ廣サ二里許ノ道程ホトハ打掩テ其下ハ晝モ猶夜ノ如シ（長サ幾何十里カ行キテ

ンハカリ元ヨリ池ノ邊リ一二町ガ間ハ石ヲ降シ煙中ニハ火焰
ヲ噴キ石ノ同時ニ吹上ラル、狀ハ烟ヲ離レテハ群鳥ノ如ク
烟中ニテハ皆火ノ玉ニシテ相撲テ飛散ル光ハ電光ヨリモ銳
ク音ハ雷霆ニヨク似タリ斯クテ九月頃ヨリ漸々穩ニナリ行
ツレド山下ハ田烟原野トモニ皆霾ニ埋レテ荒果タリカ、レ
バ何ノ代ニテ靈池ノ水涸テ底ニ火坑出來勢強ク鳴震フコト
アラバ恐レ惶ミテ祭禱怠ルベカラズトナン（肥後國誌）

細川侯ノ文化十二年八月八日附報告ニ曰ク此年三月ノ初ニ

於テ山ハ突然鳴動ヲ始メ同月中旬ニハ噴烟平常ヨリモ甚シ
ク附近ノ人民不安ノ念ヲ懷ケリ爾來活動ハ日々ニ旺盛トナ
リ五月ノ初ニ於テハ終ニ頂上ニ新ニ噴火口ヲ生ジ多量ノ岩

石ヲ飛バシ火焰ヲ出セリ噴煙白キトキハ降灰亦白ク噴煙黒
キトキハ降灰亦黒ク又往々ニシテ硫黃ヲ混ゼシ泥土ヲ降ラ
セリ毒氣ノ及ブ所多數ノ村落耕地ヲ荒廢セシメ人畜ヲ害シ
阿蘇一郡ニ於テハ牛馬全ク食ヲ失ヒ他ヨリ之ヲ補ヒシモ素
ヨリ不十分ナルコトハ免レ得ベカラズ猶ホ前記ノ地方以外
ニ於テモ硫黃ト灰トヲ混ゼル泥土ハ諸水流ニ混入シ爲メニ
不毛ノ地トナセル村落少シトセズ氾濫ハ合志、益城、飽田、
託摩四郡ノ諸村ニモ起レリ云々

（六十一）文政九年十月二十三日（千八百二十六年十一月二
十二日）火焰砂礫黑烟池上ニ昇リ全山鳴震シ堂舍悉ク破ル
(六十二) 文政十年(千八百二十七年)四月灰降リ原野荒果
タリ同九月二十三日(十一月十二日)已刻鳴動雷ノ如ク火

焰天ヲ衝キ四方ニ砂礫ヲ雨降ラシ新穴一ノ鳥居ノ南側ニ出
來セリ此時參拜者ハ降灰ノ爲メ呼吸シ難ク多クハ御池ノ南
方二十町ノ邊ニ於テ斃レタリ

日本災異志所載地學協會報告トシテ文政十一年ノ阿蘇山噴
火記事ニ曰ク五月上旬阿蘇山噴火シテ大石硫黃灰砂ヲ雨降
ラスコト糠粃ヲ簸スルガ如ク皆田畠ニ堆積シ阿蘇郡ノ民爲
メニ糧食ヲ失フ其ノ他合志、益城、飽田、託摩四郡ノ田畠
モ亦大ニ損害スト云フ（此記事文化十二年ノ誤報ナリ）

（六十三）文政十三年(千八百三十年)二月黒煙天ニ昇リ砂
礫ヲ雨降ラセリ噴火翌月ニ及ビ田畠ノ損害少ナカラズ人民
ヲ困シメタリ

天保元年六月二十三日（同年八月十一日）神池鳴震火焰灰
ヲ上げ咫尺ヲ辨ズルコト能ハズ翌朝數百尋高キ山神池ノ西
方ニ出來セリ之ヲ淺間山ト名ヅク爾後兩三年間、鳴動噴火
相繼ギ南郷谷ノ諸村收穫ヲ減ゼリ

（六十四）安政元年正月二十九日（千八百五十四年二月二十
六日）鳴震濁水ヲ涌沸セシメ全山熱氣甚ダシ此時三人ノ參
拜者二人ハ即死シ一人ハ重傷ヲ負ヒ後死セリ

（六十五）明治五年十一月一日（千八百七十二年十二月一日）
鳴震、濁水湧沸シ硫黃採リ數人ヲ死ニ至ラシム、其後鳴動
數々ニシテ黒烟天ヲ衝キ火石晝夜相擊チ、其聲雷霆ノ如シ、
苦水四方ニ溢流セリ（地學雜誌）

以前ヨリ活動中ナリシモ是ニ至リテ新ニ活氣ヲ増シ噴烟天ヲ衝キ砂石ヲ四方ニ飛バシ噴出岩石ノ大ナルモノハ砲彈ノ大サヨリ二十人ニテモ動カシ難キモノニ至レリ此時硫黃採掘者多ク從業シ居タリシガ中四名ハ即死シ他ハ何レモ多少ノ傷害ヲ被レリ其後噴火次第ニ微弱トナリ終ニ一旦靜止セシモ同月二十四日ニ至リテ再び活動ヲ始メ焰烟砂石ヲ飛バスコト連日ニシテ地動ハ前ヨリモ却ツテ激シク其回數亦少シトセズ溫泉山腹ノ各處ニ湧キ其下流白川ニ入リテ河水爲メニ硫氣ヲ帶ビテ白色ヲ呈シ實ニ白川ノ名ニ背カズ魚介皆毒死セリ翌年三月一日午後ニ至リテハ鳴震更ニ激烈トナリ隣村ニ於テ戸障子ノ鳴響終夜止ムコトナク火光天ニ映ジテ穹天紅色ヲ呈シ晝ハ暗夜ノ如シ毎日灰砂ヲ蒙レル區域徑七八里ニ及ビ四五里ノ間ハ積ンデ一寸ニ達シ田園ノ荒蕪名狀スベカラザルニ至ル（日本地震學會記事）

黒川村戸長ノ報告ニ依レバ同村ニ於テハ舊冬ヨリ鳴響ヲ感ジ黑白ノ噴煙ノ上ルヲ見タリシガ此年二月七日（千八百七十三年）（日本災異志ニ明治七年トアルハ六年ノ誤カ）朝南風アリ黒川組附近ニ於テハ東西一里半以上、北方ニモ一里半以上ノ區域ニ於テ地震ヲ感ジ灰ヲ蒙ルコト多キハ深サ一寸ニ及ビ淺キモ一分ニ達セリ同月十三日朝六時ニ地震シ其後毎時二回ノ割合ニ鳴響ヲ感ジ翌十四日朝六時ニハ著シキ地震二三回ヲ感ジ二十三日同刻ノモノモ刻合ニ強カリキ其後大小ノ鳴震頻リニ起リ人々安眠スルコトヲ得ズ然レドモ翌二十四日ニ至リテハ鳴

動ハ尙ホ繼續セシモ噴灰ハ終熄スルニ至レリ今回灰砂ヲ最モ多ク蒙レルヲ黒川組及び東黒川組トナス（同上）

（六十六）明治十七年（千八百八十四年）三月二十一日午前七時五十分ヨリ凡ソ一時間許リ阿蘇山大ニ鳴動シ其響宛然數百萬ノ雷霆ノ如ク家屋ノ戸障子ヲ震ハシ噴火孔ヨリ直徑一里内外ノ村落人民、其驚一方ナラズ既ニシテ山上炎焰天ヲ衝キ黑烟ハ西風ニ隨ヒ、阿蘇谷ヲ覆ヒ、朦々トシテ咫尺ヲ辨ゼズ霾ヲ降ラスコト限リナク、忽ニシテ積ンデ寸餘ニ及ブ所アリ、初ニ降ルモノ土ノ如クニシテ硫黃氣ヲ含ムコト最モ多ク粘着シ易シ、後ニ降ルモノ、極メテ細末ニシテ砂ノ如ク、其硫黃氣アルモノ植物ヲ害スルコド甚ダシク、又所々ニ燒石ヲ降ス、而シテ其石ノ陷リタルハ地ニ穴ヲナシ、其周圍ノ最大ナルモノハ七間餘ニ及ブモノアリ、村落害ヲ被ムルコト最モ甚ダシキハ山麓東方ノ地ニシテ黒烟西風ニ靡キ時々日光ヲ遮リ、朦朧ノ中、或ハ行人ノ降石ニ觸レシモノアリ、硫煙中ニ苦シonde小兒ハ吐瀉病ヲ發シ、大人ハ眩暈、頭痛、腹痛ニ惱ムモノアリ、一二ヶ村ハ菜麥皆無ノ姿ナリ、其慘毒暴烈ナルコト實ニ名狀スベカラズ、降霧ノ灾害ヲ被ルハ風ノ方向ニ依ル、而シテ多クハ西風ナリキ、火噴出以來四月三十日マデハ其景況格別異ナラズ、降霧ノ灾害ヲ被ルハ風ノ方向ニ依ル、而シテ多クハ西風ナリキ、四月三日四日ノ兩日ニハ、北方ノ地ニ降ルコト甚ダシク同月十三日ニハ東風強ク吹キ、遠ク熊本市中（噴火口ヲ距ルコト凡ソ十里）ニ降リ、行人ハ眼ヲ覆ヒ、家屋、戸障子ヲ

閉ヂテ之ヲ防グモ其隙々ヨリ吹入り、爲ニ第ヲ取ルニ至ル、五月一日朝ヨリ俄カニ硫烟降リ、霾減少ス、併シ時々震動同月十七八日ニ至リ稍平常ニ復シタル景況ナリシガ六月六日ヨリハ、又噴火烈シク、同月十二日夜ヨリ翌十三日正午迄ハ、鳴動雷聲ノ如ク硫烟噴出ス、斯クノ如クニシテ現今ニ至レリ、其坑ハ元來三池中北位ノ坑中、最北ノ下底、新ニ一洞穴ヲ破裂シタルモノニシテ阿蘇山絕頂ヨリノ方位ハ西ニ在リ、山上山下、降霾積ンデ堆ヲナシ、少シク雨降レバ山下川々出水ノ多キコト驚クニ堪タリ是レ其雨水ニ霾ヲ混ジテ流下シ、隨テ大ニ其量ヲ増セバナリ、故ニ其水ハ黒クシテ物ニ著キ易ク、之ガ乾キタルヲ見レバ霾ヲ止ムルコト甚ダシ云々（地學雜誌）

（六十七）明治二十七年（千八百九十四年）三月六日夜阿蘇山鳴動ス遠雷ノ如シ依テ該山最近ノ色見村及ビ泉村大字白川ニ於テ其狀況ヲ調べタルニ色見村ニ於テハ七日夜午後八時頃僅ニ霾ヲ降ラシタルノミニシテ曾テ其鳴動アリシヲ知ルモノナシ、十一日午後一時吉田新町ニ於テ霾ヲ降ラシ續イテ十二日十三日朝ニ至リ時々霾ヲ降ラシ實ニ十三日朝ノ如キハ強風堆積セル霾ヲ捲キ滿街爐灰ヲ撒クノ觀アリ、十三日前十一時十二分又々阿蘇山鳴動黑烟高ク噴出シ東南ニ飛散セリ、其間轆々トシテ鳴動止マズ家屋震ヒ障子鳴ル而シテ烟ノ散ズルヤ到ル處ニ砂粒大ノ霾ヲ降ラセリ午後〇時二十分ニ至リ噴烟漸ク滅ジ同二時後ハ平常ニ復セリ依テ

登山ノ途ニ就ク然ルニ午後三時又々俄然震動累々タル黒烟天涯ニ昇リ天地晦冥霾ハ霏々トシテ面ヲ撲チ硫黃ノ臭氣紛紛タリ午後四時山巔ニ達ス其近傍ノ狀況ヲ視察スルニ砂粒大ノ霾ノ堆積スルコト一寸五分乃至一寸七八分其他此一帶ノ地ニ降敷ケル燒石夥シク大サ一寸足ラズノ不整形ノモノ又三角ノ碎片アリ噴火口最近ノ地ニ至リ檢スルニ舊新二口アリ新口ハ猶噴烟シ舊口ハ僅ニ烟ヲ漏ラスニ過ギズ而シテ十四日爆裂震動シタリト思料スベキ所ハ此新口大凡三萬坪許ノ内ニ於テ西南ニ偏リタル位置ニ凡ソ十二坪許ノ廣サニシテ最モ著シキ黒烟噴出スル所アリ此中ヨリ鳴動ノ音響ヲ發ス今土民ニ鳴動ノ狀況ト其由來スル所ノ實驗ヲ聞クニ今回動ハ三月四日細微ノ鳴動ヲナシテヨリ噴火口ノ全面積中點々二三坪宛時々凹陷シ其都度鳴動モ起リ同時ニ霾ヲ降ラシタリト云フ（熊本縣警部松田清憲氏報告伊木理學士阿蘇山報文所載）

阿蘇ハ八月來鳴動シテ一時止ミタリシガ同月三十日午前五時頃ヨリ再び黒烟ニ灰土ヲ雜ヘテ雨ノ如ク降リ來リ其勢敢テ今春ニ劣ラズ午後十一時頃ヨリハ火炎ヲ噴出スルト共ニ鳴動甚ダシク其響殆ド雷鳴ニ異ナラザルアリ近傍ノ人民ハ何レモ安眠スルヲ得ザリシガ九月四日ニ至リテハ一層甚ダシク阿蘇各地方ハ傘ヲ翳シ眼鏡ヲ掛ケザレバ外出出來ザル程ナリシト云フ（地學雜誌）

（六十八）明治三十九年（千九百六年）六月八日阿蘇中央火

口丘ノ南側千里ヶ濱ニ於テ突然噴火ヲ始メ霾ヲ噴出ス火口ハ初メ徑三尺位ニ過ギザリシガ一週間ノ後ニハ東西四間南北八間位トナリ噴煙天ニ冲シテ遠ク之ヲ熊本ヨリ望見シ得ベク風向ニヨリ阿蘇郡内ノ各村ニ霾ヲ降ラセリ（本項ニツキテハ平塚理學士ノ報文載セテ本報告第五十六號ニ在リ）明治四十年十二月十二日阿蘇噴火口ノ噴烟盛ニシテ降霾多シ（高森町今村武彦氏報）

明治四十一年一月十七日昨春以來阿蘇山ノ新噴火口ヨリ發スル霾ハ其ノ害數里ニ及ビ農民ノ迷惑甚シカリシモ去月以來降霾頓ニ止ミ唯硫黃ノ噴出ヲ見ルノミニシテ本日ノ如キモ僅少ノ硫氣ヲ出セルアルノミ而シテ舊噴火口ノ噴烟ハ此地ニ在リテハ認メ難キ程ナリシガ午前十時五十分突然鳴動ト共ニ新火口ヨリ灰黑色ノ噴烟最モ猛烈ニ立昇リ同時ニ舊噴火口ヨリモ同ジク多量ノ黑烟ノ昇ルヲ見シガ同十一時半ニ至リテ靜穩ノ狀ヲ呈セリ本日突然噴烟セシ三十分間餘ノ光景ハ實ニ壯大ナルモノアリキ（同前）

明治四十一年一月二十九日阿蘇山舊噴火口ヨリ霾ヲ多量ニ噴出スルヲ見ル（同前）

明治四十一年二月四日阿蘇山ノ舊火口ヨリ大ニ霾ヲ噴出セリ（同前）

明治四十一年二月十七日降霾多シ（同前）明治四十一年五月十八日正午鳴動ヲ聞ク夜ニ入リテ甚シク山上ニテハ微震アリタリ（宮地町山口一馬氏報）

新火口ノ活動ハ爾來三四四年ノ間熄マズ明治四十二年四月岩崎理學士ノ踏査ニヨレバ噴烟尙ホ盛ニシテ火口モ稍擴大シ其ノ南方ニ高サ凡ソ二十五尺ノ火口丘ヲ堆積セシメタリ（地學雜誌）又同年七月伊木理學士ノ踏査ニヨレバ火口南北凡十間東西四五間深サ七八間ニシテ火口丘ノ堆積前ニ異ナラズ噴煙尙ホ盛ナルモ噴出ノ勢力ハ稍減退セルモノ、如シ其他舊來ノ噴火口ハ十年前ニ比較シテ著シキ變動ナシ降灰區域ハ南郷谷色見方面ヲ主トシ其他ニ甚ダシク擴ガラザルハ從來ノ噴火口ニ比較シテ位置相違セルニヨルモノナリ（地學雜誌）明治四十三年四月ニ至リテハ新噴火口ノ勢力ハ大ニ衰ヘ孔縫ヨリ十分孔底ヲ窺ヒ得ベクシテ只孔底ノ一侧ヨリ微弱ナル噴煙ヲ認ムルノミ其後此噴火モ遂ニ終熄シ火口ハ土砂ヲ以テ埋沒セラレ大正三年ニ至リテハ其痕跡ダモ認メ難キニ至レリ（地學雜誌）（第十圖參照）

（六十九）明治四十三年（千九百十年）四月三日舊第三火口ノ既ニ活動休止シテ水ヲ湛ヘタルモノ俄然噴火シ火孔底ハ縱横ニ龜裂シ其中央ニ新孔ヲ生ジ、橢圓形ヲナシ東西ニ長ク長徑四十間短徑二三十間モアルベク昇烟猛烈ニシテ内部ヲ窺ヒ見ルコト能ハズト雖モ、底ニハ沸湯ヲ湛ヘ居ル模様ナリ、而シテ孔邊ノ龜裂セル部分孔内ニ陷ル毎ニ淒シキ音響ヲナシ昇烟一層烈シキヲ加フ其他ノ火孔ニハ別ニ異狀ナシ（地學雜誌）

明治四十三年四月五日第四火孔（南ノ池）ヨリ盛ニ噴烟ス

第五圖

阿蘇噴火口一ノ池ヲ隔テ、二ノ池
ヲ南東ニ望ム

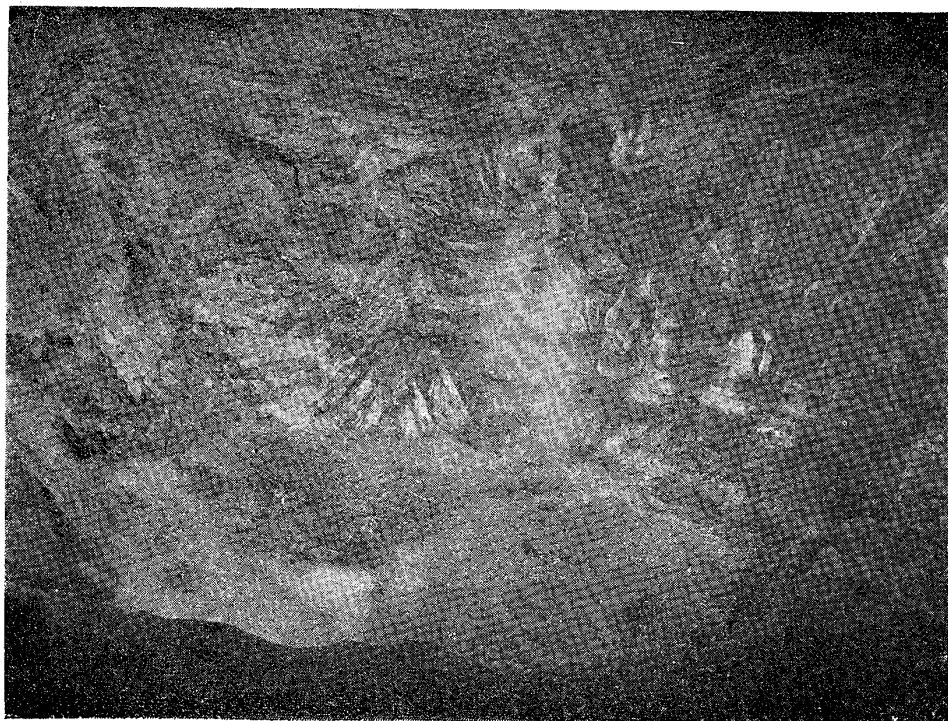
(大正六年八月四日撮影)



第六圖

阿蘇噴火口一ノ池

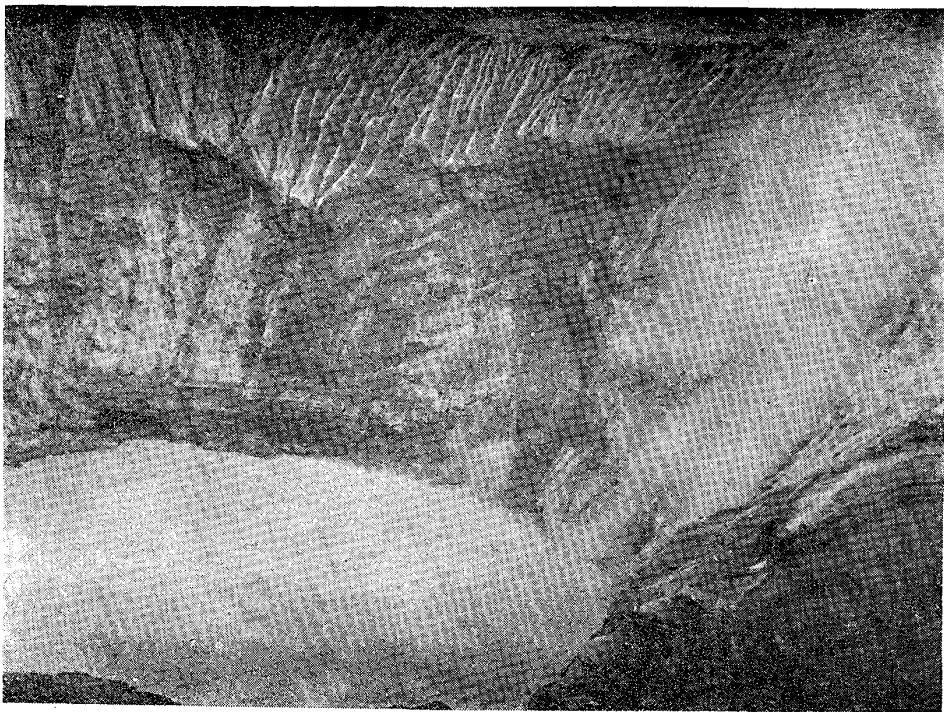
黃色ノ湯ヲ湛ヘ北部ヨリ蒸氣ヲ發ス



第七圖

阿蘇噴火口二ノ池

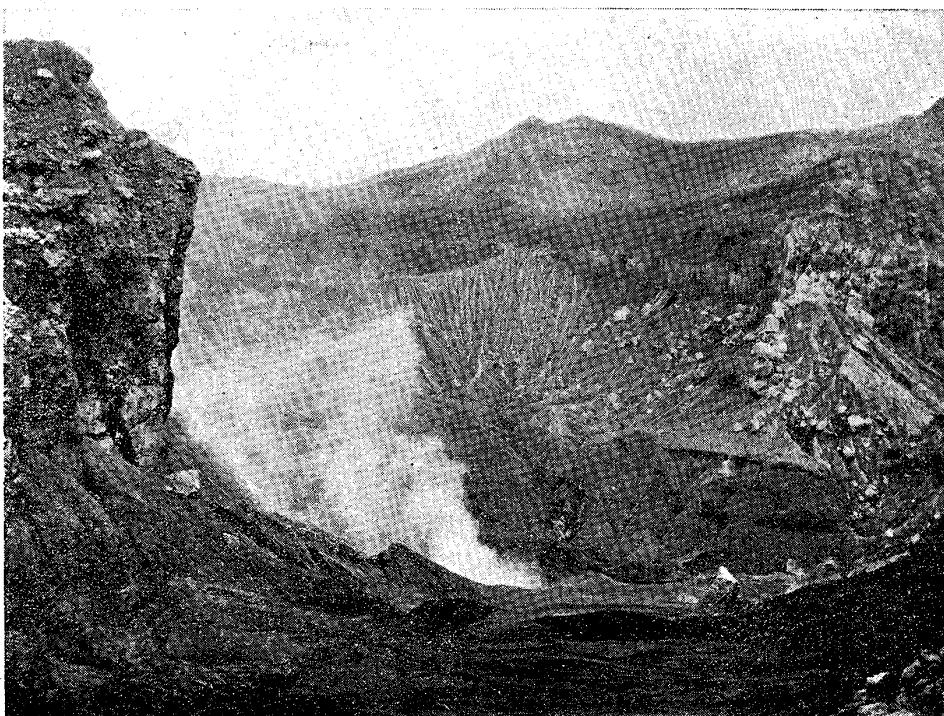
セシム
乳白色ノ湯ヲ湛ヘ南西部ヨリ蒸氣ヲ沸騰



第八圖

阿蘇噴火口三ノ池

セシム
南西方ヨリ望ム空池ニシテ蒸氣ヲ噴出ス



第九圖 同 前

西方ヨリ望ム



第十圖 阿蘇山明治三十九年火口ノ趾

火口壁馬蹄形ヲナシ南方ヲ缺ク



(山口氏報)

明治四十四年五月十七日噴煙甚シク霾ヲ降ラスコト大ナリ
(同前)

大正元年八月二日阿蘇ノ噴烟盛ニ降霾多シ、八月三日霾盛
ニ降霾多シ八月二十四日、二十五日、九月一日、九月十一
日降霾多シ (今村氏報)

大正三年一月十九日青烟ヲ噴ク硫黃嗅シ夜ニ入リテ火口ノ
上空明ルシ (山口氏報)

大正五年一月二十一日降霾甚シク未明特ニ甚シカリキ (同
前)

大正六年夏季ニ於テハ北ノ池ハ黃色ノ熱湯ヲ湛エ其北部ヨリ
蒸氣ヲ發セリ (第五、六圖參照) 中ノ池ハ乳白色ノ湯ヲ湛エ
南西部ヨリ盛ニ蒸氣ヲ沸騰セシム (第五、七圖參照) 而シテ
法施崎ハ水涸レ蒸氣ヲ間歇的ニ噴出セリ (第八、九圖參照)

即チ第一火口ト第二火口トハ休息ノ状態ニ在リ法施崎ノ大正
三年八月ニ於ケル狀況 (佐藤理學士ノ觀察ニ據ル) ハ主火口ニ
ハ綠灰色ノ湯ヲ湛エ別ニ副火口アリテ東南隅ニ偏在シ又北隅
ニハ沸々音ヲナシテ沸騰スル所アリキ然ルニ現在ニ於テハ前
(此等ノ狀況ハ納富理學士ガ阿蘇火山ノ現狀トシテ地學雜誌
大正六年五月號所載ト始ド差違ナク唯同理學士ノ所謂第三火
口ニハ湛水ナカリシヲ以テ相違トスベシ) 又會テ明治三十九
年ニ生ジタル火口壁南麓ノ噴口ハ其痕跡殆ド消滅シ唯噴口ノ

南側ニ堆積セラレタル小火口丘ヲ存スルノミ (第十圖參照)

凡テ火口ヨリ噴出セラレタル堆積物ハ圓錐形ヲ成シ噴出物ノ
通路ハ錐軸ノ位置ヲ占ムルヲ通常トスレドモ明治三十九年噴
火ノ場合ニ於テハ噴出通路ハ特ニ北ヨリ南ニ向ヒタルガ爲メ
ニ堆積物ハ不正形ヲナシ唯噴口ノ南側ニ小丘ヲ築キタルノミ
ナリキ此小丘ハ明治四十二年四月岩崎理學士ノ踏査ニヨレバ
高サ三十五尺アリシトノコトナレドモ大正六年八月ニ於テハ
其徑凡ソ八十五尺ニシテ高サハ十尺ニ過ギズ是レスラモ風水
ノ作用ニヨリテ急速ニ縮小スル狀態ニ在リ

阿蘇山ハ最近ニ至リテ稍活氣ヲ呈セントスル傾向ヲ示セリ
即チ本年 (大正七年) ニ入リテモ一月十六日午後八時頃ヨリ
鳴動ヲ始メ午後十一時二十四分ニ至リテ特ニ甚シク高森地方
ニ於テハ降灰著シカリキ噴火シタルハ第三火口ナリシ様思ハ
ル

以上ハ單ニ噴火ノ沿革ヲ記シタルニ過ギズ其考察ノ結果ニ就
イテハ後ニ至リテ説明スル所アルベシ (第四章參照)

乙 金峯山

金峯山彙ハ阿蘇及ビ溫泉ノ兩活火山ノ中間ニ孤立スル火山彙
ニシテ有史以來噴火ノ記錄ヲ有セズ即一ノ死火山ナリ其往時
ノ活動ノ餘勢トシテ地表ニ現出スルモノ亦微ニシテ唯僅ニ西
麓河内ト北西麓小天トニ於テ溫泉ヲ湧出セシムルニ過ギズ
金峯山彙ハ複式火山ニシテ外輪山ハ略ボ圓形ヲナシ其ノ直徑
約一里アリ外輪山中北ニ聳ユルヲ二ノ岳即チ熊野嶽トシ三ノ

岳ハ輪外ニ在リ（第二圖參照）東ニ在ルヲ小萩山トシ荒尾山輪外ニ在リ西方及ビ南西ニ在ルヲ河内山、平山嶽トナス而シ

テ金峯山ハ此圓内ノ南部ニ偏在スル圓錐形ノ中央火口丘ニシキ著シキ谿谷ヲ認ムルコト能ハズ加フルニ外輪山ノ他ノ部分モ生成後年諸ヲ經タルガ爲メニ所々崩壊シテ連繫明白ナラザル處有リ但シ大體ノ形式阿蘇ニ能ク似タリ字岩下ヨリ發スル溪流ハ金峯山ノ北方ヲ迂回シ又南西平山ニ發スルモノハ北西ニ向ヒ兩者外輪山内ノ西部岩戸ニ於テ相會シ此位置ニ於テ火口瀬トナリ尙西流シテ河内ニ至リ海ニ注グ即チ阿蘇ニ黒川、白川アリ立野ニ於テ火口瀬トナルガ如シ又鳥越ハ阿蘇ノ板梨ニ比較スベク金峯山ハ中岳ニ相當シ最後ニ至ルマデ噴煙シタルナルベク唯阿蘇ニ比較シテ規模小ナルガ爲メ勢力ノ衰退モ亦速カナリシナルベシ

前ニ記セルガ如ク金峯山ハ其陽性活動ヲ既ニ終熄セルモ其陰性作用タル火山性地震ノ發現ハ頗ル多ク前記地震表第一表ニ於テモ強弱ノ地震凡ソ二十回ヲ算セリ就中明治二十二年七月二十八日ノ地震ハ半破壊的ニシテ潰家二百三十九軒死者二十名ヲ出シ此種ノ地震ノ最強度ヲ示セリ其ノ震原ハ金峯山ニ在リシコト當時ヨリ明カナリシ所ナルガ而モ其勢力ハ一ノ大破裂ヲナシ得ベキ程度ナリシモ震原ガ比較的ニ深ク地中ニ伏在セル爲メ爆發ヲナシ得ザリシモノナルベクスクノ如キハ死火山ノ特性トシテ今後モ同様ニ勢力ノ蓄積アリテモ終ニ陽性活動ヲナスコト能ハザルベシ尙ホ此場合ニ餘震ノ多カリシコトモ其特性トスベキナリ

前記二十回ノ地震中大多數ハ金峯山或ハ其ノ附近ニ起リシモノナルガ間々數里ヲ隔タル所ニ起レルモノアリ固ヨリ地震觀測不十分ナル時期ニ於ケル材料ニヨリテ推定シタル所ナルバ多少不正確ハ免レザルベシト雖モ概シテ金峯山地震ト稱シテ不可ナカルベシ即チ金峯山震原地ハ去ル明治二十二年以來同四十年頃マデハ假令其間ニ小康ノ時期ハ有リシモ概シテ活動ノ時代ニシテ過去十年間ハ殆ド全ク靜謐ニ歸シタルコト阿蘇地震帶全部ニ就イテ述ベタルガ如シ

金峯山ハ更ニ其過去ニ於テモ記錄ニ存スルニ足ルベキ地震ヲ起セルコトアリ即チ文政九年（西暦一千八百一十六年）ニモ鳴動六十餘日ニ亘リシコトアリ又熊本城記事ニ寛永二年六月十七日地震ノ際火薬庫爆發シ石壁ノ一部崩壊セリトアリ此時遠方有シタルモノナランカ

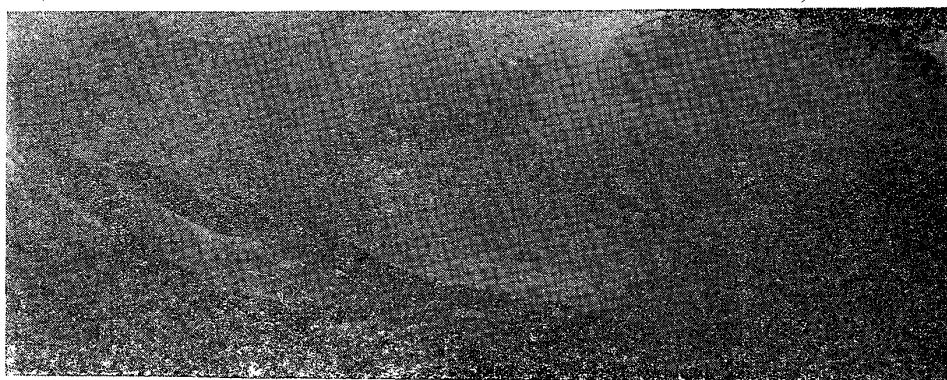
之ヲ要スルニ金峯山ハ陽性噴火ヲナサル代リ時々陰性活動ヲナシテ地震ヲ頻發スルノ習性アリ而モ最近十年間ハ其休息ノ時期ナリシト知ルベシ

丙 九重山

阿蘇火山ノ北東數里ニ於テ更ニ他ノ火山彙アリ之ヲ九重火山トナス九重ナル名稱ノ由來範圍共ニ明カナラズ或ハ大船山ヨリ之ヲ區別シ或ハ大船山ヲモ之ニ含マシム高峰八九、深谷無

第十一圖

九重山千重濱



久住山ノ頂上より北三方を望む山侯三門御ノ中ニアリ其左壁生星ヲ

第十二圖

九重山中ノ御門
アリ氣硫一ノ



第十三圖 星生山採硫場



數ニシテ其形九山相合シタルガ如キヲ以テ詩人之ヲ謳ツテ九重山トナストモ言ヘリ何レニシテモ其近世ノ命名ナルコトハ疑ナキ所ナリトス然ルニ現今其中央地域タル硫黃ノ產地ニ九重山ノ名ヲ附セルアリ或ハ此火山彙ノ最秀峯タル久住山ヲ九重山トナシ名稱益混亂セリ今余が茲ニ九重山トナセルハ大船山ト獵師、合頭諸山トノ間ニ蟠居スル火山彙ナリトス即チ其中央噴火口トシテハ千里濱アリ、（第十一、十二圖參照）其大サ東西五百米南北二百米ナリ有史以來此噴孔ノ西壁ヲ築ケルヲ星御門ニ於テ屢々硫氣爆破ヲナセリ此噴孔ノ西壁ヲ築ケルヲ星生山トナス九重山硫黃鑛ノ產地是レナリ（第十三圖）千里ヶ濱ノ北部ヲ劃スルヲ三俣山トシ東方ニ立ツラ天狗山トス中央火口原ノ細流ハ三俣、天狗兩山ノ間ヲ破リテ東シ法華院ニ出ヅ天狗山ノ南東ニ接シテ稻星山、本山アリ而シテ千里濱ノ南方ニ屹立スルヲ久住山トナセリ是レ即チ九州ニ於ケル最秀峯タリ久住山ノ西方ニハ頂上扁平ナル饅頭山アリ此等ノ諸山相擁シテ主火口タル千里濱ヲ圍メリ

中ノ御門ハ千里濱ノ西壁ヲナセリ（第十二圖參照）現今尙ホ

氣ノ爆破ヲナセルコト舊記ノ證明スル所ナリトス左ニ記スルハ久住村ノ舊家皆田氏ニ傳ハレル寶曆九年ノ舊記錄ヨリ抜萃セルモノナリ

寶曆九年ノ舊記錄抜萃

元文三戊午曆九年正月八日燃ヌケ申所ノチ地獄ニ成元文三年

六月廿八日ノ夜吹ホキ申候相迫村頭百姓三右衛門並同村小兵衛兩人七月十一日見セニ遣候處右吹ホキ口指渡六七間程ノ内灰水ヲタテ、色ノ湯タキリ出申候其近所ニ少ズ、二ヶ所清湯湧出申候是ハ口二尺四寸程宛涌出申候由七月十六日久住彌三右衛門並手代久左衛門相迫村頭百姓三右衛門地侍渡邊彌平治爲檢分罷在申候得共風雨稠敷坊中ヨリ引返シテ又七月二十一日久左衛門善之允三右衛門登山仕右ノ所間繩ヲ引改申候處ニ六間四方ノ溫リ湯稠敷涌出右ノ池ヨリ八間十間ノ間ニケ所吹ホキ是ハ清湯何モ手ヲツケ見申候處ニ中々熱湯ニテ寄附不申候味見申候ニ明鑿ノ味ニテ有之候大概繪圖ヲ調御郡奉行蠶江長兵衛様へ申達繪圖ハ覺書相添指出可申旨被仰付即繪圖下地ニ取付申候

御公料玖珠郡田野村ノ内延寶三年五月ニ燃ヌケ硫黃稠敷出

湯坪村へ一里程

田野村へ一里半

此燃ヌケヨリ御公料

サ、村へ一里程

岩上村へ同

元文三戊午曆六年五月二十八日ノ夜吹ホキ灰ヲ立候様成タキリ熱湯出

此處寛文二年正月八日燃ヌケ申候處是ヨリ五間程戌亥ノ方へ寄附今度指渡四方七間程吹ホキ灰水ヲ立候様成タキリ湯涌出申候尤前々ヨリ硫黃燃ヌケ煙立候處少許今以煙立硫黃吹出申候此處御公料並竹田御領分境前々ヨリ論シ申所ニテ御座候久住ヨリ二里三十町程

右之様子注進控

久住山拜所申ノ御門ト申所從前ノ燃ヌケ御座候右ノ所近日様子替リ申候尤獵師共申候由承付申候ニ付昨三十四日私儀龍越見分仕候處ニ先年ヨリノ燃ヌケハ硫黃吹出稠敷煙立居申候然處ニ今度様子替リ右ノ燃ヌケ所ヨリ五間戌亥ノ方ニ寄温リ熱湯吹出指渡大概六間四方灰水ト立候様成タキリ湯稠敷涌出申候右ノ所ヨリ八九間程南東ノ方ニ濱中ニ寄ニケ所何モ口ノ指渡シ二尺四方程涌出申候右ノ所柄繪

圖別紙調上申候

今度熱湯涌出所ノ儀御公領並御領竹田御領前々ヨリ御境論シ申所ニテ御座候右御注進爲可申上覺書ヲ以テ申上候以上

元文三年七月二十五日

轍江長兵衛殿

奥村少兵衛殿

久住彌三右衛門

如シ九重火山ノ東ニ大船山アリ西ニ獵師岳合頭岳アリ何レモ死火山ナレドモ未ダ曾ツテ金峯山ノ如キ陰性活動ヲ催ホシタルコトノ記錄ナク近時ニ於テモ鶴見温泉諸火山地方ニ於テ感ズルガ如キ極微地震サヘ注意セラレズ但シ歴史年代ニ於テ鳴動地震ノ類ハ時々之レ有リシモノ、如シ

丁 鶴見岳

前記ノ記錄ニヨレバ爆破ノ回數四ヲ算スレドモ寛保三年一月八日トアルハ恐ラクハ寛文三年一月八日ノコトナルベシ後文ニハ即チ寛文ヲ取レルノミナラズ寛保三年ハ元文三年ヨリ五年後ナレバ元文三年ヨリ見テ之ヲ前噴出トハ言ヒ難シ故ニ之ヲ寛文ト見做ストキハ爆破ハ寛文三年(西紀千六百六十三年)一月八日、延寶三年(千六百七十五年)五月、及ビ元文三年(千七百三十八年)六月二十八日ノ三回トナル爆破ノ場處ハ第一回及ビ第三回共通ニシテ中ノ御門ナリ第二回ハ附近村落ヨリノ里程ノミヲ記シテ位置ヲ明示セザレドモ其距離ヨリ推測スルトキハ恐ラクハ同一ノ場處ナリシナルベシ此等ノ三回タリ此等ノ兩山ノ東壁ヨリ海岸ニ至リ東西一里半南北二里ノ間ハ有名ナル別府ノ溫泉區域ニシテ其溫泉湧出ノ分量豊富ナルコト其分布ノ廣クシテ泉質ノ種類多キコト他ニ匹儔ヲ見ズ特ニ其噴氣ノ盛ナルベシ但シ血ノ池地獄ニシテ其盛時ニ於テハ蒸氣ヲ能ク數十米ノ高サニ噴キ上ゲシム總テ此等ノ噴出物ハ地下ドモ小字九重山ヲ重ナル產地トナス孔數十數個アリテ年產額數百萬斤ニ達ス(第十三圖參照)

硫黃ノ產出地ハ星生山ニシテ地籍小字星生山ニモ硫氣孔アレドモ小字九重山ヲ重ナル產地トナス孔數十數個アリテ年產額九重火山彙ノ活動力ハ以上列記セルガ如ク極メテ微ニシテ其陽性活動ハ勿論陰性活動タル地震ノ發生モ亦之ヲ缺クモノ、

第十四圖 塚原硫黃山ノ硫氣噴出

(大正六年八月十一日撮影)



第十五圖 鶴見岳ノ噴氣

畫面中央部ヨリ少シク左上方ニ當リ輕
微ナル蒸氣ヲ發ス

(大正六年八月十二日撮影)



テ硫黃ノ採掘ヲ一時中止シタリトノコトナレド噴氣ハ鶴見火山地方ニ於テ最モ盛ニシテ（第十四圖參照）大正六年八月十

一日氣壓六九二耗、氣溫二四・五度ニ於テ其ノ溫度九十六度ヲ示セリ

鶴見岳ハ千五十年前即チ貞觀九年ニ噴火シタル以來噴火ノ記錄ヲ缺ケリ恐ラクハ陽性活動之レ無カリシナルベシ其以前ニ於テハ噴火ト見做シ得ベキ事蹟アリ此等ヲ年順ニ掲グレトキハ左ノ如シ

（一）寶龜三年（西暦紀元七百七十二年）二月大隅ノ國霧島山ノ神、鶴見嶺ニ降臨ス國司紀ノ朝臣鯖麿其靈兆ヲ以聞ス因テ祠ヲ建テ、奉祭シ以テ官社ニ列ス霧島大神火男火咩神ト稱ス（豐日志）

往時噴火ヲ以テ火神ノ靈現トナシ或ハ神體ヲ焦シテ下界ノ罪ヲ贖ヒ拂ハセ給フトセリ顧フニ霧島ハ此年代ヨリ今日ニ至ルマデ時々噴火シテ絶ユルコトナク既ニ天平十四年（西暦紀元七百四十二年）ニ於テモ其噴火記事ト見做スベキモノノ存在スルヲ以テ火神ノ出現ハ能ク知ラレシコトナリシナルベシ是ヲ以テ前例ニ乏シキ鶴見岳ノ新噴火ヲ以テ霧島山神ノ降臨トナスハ當時ノ人智ヲ以テスルトキハ有リ得ベキコト、思ハル（二）嘉祥二年（西暦紀元八百四十九年）六月豊後國火男竝ニ火賣神社ニ從五位下ヲ奉授ス（續日本後紀仁明紀）往時噴火ニ對スル觀念ハ前記ノ如クナリシヲ以テ噴火ニ際シテハ往々奉幣使ヲ遣ハシテ祭神ノ位勳ヲ進メ給フノ儀アリキ

是ヲ以テ祭神ノ位勳陞叙ハ反對ニ噴火現象ノアリシコトヲ意味スル場合アルニ至レリ

（三）貞觀九年（西暦紀元八百六十七年）二月丙申太宰府言フ、後五位上火男神、從五位下火賣神ノ二社ハ豊後國速見郡鶴見山嶺ニ在リ山頂ニ三池アリ一池ハ泥水色青ク、一池ハ黒ク、一池ハ赤シ、去ル正月廿日（三月四日）地震動シテ其聲雷ノ如シ俄ニシテ臭キコト硫黃ノ如ク遍ク國內ニ満ツ磐石飛亂上下スルコト無數ナリ、石ノ大ナルモノハ方丈ニシテ小ナルモノハ甕ノ如シ晝ハ黒雲蒸シ夜ハ炎火熾ナリ、沙泥雪ノ如ク散シ數里ニ積ム、池中元温泉ヲ出ス、泉水沸騰シテ自ラ河流ヲ成シ山脚ノ道路往還通ゼズ、温泉ノ水ハ衆流ニ入り魚ノ醉死スルモノ千萬數ナリ其震動ノ聲三日ヲ經歴ス（三代實錄卷ノ十四）

四月壬申豊後國ヲシテ火男火女兩社ニ鎮謝シ兼ネテ大般若經ヲ轉讀セシム三地震動ノ恠ニ緣ルナリ（同上）

八月壬午從五位上火男神竝火咩神ニ正五位下ヲ授ク（同上）鶴見岳ノ陽性活動ト見做スベキハ前記ノ三回ニ過ギズ但シ此間ニキ記錄ノ遺漏アルモノ、如シ即チ第二回ニ於テ男女兩神共ニ從五位下ヲ授ケラレ次ニ第三回ニ於テ男神ハ從五位上ノ位ニアリ而シテ此ノ陞進ハ此ノ兩期ノ間ニ於ケル或ル活動ニ基ヅクコトヲ思ハシムルヲ以テナリ以上三回共ニ百年未滿ノ年代ニ起リシモノニシテ此期間ノミヲ見ルトキハ活動頻繁ナリシガ如ク思ハルレドモ第三回以後ハ恐ラクハ實際ニ於テ陽

性活動ヲ缺ケルモノナランカ

前記第三回ノ噴火ニ於テハ山頂ニ三個ノ池ノ存在ヲ述ベ且ツ其池水ノ沸騰氾濫シ又灰砂ノ害アリシ狀ヲ記セリ是レ恐ラクハ現時ニ於ケル阿蘇ノ噴火ノ如キモノナリシナルベク而シテ其噴火口タル三個ノ池ニ於テ水色ノ青キハ硫黃ヲ含ミ赤キハ鐵分ヲ含ミ黒キハ火山灰ノ泥土ニ由リテナルベシ然ルニ今日ニ於テハ斯ノ如キ池ノ遺跡ナキノミナラズ其鶴見地獄（第十五圖參照）ナルモノハ峽谷ノ斜面上ニアルノミナレバ噴火口ハ恐ラク後日崩壊シタルモノナルベシ即チ鶴見地獄ノ東側ヨリ崛起シ扇山ノ南麓ニ沿ヒ蜿蜒トシテ土地ノ押出ノ如ク見エ以テ石垣原頭ニ達スルモノ是レニアラザルナキカ若シ果シテ然リトスルトキハ此崩壊ハ噴火作用ニヨルカ又ハ氾濫或ハ山潮ノ如キ非噴火作用ニヨルカ詳ナラズト雖モ余ハ寧ロ後者ニヨルモノナルコトヲ信ゼント欲ス何トナレバ若シ斯ノ如キ地異ヲ生ズル程ノ火山作用アリシナラバ史乘之ヲ徵スペキモノノ存在スル方事實ニ近カラント思ハルレバナリ

鶴見地方ニハ極メテ地方的ナル極微動ノ時々發生スルコトアリ農商務省畜產試驗場九州支場ハ扇山（一名大平山）ノ南側ヲ占ム此山ハ鶴見岳ノ北々東ニ接スル圓錐形ノ孤峯ニシテ頂上ニハ猶ホ熱氣ヲ有スル所アリ其事務所ハ山ノ裾ニアリ鶴見ノ頂上ヲ北東ニ距ルコト凡ソ三糠ノ處ニアリ此事務所ニ於テハ最近二三年ノ間ニ感ジタル極微震ヲ能ク記錄セリ左ノ如シ

第八表 別府地方局部微震觀測表

年月												大正五年
月月月												月年
同同同同同同同同同同同同同同同同												時
同	同	同	同	同	同	同	同	二九	二〇	二四	六	同
同	同	同	同	同	同	同	同	二九	二〇	二四	同	同
九 二 四	九 三 三	九 〇 一	八 〇 四	七 五 五	七 三 〇	六 二 四	六 三 三	五 五 〇	五 五 〇	五 五 〇	一 一	一 九 四 〇
九 二 四	九 三 三	九 〇 一	八 〇 四	七 五 五	七 三 〇	六 二 四	六 三 三	五 五 〇	五 五 〇	五 五 〇	一 一	一 九 四 〇
極微	微	極微	弱	極微	弱	弱	弱	弱	弱	弱	緩	急
急	急	急	急	急	急	急	急	急	急	急	急	急
地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	記
地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	事
感ジ中四回程少シク人體三感大	感ジ大分ニハ感セズ	砲聲ノ如キ地鳴ヲ伴フ、別府ニ	微動十回程	地鳴二回	地鳴	地鳴アリ	繼續的ノ微動三回	歩行者ニ感ズ	臥羊十餘頭卒ニ起立ス	感大	前記地震以後十九時迄ハ數分間舞三地鳴微動ヲ	全時繼

同 同																		
大正六年十二月																		
二五	二	同	三	二	一	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二〇六	二	一	四・七	一九・四	三・二	五・一	一・三〇	一・三〇	一・三〇一	一・三〇	一・三〇							
四 微			二極微	三微	二微	二極微	二極微	二極微	三極微	二極微	二極微	二極微	極微	極微	極微	極微	強稍 急	
急																		
最初ノ鳴動ヨリ約二十分間位ノ如キ音響ヲ聞ク	地鳴ナシ	地鳴	地鳴	地鳴	地鳴	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ	地鳴アリ

部トナセドモ余ハ猶ホ此等ノ極微震ノ震原ニ關スル知識ヲ得ンガ爲メニ所員諸氏ニ問フニ其多數ノ記憶ニ存スル發震ノ方向ト初期微動ノ繼續時間トヲ以テセシニ西微南及ビ〇・三秒ヲ得タリ但シ此方向ハ微震ノ大多數ニ屬スルモノニシテ右ノ外少數ノモノハ西北西即チ塚原硫黃山ノ方向ヲ指スモノアリ又極メテ少數ハ東微北實相寺山ノ方向ニ當ルモノアリ此等ノ少數ヲ除クトキハ殘餘ノ大多數ハ略ボ西微南ノ方向ヨリ發震スルコトニ一致セリ若シ此方向ニ於テ初期微動繼續時間〇・三秒ニ相當スル震原距離二・二糠ヲ取ルトキハ鶴見岳ノ東腹ニ在ル側火山御釜ノ臺附近ニ到著ス

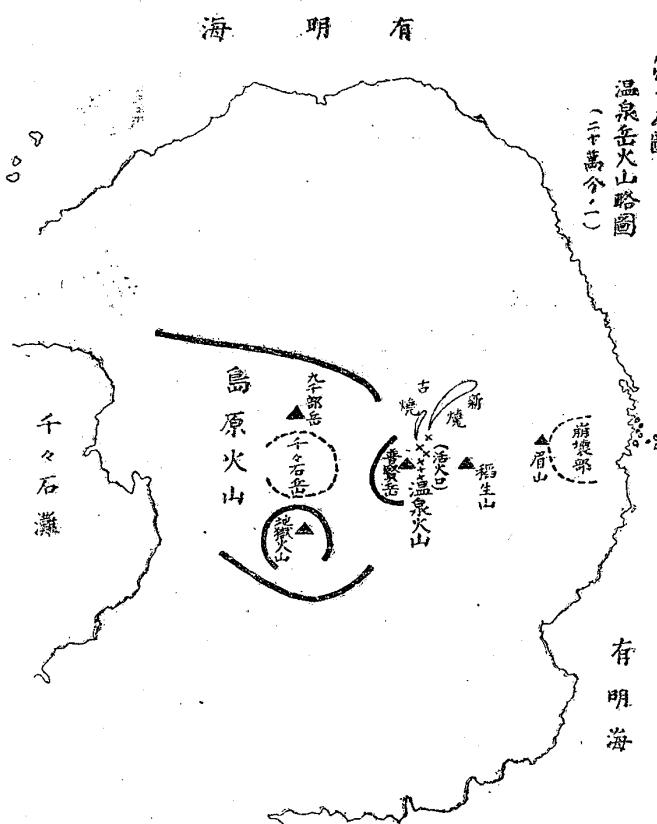
前記ノ極微震ハ其感震區域極メテ狹小ナルモノ、如ク御釜ノ臺ノ東微南二里ニ在ル別府町ニ於テハ之ヲ感ジタルコト極メテ少カリシト言ヘリ但シ此種ノ鳴動ハ土地固有ノモノナリシナランカ傳説ニハ之ヲ躍石ノ跳躍スル響ナリトセリ即チ國誌ニ載スル所ニヨレバ山上ニ神祠及三池アリテ池ハ神祠ノ下ニ注グ故祠ノ址老杉數株アリ凌霄トシテ矗立ス其前山巨石有リ大サ九尺許リナリ躍石ト名ヅク其躍上スルコト數十丈聲遠ク二里餘ニ聞フ相謂フテ風雨ノ兆トナス蓋シ零陵ノ石燕（零陵山ノ石燕ハ風雨ノ際飛廻リ風雨止メバ又元ノ石トナルト云ヘリ）ノ類ナラン

戊 溫泉岳

溫泉岳火山ニ就イテハ曩ニ本會囑託員理學士駒田亥久雄氏ノ地質調査報文ノ成レルアリ（本報告第八十四號）其噴火習性

モ詳細ニ論究セラレタル所アリ今左ニ一二ノ卑見ヲ添フ
温泉火山ハ其物理的構成上阿蘇火山ニ類似セリ卽チ中央火口
丘トシテ九千部岳千々石岳地獄火山等ハ其内部ニ於テ北ヨリ
南ニ並ビ千々石岳普賢岳稻生山眉山ハ東西ニ列レリ而シテ有
史以來著シキ陽性活動ヲナシタルヲ普賢岳ナリトス

第十六圖



普賢岳ハ外輪山上ニ噴出セルモノニシテ温泉岳火山中ノ最高峰タリ有史以來ノ噴火口ハ數個アリテ南北線上ニ並列シ此線ハ普賢岳ノ頂上ヲ少シク東ニ下レル位置ヲ通過セリ（此線ヲ假リニ温泉岳ノ活火口線ト名ヅク第十七圖參照）明暦以後ノ

噴火口ハ其位置明カナレドモ其以前ノモノニ就イテハ據ルベキ記録ナシ何レノ場合ニ於テモ噴火勢力比較的ニ微弱ナリシガ爲メニ之ヲ傳フルノ史ニ乏シキモノナラン但シ時代ヲ詳ニセザルモ噴火口ノ跡ト見ルベキモノハ少ナカラズ普賢岳ノ東方眉山ニ聯絡セル峯巒中板底ト云ヘル平地ハ東西二町南北一町許中窪クシテ池ノ如ク草木生ゼズ土地青色ヲ帶ズ寛政地變數年ノ後樵夫死セルコトアリ又其上ニ摺鉢谷ト名ヅクル地アリ方四五町ノ間地窪ミタル所多シ岩石累積シ恰モ古燒新燒ニ異ナラズト此等ハ何レモ其例ナルベシ

(一) 貞觀二年(西曆紀元八百六十年)三代實錄ニ曰ク貞觀二年肥前國從五位下溫泉山ノ神ニ從五位上ヲ授クトアリ是レ此前ニ既ニ陽性活動ヲナシタルガ爲メニ從五位下ヲ授ケラレ今又活動ヲ繰返シタルガ爲メニ位階ヲ進メラレタルモノニアラザルナキ力

(二) 明曆三年(西曆紀元千六百五十七年)噴火ノ年代ヲ或ハ天和年間トセルモノアリ溫泉岳ノ活火口線ノ北部ニ位スル飯洞(或ハ半洞トモ記ス)水甕ノ形ヲナスニヨリテ斯ク名ヅケタルモノナランカ岩峯ノ南麓ヲ破リ數日間ニ瓦リテ鎔岩ヲ流出セシメタルモノニシテ鎔岩ノ流路僅ニ一・二粡兩尖端ノ高距四百三十米、面積〇・一平方粡、幅最大ノ處ニテ凡ソ百米、體積〇・〇〇八五立方粡(此ノ數字ハ駒田理學)

士ノ調査ニ據ル）ニシテ勢方餘リ大ナラザリシコトヲ知ル之ヲ古燒ト名ヅク寛政ノ新鎔岩タル新燒ニ對シテ然カ稱フルナリ普賢岳ノ頂上ヨリ路ヲ北東ニ取り以テ島原町ニ下ラントスルニ當リ先ヅ其右方ニ蜿蜒トシテ現ハレ出ヅル岩塊是レナリ其上端ニ有名ナル鳩穴アリ是レ即チ鎔岩ノ隧道ニシテ洞ノ長徑三十尺ニ達シ三十度乃至三十五度ノ傾斜角ヲ以テ西々北ニ向ヘリ（鳩穴ノ測量同前）洞内冷氣甚ダシク盛夏ノ候ト雖モ洞底ニ猶ホ氷塊ヲ殘留セシム此噴火ニ際シテ北方各村ハ夜行ニ燭ヲ秉ラザルコト數日ナリシト云フ

駒田理學士ノ調査ニヨレバ此明暦噴火ニ引續キ翌年ニ於テハ溫泉火山ト野岳トノ間ニアル赤松谷ニ激甚ナル爆裂現象ヲ起シ又此火口ヨリ多少ノ泥流ヲ出セリトアリ余ハ此ノ斷定ニハ多少ノ疑ナキト能ハズ記録ニ據レバ明暦四年深江村中木場村ノ奥谷（赤松谷ノコトナルベシ）ヨリ出水シ兩村ニ氾濫シ死亡者三十餘人アリ安徳川原ハ此時生ジタル水道ナリト云フ是レ恐ラクハ噴火ニ由リシニハアラザルベシ

（三）寛文三年（西暦紀元千六百六十三年）三月普賢岳九十九島池燒出シ二十五日目大雨ニテ消ユ（小濱由來記）

寛文三癸丑ノ年、此年ノ十一月二十三日（西暦十二月二十七日）ノ夜、寅卯ノ刻ニ音來リ溫泉動搖シテ翌朝烟見ユ（渡邊玄察日記）

此等ノ記録ニヨリテ見ルニ明暦ノ餘噴火トシテ其噴火後六年

ニ寛文ノ噴火ヲ起シタルモノナルベシ其勢力ニ至ツテハ一層微弱ニシテ既成ナルカ或ハ新成ナルカヲ詳ニセザレドモ九十九島ノ小噴火口ニ於テ大雨ニテ冷却スル程ノ少量ノ鎔岩ヲ湛エ尋イデ半歲餘ノ後再ビ輕微ナル噴火ヲナシタルモノナルベシ

（四）寛政四年（西暦紀元千七百九十二年）溫泉岳ノ寛政噴火ハ明暦ノモノニ比較シテ其勢力稍勝ルモ甚シキ相違アルニアラズ唯眉山ノ山崩レニヨリテ津浪ヲ惹起シ其災害我邦ノ記録ニ於ケル最大級ニ達シタルガ爲メニ學者往々兩者ヲ混同シ隨ツテ溫泉岳ノ噴火勢力ノ偉大ナルヲ認メントスルニ至レリ眉山（俗名前山）ハ溫泉岳ノ活火口線ノ東一里ニアリ溫泉岳ノ陽性活動ハ有史以來右ノ活火口線ノミニ限ラレタルモノ、如シ寛取噴火ニ於テハ此線上ノ南北數ヶ所ヨリ相繼イデ噴火シ其最北ノモノハ鎔岩ヲ流セリ溫泉岳ノ寛政噴火ヲ記述スルニ當リテハ陰陽兩性ノ活動ヲ區別セザルベカラズ

寛政ノ溫泉噴火ハ地震ヲ以テ始マレリ地震ノ初發ヲ其前年ノ十月八日トナス以後毎日數回感震シ特ニ十一月十日ヨリハ強烈トナリ地震每ニ前山ノ土石崩レ落ツ中ニモ小濱村宇鬱串ニ於テハ山崩レノ爲メニ山番小屋ヲ埋メ番人夫婦壓死セルアリ此年正月ニ至リテ山岳ノ鳴動益々頻繁トナリ終ニ正月十八日夜半地獄跡火口（活火口線上ノ南端九十九島火口ノ北方ニシテ普賢禿倉前ナリ後地獄跡ト稱ス）ヨリ噴火セリ噴口ヨリハ

煙焰灰砂ヲ噴上グ泥土ヲ飛散セシメダリ其勢力ハ翌々二十日ニ至リテ最モ激シク爾後次第ニ衰へ數十日ノ後ニ至ツテハ噴泥ノ高サ五六尺ニ過ギザルニ至レリ

地獄跡噴火後十五日ニシテ二月四日飯洞岩峯ノ北麓「吹出シ」ヨリ更ニ噴火ヲ始ム是レ即チ穴迫谷ニ臨メル位置ニシテ活火口線ノ北端ヲ占ム初メ琵琶ノ首（或ハ琵琶ノ撥）邊震動甚シク砂石崩落シタリシガ六日ニ至リテ土砂ヲ噴出シ九日ニ至リテ終ニ鎔岩ヲ流出セシム新焼是レナリ（火口ハ通常穴迫ノ名ヲ冠ス今新焼火口ト假稱ス）斯クシテ流出シタル新鎔岩ハ穴迫谷ニ沿フテ次第ニ進行流下シ數月ノ後ニ於テ其先端三糸ノ距離ニアル千本木ニ達セリ（駒田理學士ノ計算ニヨレバ鎔岩ノ面積ハ〇・七平方糸ニシテ體積ハ〇・一一立方糸ナリ）

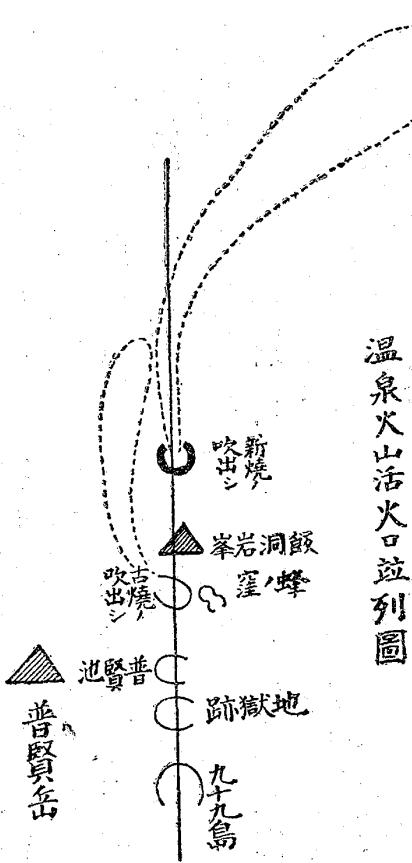
二月二十九日（地獄跡噴火ヨリ四十一日、新焼噴火ヨリ二十六日）飯洞岩峯ノ南麓蜂ノ窪ヨリ更ニ噴火ヲ始ム此火口ハ明暦年度ノ火口（古焼火口ト假稱ス）ニ接セリ噴火ハ啻ニ之レノミニ止マラズ越エテ四日即チ閏二月二日ニ至レバ古焼ノ地亦七ヶ所ニ噴火シ飯洞岩ノ峯ハ其頂ヨリ崩レテ二峯トナリ二所ノ間地裂クルモノ數ヶ所幅三四尺乃至十七八尺ニ及ビ各所ノ焰煙天ヲ焦セリ

寛政ノ陽性活動ハ右ノ如ク活火口線上ニ於ケル南北數ヶ所ノ噴火口ヨリ相繼イデ噴火シ始メタルモノニシテ活火口線ニ沿ヒテ裂線ノ存在ヲ暗示セリ其後活動ノ勢力次第ニ衰ヘシモ而モ急ニ減退スルニ至ラズ此間三月朔日ヨリハ眉山方面ニ於ケ

ル陰性活動盛ニシテ四月朔日ニ至リ山崩レト共ニ大津浪ヲ起シ此大變災ノ爲メニ前ノ噴火ハ全ク顧慮セラル、コトナキニ至レリ但噴火ハ時々覺醒シ同年四月二十六日ニハ新焼ノ噴火勢ヲ増シ六月朔日ニハ地獄跡再び活氣ヲ呈シ七月二十八日ニハ地獄跡、蜂ノ窪新焼皆一齊ニ活動シ噴煙盛ナリキ其後ノ勢力恢復ニツキテハ特記スベキ程ノコトハナカリシモノ、如ク唯三四年ヲ經テ普賢ノ餘噴火ヲ傳フルアルノミ寛政噴火ハ斯クシテ局ヲ結ベリ次ニ眉山山崩レヲ説明セン

寛政噴火ハ斯クシテ局ヲ結ベリ次ニ眉山山崩レヲ説明セン

第十七圖



眉山ノ山體ハ地震或ハ水ノ作用ニヨリテ崩壊シ易キ構造ヲ有セリ、地變ノ沿革モ亦之ヲ證ス、眉山ニハ著シキ山崩レノ跡四個アリ、何レモ泥流ノ尾ヲ曳ケリ、而シテ未ダ曾ツテ噴火現象ヲ記錄シタルコトナシ、寛政ノ噴火ニ際シテハ前年ヨリ既ニ局部地震ノ發生アリ十一月十日ヨリハ強震トナリ地震毎

ニ前山ノ土石崩レ落チ二月十四日ニハ眉山前面ノ峰ノ巣河原ニ地迄リアリタリキ噴火ノ年三月朔日夕刻ヨリハ地震特ニ強烈頻繁ニシテ當日ハ大小三百餘度ニ及ビ翌日及ビ翌々日ニ至ルモ猶ホ百度ヲ越エ其響大砲ノ如ク或ハ奥山（普賢岳）ヨリ

前海ヘ或ハ海ヨリ山ヘ鳴リ響ケリ震原ハ今日之ヲ詳ニスルコトヲ得ザレドモ前山ニアリシカ或ハ少ナクモ島原町ヲ餘リ遠ク隔タラザル所ニアリシナルベシ（現時温泉公園ニ於テ時々感ズルコトアル局部ノ火山性地震ニシテ之レト同震原ナルモノ多數之レ有ルベシ）此等ノ地震ニヨリテ前山ノ土石ハ崩落特ニ夥シク此爲メニ火ヲ發シタルモノカ前山ニ山火事アリ就中二日早朝ノ地震ハ特ニ烈シクシテ島原ニ於テハ住宅ノ建真ノ外レタルモノアリキ凡テ斯ノ如キ程度ノモノ朔日ニハ四回二日ニハ二回ヲ算セリ島原城ノ内外石垣石塀等ノ破損少ナカラズ軒庇モ多クハ落チ壞レ城内鐘樓ノ石垣モ損シタルガ爲メニ報時ヲ一時中止セル位ナリキ地割レハ安徳村ノ内、及ビ島原村今村名（島原村大字今村ト云フガ如シ）ニ最モ著シク初鐵砲町ニ於テモ亦深キ地割ヲ生ジ城ノ東方ニ於テハ城内東堀端ヨリ市内三會町マデ清水ヲ湧出セリ杉谷村ニ於テハ折橋ヨリ六ツ木ニ至リ長サ十町幅七八寸ノ地割ヲ生ジ折橋權現ノモ著シカリシヲ以テ震原モ大抵前山若シクハ之ヲ餘リ遠ク隔テ

ラザル處ニアリシナルベシ尙ホ之ヲ詳言スルトキハ震原區域ハ前山ノ東方ニテハ海岸若シクハ數里ノ沖合マデ擴ガリシヤ計リ難キモ南北ニテハ前山ヲ中心トシテ餘リ遠クニハ擴ガラザリシナルベシ

地震ハ其後次第ニ衰退シタレドモ而モ急ニ絶滅スルニ至ラズ三月八日夜半ニ至リテハ前山ノ東南面島原村今村名ノ上ミニアル字楠平（或ハ川原平）ニ於テ長サ百八十間横二百間ノ土地迄落チ其跡長サ八九十間程赤色ヲ呈セリ此地迄リハ地震ノ後ナリシトモ言ヒ或ハ天氣和融ノ際突然起リシトモ言ヘリ島原大變記ニ曰ク

前山南北ノ平、中木場村少シク手前甚ダ嶮岨ナル所南北百二十間、堅五六十間ト見エテ楠木生ヒ茂リタル所、三月九日何ノ故モナク至ツテ和融ノ日ニズレケレバ、人皆驚キ恐レ異ナル思ヲナシテ、取々様子ヲ窺ヒ見ルニ、山ノズレ跡、赤土岩ニシテ凡八九十間共又ハ五六十間トモ積ルコトアリテ決定セズ區々ノ噂ナリ、然レドモ此山今マデ何ノ病有トモ見エザレバ、唯穴迫ノ焼ケノミヲ怖レケルコトニテ、聊カモ此山ニ別儀アルベクモ思ハレズ、其頃ノ説ニモ中國蘇州ニモ同様ノズレ山アル抔ト噂モ有ツテ、旁左ノミ勞トセザルハ嗚呼悲哉、夢ニダニ前兆ト思知ルモノナク、只地震遠ノキケルニ隨ヒ、遠村近郷へ引越居ケル人、思ヒ／＼ニ皆家ニ歸リ集リテ後、四月朔日暮、此山抜テ洪波變トナリシ後、始メテ思ヒ悟リテ臍ヲ噉ミ歯ヲ切ルノ悔アレドモ更

ニ効ナシ

右ノ記事ハ絶對ニ信ジ得ベキモノニアラザルモ他ノ記事ニヨリテモ此山崩レノアリシ以前ハ土地比較的ニ平穩ノ状況ニアリシコトヲ認メ得ベシ而シテ斯ノ如キ程度ノ山崩レハ相當ノ地震ヲ起シ得ベキヲ以テ此山崩レニ伴ナヘル地震ハ山崩レニヨリテ起サレタリト見ル方穩當ナルガ如シ兎ニ角地變ハ陰曆八日ノ夜半ニ起リシヲ以テ當時ニアリテモ當ノ地震ト山崩レトノ先後ヲ斷ズルコトハ困難ナリシナルベシ

四月朔日ノ大變ニ至ルマデ山崩レハ所々ニ起リタリト雖モ前記三月八日ノモノヲ以テ最モ著明ナルモノトシ次ニ三月十四日ニ於テモ深江村ニ於テ諸所崩レタルコトアリ爾後土地次第ニ鎮靜ニ歸シ土民ハ最早何等ノ變災ナキモノト安ンジ避難者モ大抵歸家スルニ至レリ

三月朔日以來ノ地震ハ温泉岳噴火ト間接ノ關係アルベキモ性質ト震原ノ位置トヲ異ニシ全然相區別シ得ベキモノナリトス即チ此等ノ地震群ハ他ノ火山地方ニ於ケル陰性活動ト同等ノモノタリ今明治年間ニ於テ經驗シタルモノニ類ヲ求ムルトキハ二十二年七月二十八日ノ熊本地震、三十三年十一月五日ノ

三宅島地震、三十八年六月七日ノ伊豆大島地震ヲ得ベシ右何レモ死火山或ハ活火山若シクハ其附近ニ起リテ多少ノ前震及

ビ餘震ヲ有シ又相當ノ被害アリキ而シテ温泉岳火山ノ陰性活動ノ爲メニ起リタル被害ハ三月八日マデニ左記ノ如クナリキ（金井俊行著島原地變記ニ據ル）

潰家二十三軒、半潰家三十四軒、潰土藏三棟、半潰土藏一棟、廄、小屋等潰半潰二百八十八棟、壓死二人、斃牛一頭ノ前兆ヲ示サリキ其景況ノ記録ニ曰ク

此日暮後強烈ナル地震二度累々至リ百千ノ大雷一度ニ落ツルガ如ク天地モ崩ル、許リノ響アリタレバ諸人大ニ驚キ家中ハ直ニ登城シタレドモ其何ノ變タルヲ知ラズ暫クシテ市街ニ號哭叫喚ノ聲ヲ聞ク又門衛ハ市街ニ潮光アリ洪波ノ景況ナルヲ報ズ既ニシテ血ニ染ミ泥ニ塗レタル市民逃げ來リ洪波ヲ報ズ然レドモ未ダ前山ノ破裂ヲ知ラズ天明ニ至リ始メテ其狀ヲ見驚愕譬フルニ物ナシ（金井俊行著島原地變記）山崩レニヨリテ絶大ナル地震鳴動ヲ起シ崩壊物海中ニ突入シテ津浪ヲ起セルノ狀歷然タリ此時ノ地震ハ九州一圓ニ感ズル程ノ强大ナルモノナリシガ其二回起リタルニツキテハ種々ノ解釋アルベシ即チ前者ハ火山性地震ニシテ後者ハ山崩レノ地震ナルカ、二回共ニ山崩レノ地震ナルカ將夕前後ノ地震ハ合シテ一ノ地震ニシテ前者ハ初期微動ニ相當シ後者ハ主要部ニ相當スルモノナルカ今之ヲ詳ニシ難シ

次ニ前記ノ程度ノ山崩レニヨリテ生ズベキ地震ノ大サヲ説明セントス

眉山破壊部ノ體積ヲ〇・五立方尺（大森博士ノ計算ニヨレバ〇・五五立方尺ニシテ駒田理學士ノ計算ニ據レバ〇・四八立方尺ナリ）トシ比重ヲ一、墜落セル高ナヲ平均三〇〇米トスルト

キハ其重力ニ基ヅケル勢力 $\times 10^5$ 坎米トナリ當ニ前記ノ程度ノ地震ヲ起シ得ベキナリ今比較ノ爲メニ二三ノ噴火或ハ地震ノ勢力ヲ摘錄セんニ（一）明治二十六年五月十九日吾妻山ノ破裂ニツキ大森博士ノ計算ニヨレバ噴出ノ勢力ハ 1.2×10^5 坎米トナル但シ噴出ノ平均ノ高サ 100 米、體積ヲ五〇〇〇立方メ、比重ヲ一・三トセルナリ又此場合ニ於ケル地震運動ニツキ震波ノ單弦運動ナルコト震波ノ達スル深サ二五〇米ナルコト等ノ假定ニ基ヅケル計算ニ據レバ其勢力ハ噴出ノ勢力ニ比較シテ頗ル微小ノモノトナレリ（二）明治四十四年乃至大正二年淺間山數回ノ爆發ニツキ平均ノ初速ヲ每秒一五〇米、噴出ノ體積ヲ五〇米立方、比重ヲ一トス（大森博士調査）ルトキハ其平均ノ勢力ハ 2.8×10^5 坎米トナリ前記吾妻山ノ場合ノ凡ソ二倍トナル（三）明治四十二年八月十四日ノ姉川地震ニツキ震原ヲ中心トシテ半徑二十二粡ノ區域内ノ平均振幅ヲ七粡（此區域ノ境界上ニアル彦根ノ振幅）トシ又同一〇〇粡ノ區域ノ平均振幅ヲ一粡トシ猶ホ震動ノ週期ヲ二秒、其他ヲ吾妻山破裂ノ場合ノ地震ノ如ク假定スルトキハ地震ノ勢力ハ 10^6 坎米トナリ前記噴火ノ勢力ト同程度ノモノトナル（四）大正三年三月十四日ノ秋田地震ノ勢力ハ姉川地震ノ場合ニ略米、比重二、ナリ落チタル高サ 20 米トシ此位置ノ勢力ガズ即チ斯ノ如キ程度ノ山崩レハ大地震ノ結果トナシ得ベキモ

原動力トハ成リ得ベカラザル數量ナリトス（五）明治二十二年七月二十八日ノ熊本地震ニ於テハ震域及ビ震度前記ノ二地震ト同程度ノモノナレバ其勢力モ亦同程度ナリシナラン今眉山ノ地ニリノ勢力ヲ以上ノ噴火或ハ地震ニ比較スルニ略ボ同一ノ程度ニシテ寧ロ此等ニ優ルコトアルモ劣ルコトナキガ如シ而シテ此地ニリノ勢力ハ主トシテ地震竝ニ津浪ノ勢力トナリシモノニシテ其地震ガ明治二十二年ノ熊本地震ノ如ク九州一圓ニ感ジタル關係モ之ニヨリテ首肯シ得ラルベシ

四月朔日ノ眉山崩壞ノ原因ニツキ當時ノ士人ノ見解ヲ今日ノ術語ヲ用ヒテ記載スルトキハ「地震ニヨリテ生ジタル地裂線ニ沿ヒ自己ノ重力ノ作用ニヨリテ崩壞シタルモノナリ」ト言ハシカ大森博士モ夙ニ此見解ヲ有セラレ（本會紀要第一冊一四四頁參照）布畦ニ於ケル「マウナ、ロア」火山ノ西紀千八百六十八年ノ噴火ニ伴ヘル局部ノ強震ガ山崩レヲ起シ隨ツテ大津浪ヲ生ジタル例ヲモ舉ゲテ其然ルベキヲ説明セラレタリ眉山崩壞ニヨリテ生ジタル結果ハ地形ノ變化ト大津浪ノ發生ナリトス前者ハ永久的ニシテ後者ハ一時的ナリ溫泉岳火山ノ陽性活動ガ前例ニヨリテ微力ナリシニ似ズ陰性活動ノ影響ハ實ニ莫大ニシテ近年ニ於ケル我邦ノ變災ニ其匹儔ヲ求ムルトキハ僅ニ弘化四年ノ善光寺地震、安政元年ノ南海道、東海道地震津浪、安政二年ノ江戸地震、明治二十四年ノ濃尾地震、明治二十九年ノ三陸津浪ノ數例ヲ得ルニ過ギザルナリ

面ニシテ此崩壊ノ爲メニ天狗山ハ高サ五百尺ヲ減ジ崩壊ノ跡ハ六流ノ凹谷ヲ作リテ恰モ屏風ヲ立テタルガ如ク崩壊物タル岩屑泥流ハ山麓ナル安徳村北名、島原村今村名ヲ人畜ト共ニ深ク土中ニ埋メ島原港ヲ沙漠トナシ其ノ下流ハ安徳島原二村ノ海岸ニ於テ南北一里以上ニ擴ガリ餘勢海ニ入リテ數十ノ島嶼ヲ作り陸上ニハ無數ノ丘陵（流レ山）向背相望ミ數十ノ池

沼水光相映ズルニ至レリ而シテ崩壊物ニヨリテ陸地ノ被覆セラレタル面積ハ凡ソ六平方糸ニシテ島嶼ノ實數ハ寛政十二年ニハ五十九個（伊能忠敬ノ測量圖ニヨル）ヲ算シタレドモ現今ハ減ジテ三十餘個ニ過ギズ但シ事變前ニ於テモ島原港ノ前アラザルナキカ

津浪ノ起點ハ明カニ有明海ニ於テ島原ノ前海ナルガ之ニ接セル沿岸特ニ此中心ニ對シテ漏斗形ヲナセル港灣ハ洪波ノ襲來スル所トナリ莫大ナル損害ヲ生ジタリ今被害區域ヲ當時ノ藩領ニヨリテ區別スルトキハ（一）松倉侯ノ領地島原半島ニ於テハ島原村、安徳村ヲ中心トシテ東半ノ沿岸即チ北ハ西郷（中ニ佐賀侯ノ領邑神代村ヲ含メリ）ヨリ南ハ南有馬ニ至ル部分（二）細川侯ノ領地ノ中有明海ニ蒞メル地即チ飽田、玉名、宇土ノ三郡（三）松倉侯ノ預リ地タル天草郡ノ中有明海ニ瀕セル地ニシテ島原ニ最モ近キ大矢野島ヲ最トシ上島之ニ次ギ上下兩島ガ漏斗形ヲナシテ本渡ノ瀨戸ヲ夾ム邊ニ於テ再ビ著明トナレリ津浪ノ高サハ島原半島ニ於テ最大ニ達シタルナル

ベク潮ノ高キコト平潮ヨリモ三十間乃至十九間ナリシト言ヒ又天草郡ニ於テハ之ヲ十五丈乃至二丈五尺トセリ是レ孰レモ海水ノ打上ゲタル高サニシテ隨ツテ津浪ノ高サハ此二分ノ一乃至三分ノ一ノ程度ナリシナランカ其被害ノ概數左ノ如シ

（一）島原松倉領
流失

藩及家人ノ所有家屋 八八

町在住家 三二八四

町在ノ倉庫、廐、番所 一、九八七

社寺 三九

水車小屋 六

家屋合計 五、四〇四軒

外ニ在潰家焼失二〇在潰灰小屋焼失二五、町潰五

橋 五六

鳥居 一二

船 六三二

流死

扶持人 五七六

町在 八、八三五

旅人 二八〇

社寺 五六

穢多 六七

計 九、八一四人

牛馬 四九六

荒田畑 三七九町六反四畝
荒鹽田 二二町三反二畝

(二) 肥後細川領 三一、七七七間

破損石垣堤防
流瀆家屋

住家 二、二五二

番所 六
社寺 二
計 二二六〇軒

船 一〇〇〇餘
流死

四、六五三人

牛馬 一五一

荒田畑 一、一三〇町九反五畝

荒鹽田 二〇町八反

破損石垣堤防 六、三五〇間

(三) 天草郡

流失

住家 三七三

倉庫、廐 四四一

計 八一四軒

船 六七

流死

三四三人

牛馬 一〇九

荒田畑 一七一町四反六畝

荒鹽田 二〇町七反四畝

破損石垣 六五〇間

今此等ノ損害ノ中人命ト家屋トヲ被害海岸線ノ里數ニ比較ス

ルトキハ次ノ如シ

區域	島原	細川領	天草	被災海岸線里		流失家屋數	流死人數
				總數	平均數		
計	一四	二二	二三	五、四〇四	三八五	九、八一四	七〇一
	五八	二二	二三	二、二六〇	一〇八	四、六五三	二二二
	八、四七八	二三	二四	八一四	三五	三四三	一五
	一四六	二四	二五	一四、八一〇	二五七	一四、八一〇	二五七

即チ災害ハ島原東半部ニ於テ最激烈ニシテ對岸ナル肥後三郡之ニ次ギ天草ハ其餘波ヲ被リタルニ遇ギズ實際肥後三郡及ビ天草ノ有明海ニ蒞メル地ハ島原半島ニ比較シテ寧ロ三角江ニ富ミ若シ津浪ガ地震ニヨリテ起リタル場合ノ如ク波長絶大ナリシナランニハ其災害島原ニ匹敵スルモノアリシナランガ津浪發生點ヨリノ距離稍大ナリシガ爲メニ災害比較的ニ輕力リシハ波長小ナリシガ爲メニ波高ノ急ニ減殺セラレタルニモヨルモノナルベシ

以上ノ所說ヲ概括センニ温泉岳火山ノ噴火勢力ハ決シテ大ナルモノニアラズ勿論阿蘇、霧島ノ兩火山ニ比較スベカラザルコトハ明白ナルガ櫻島ニ比較シテモ遙ニ下位ニアリ即チ過去一千年間ニ於テ噴火ノ記録ハ明暦、寛文、寛政ノ三回ニ過ギズ特ニ寛文度ノ噴火ハ明暦度ノ餘噴火ナルベク兩者ヲ合シテ一トナストキハ最近一千年間ニ僅カニ二回ノミトナル而シテ兩者ノ年數間隔凡ソ百三十年ニシテ毎回ノ勢力甚ダ振ハズ極

メテ一局部ニ噴火口ノ裂線ヲ作リ少量ノ鎔岩ヲ流スニ止マレ
リ而シテ最近ノ噴火タリシ寛政度ニ於テハ其勢力平均ノ場合
ヨリモ寧ロ大ナリシ方ナリシヲ以テ曩ニ安永、天明、寛政年
度ニ相前後シテ噴火シタル本邦諸火山ガ明治ノ末期ヨリ大正
ニ涉リ復相次イデ噴火シタルニ拘ラズ唯溫泉岳火山ノミガ今
日マデ依然トシテ靜肅ヲ保チ些少ノ反應ヲ示サムルハ蓋シ偶
然ノ結果ニハアラザルベシ

山崩レト噴火トハ自ラ別問題タリ他ノ火山ニ於テハ兩者ノ間ニ往々共通ナル關係ナキニシモアラザレドモ少クモ溫泉岳火山ニ於テハ別問題タリ即チ此地方ニ於テハ眉山ヲ初トシテ野岳、普賢岳等崩壊シ易キ構造ヲ有シ就中眉山ヲ以テ其最トスベシ而シテ此崩壊ヲ促ス主原因ハ地震及ビ降雨ナリトス野岳ニ於ケル大崩レハ文政三年ニ於ケル豪雨ノ爲メニ生ジタルナリ故ニ災害豫防ヨリ觀ズルトキハ溫泉ノ噴火ノ如キハ憂フルニ足ルベキモノニアラザレドモ地震及ビ降雨ニ伴フ山崩レハ注意ヲ要スベキモノナランカ但シ寛政四年三月朔日ニ於テ強烈ナル局部地震ヲ起シタル島原地方ガ再ビ同様ノ徑路ヲ取ルコトハ容易ニ之レ無カルベシト想像ス請フ左ニ之ヲ説明セん阿蘇火山系及び霧島火山系ハ局部地震ニ富ム而モ此等ノ地震スル所アリキ就中金峯山附近ニ起ルモノハ島原トノ關係淺シトナサズ實際金峯山ハ島原ノ東僅ニ六里ノ距離ニ在リ現時ニハ大抵火山性ナリ其熊本縣ニ於ケルモノニツキテハ前ニ詳論於テ金峯山地震ハ島原或ハ温泉公園ニ於テ能ク感得セラル

局部地震ハ長崎縣内ニ於テモ其ノ發生少シトセズ享保十年九月二十六日午前二時頃ヨリ長崎市地震強ク晝夜八十餘度ニ及ビ三日間ニシテ始メテ靜肅ニ歸セリ尋イデ十月四日五日ノ兩日ニモ亦地震起リ處々破損セリ降ソテ近年ニ於テモ縣内各地ニ局部ノ微震ヲ起シ其應酬ニ忙シ即チ大正三年八月九日以降數日ニ涉リテ溫泉地方ニ微震十數回アリ越エテ翌四年六月中旬ニ至リ長崎測候所ノ微動計ハ局部地震數多ヲ記錄セシガ七月二十日ヨリ數日ニ涉リテ同種ノ地震一層頻繁ニ起レリ調査ノ結果此等ハ何レモ喜々津(長崎市ノ北東三里)地方ニ起リタルモノニシテ其震度最大ナルハ不注意ニ築造セラレタル石垣ヲ崩壊セシムル程度ニ達セリ享保ノ長崎地震ト云ヒ今又溫泉金峯山ニ連ナル地帶ハ火山性地震ノ發生地タルベシ此地帶上ニ於テ噴火ニ縁アルハ僅カニ普賢岳ノ東方ニ在リテ南北ノ走向ヲ有スル活火口線ノミナルガ若シ災害豫防上ノ見地ヨリ論ズルトキハ之ニ山崩レノ注意ヲ加フルコトヲ忘ルベカラズ現ニ前記ノ喜々津地震ヲ調査シタル後藤理學士モ同地方ニ古來幾多ノ山崩レヲ起シ多少ノ災害ヲ被リシコトヲ注意セリ即チ百五六十年前ニ於ケル船石嶽西側、松尾嶽ノ東方、明治九年ニ於ケル井樋ノ尾嶽北側ノ崩壊ノ如キ是レナリ
溫泉公園ハ地獄火山ノ火口趾ヲ占ムル縣營ノ遊園地ニシテ海拔二千四百尺、大地獄小地獄等ニ於テ大小ノ噴氣口三十餘ア

リ噴氣ノ勢力近年稍衰ヘタリトノ感アリト云フ此地方ニ於テハ時々局部地震ヲ頻發シ浴客中特ニ地震ノ經驗ニ乏シキ外

人ヲ驚カシ間々全村ノ恐惶ヲ惹起スコトアリ其性質ニヨリテ推測スルニ温泉地方自身ニ發生セルモノ、西方千々石灘ニ起リタルモノ等ヲ含ムガ如クナルモ東方有明海ヨリ金峯山地方ニ起リタルモノ多數ナルガ如シ蓋シ鳴動ノ來ル方向ハ東方ニシテ而モ初期微動ノ繼續時間四秒内外ヲ算スルモノ多數ナレバナリ

温泉地方ノ地震觀測ノ必要ナルハ上來所說ノ如シ今之ヲ完全ニセンニハ各種ノ設備機關ヲ有スル温泉公園ニ微動計ヲ据附クルヲ可トスベシ止ムヲ得ザレバ長崎及ビ熊本ノ兩測候所ニ於ケル微動觀測ヲ以テ之ニ代フベシ

第三章 霧島地震帶

第一款 地震概說

霧島地震帶ハ南方琉球ノ鳥島ヨリ北ニ向ヒテ寶七島ニ至リ更ニ北方開聞岳、櫻島、霧島山ヲ貫キ霧島附近ニ於テ方向ヲ北々西ニ轉ジ以テ温泉岳ニ向ハントスル線ヲ主脈トシ別ニ開聞岳ヨリ北々西ニ轉向シ西薩ノ西方海底ヲ過ギテ主脈ノ霧島以北ノ部分ニ略ボ竝行スル支脈アリ明治十八年以降ノ地震ヲ前記阿蘇帶ノモノニ準ジテ列記スルトキハ左ノ如シ但シ表中年次號(表ニ於テハ單ニ「記號」ト記ス)ニ於テ無標ノモノヲ主脈

二屬スル地震トシ星標ヲ附セルヲ西薩支脈ニ屬スルモノトス
第九表 霧島地震帶地震表

記 號												發 震 時	震	地 方	經 度	原	緯 度	地 面 積	有 感 陸	摘 要	要												
*	40a	37	*	36	*	35b	*	35a	*	34	*	33f	*	33e	*	33d	*	33c	*	33b	*	33a	*	31	*	27	*	26	20	18			
四、八、一七、二七、三五	三五	三六	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五	三五												
甑島沖	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久	鹿兒島久												
三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	三、〇〇			
吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇	吾〇〇			
甑灣鹿近屋餉屋近屋西薩薩摩國部北隅大隅國部北薩摩灘																																	
日置郡鹿兒島灣																																	
明治年八月八日																																	
度分度分度分																																	
六三																																	
方里																																	
本年中此點ニ於テ十回地震ヲ感ステ震央地ニテハ烈震																																	
初期微動繼續時間熊本二十秒長崎二十一秒鹿兒島五秒																																	
震央地強																																	
震央附近弱震																																	

以上ノ表ヲ見ルニ霧島帶ノ主支各脈ニ於ケル地震發生順序ツキテハ阿蘇帶ニ於ケルガ如ク或ル法則ヲ發見スベシ即チ主脈ノ活動時期ハ全期間ニ於テ三回ヲ算シ支脈ニ就テハ四回ヲ算ス先ヅ主脈ノ分ヲ列記スルトキハ第一回ヲ明治十八年乃至二十年、第二回ヲ明治三十三年、第三回ヲ大正二年乃至五年ナリトス即チ平均十四年ノ週期ヲ有セリ次ニ支脈ニ屬スルモノヲ列記スルトキハ第一回ヲ明治二十六年乃至二十七年、第二回ヲ明治三十三年乃至三十六年、第三回ヲ明治四十年乃至四十二年、第四回ヲ大正二年ナリトス即チ平均七年ノ週期ヲ有セリ今各脈ニ就イテ今日マデノ経過ヲ考フルニ主脈ハ最後ノ期間ニ於テ此地帶稀有ノ大活動ヲナシ而シテ大正五年ノ水俣地震ヲ以テ終熄セルモノ、如シ果シテ然ラバ此地帶ハ今後少クモ十年間ハ靜穩ノ狀態ニ入ルベシト想像セラル又支脈ハ主脈ノ半週期ヲ以テ大正二年ニ最後ノ大活動ヲナシタルヲ以テ今後兩三年ハ靜穩ナランモ主脈ノ如キ長期ノ平和ハ保チ難カルベシ孰レニシテモ最後ノ活動勢力偉大ナリシ後ナレバ假

令再び活動ヲ繰返スコトアリテモ小規模ノモノタルベシト想
像セラル、ナリ

今主支兩脈ヲ一帶トシテ其活動期ヲ考フルトキハ明治十八年
以來現今ニ至ルマデ五期ヲ得第一期ハ明治十八年乃至二十年
主脈單獨、第二期ハ明治二十六年乃至二十七年支脈單獨、第
三期ハ明治三十三年乃至三十六年主支兩脈連續、第四期ハ明
治四十年乃至四十二年支脈單獨、第五期ハ大正二年乃至五年
支主兩脈連續ノ活動ナリトス若シ夫レ此地帶全部及ビ阿蘇帶
ノ如キ隣接地帶トノ關係ヲ講究セント欲セバ更ニ此地帶ノ諸
火山ノ陽性活動ヲモ合セテ勘考スルヲ要ス

第二款 顯著地震

甲

明治二十六年九月七日ノ知覽地震

此地震ニ就テハ大森博士ノ實地調査セラレタルアリ地震ハ極
メテ局部的ノ性質ヲ有シ烈震區域ハ僅ニ十平方里ニ過ギズ此
區域内ニ於テハ廄ノ顛倒一、居宅ノ半倒一、其他十數棟ノ家
屋土藏ノ破損アリキ

乙

明治二十七年一月四日ノ日置郡近海ノ地震

此地震ハ其勢力前者ヨリモ大ナリシト雖モ震原海岸ヨリ數里
ヲ隔テタル海底ニアリシガ爲メニ陸上ニ於テハ震度ノ大ナリ
シ地方ナカリキ普通地震計ノ記録ニ徵スルトキハ初期微動繼
續時間長崎ニ於テハ二十一秒、熊本ニ於テハ二十秒、鹿兒島

ニ於テ五秒アリシモノ、如シ震原ノ位置ハ斯クシテ前表記載
ノ位置ニ合ス

丙

大正二年五月、十月ノ真幸地震群

及ビ同四年七月ノ栗野地震群

大正二年ノ霧島噴火、同三年ノ櫻島噴火ノ前後ニ於テ霧島山
ノ西麓ニ極メテ顯著ナル地震群ヲ起セルコト數度ナリキ第一
ヲ大正二年五月十八日以後ノモノ、第二ヲ同年十月十七日以
後ノモノ、第三ヲ同四年七月以後ノモノトス右ノ外大正二年
ニ於テハ五月、十月ノ中間ノミナラズ冬季ニ至リテモ時々覺
醒的ニ連續性ノ局部地震ヲ起セリ此等ノ地震ハ其震域極メテ
狹隘ナリシモ震度ハ往々強ノ程度ニ達シ震原タル真幸地方及
ビ其附近ニ於テハ多少ノ恐慌ヲ來タシ又溫泉ニ異狀アリシコ
トヲ唱フルニ至レリ但シ實際ニ於テハ湧出分量、著色等ニ多
少ノ變化ハアリシモ是レスラ餘リ著シキモノニハアラザリキ
次ニ真幸地震群ニツキ宮崎測候所ニ於テ調査シタル地震ノ發
生順序ヲ掲グ

第十表 真幸地震群地震回數表

期	間	微弱震	強震	計
五月十九日ヨリ十二日間	二十四	○	○	○
五月三十日ヨリ二日間	二十一	○	○	○
六月二日ヨリ七日間	二十四	○	○	○

六月二十五日ヨリ八日間	二十三
七月三日ヨリ六日間	○
七月九日ヨリ十日間	二十七
七月三十一日ヨリ四日間	○
八月四日ヨリ十日間	七
八月十四日ヨリ二日間	○
八月十六日ヨリ八日間	三十六
八月二十四日ヨリ三日間	○
八月二十七日ヨリ五日間	十四
八月二十七日ヨリ三十日間	○
九月二日ヨリ四十五日間	六
十月十七日ヨリ四十八日間	○
合計	百二十三
	二十四
	百四十七
	三十七
	七
	三十三
	八

震原ノ位置ハ當時正確ナル調査ヲ缺キシモ余ハ大正四年八月該地ニ出張シテ經驗者ノ記憶ニ残レル震動ノ方向ト初期微動繼續時間トヲ調査シ震原トシテ吉松ノ北西一里程ニ當レル點ヲ得タリ是レ即チ真幸村ニ屬スル位置ナルガ地震群ノ全部ガ此局部ヨリ發生シタル意味ヲ含マザルコト勿論ニシテ時ニヨリテハ多少ノ移動ハ之レ有リシナルベシ

前記ノ地震群ヲ感ジタル後、霧島山ハ同年十一月八日ニ新ニ爆發シ續イテ同年十二月九日及ビ翌三年一月八日及ビ一月十三日ニモ爆發ヲ繰返シタルガ櫻島ノ噴火セルニ從ヒ以後ハ鎮

靜ニ歸セリ然レドモ地震群ハ更ニ翌四年七月十四日ニ至リテ復活シ特ニ今回ハ強サニ於テ一昨年ノモノヨリモ優レル所アリシガ爲メニ震原タル栗野地方ニ於テハ一層ノ恐慌ヲ起シ數日間露營者ヲ出スニ至レリ今左ニ其經過ヲ述ベントス
大正四年七月十四日午後九時十三分栗野、吉松地方ヲ中心トセル強震アリ、栗野吉松ノ間ニ於ケル川添縣道ハ此爲メニ崩壊ノ箇所ヲ生ジ栗野嶽溫泉ニ於テハ道路龜裂シ垣石處々墜落セリ川添縣道ハ水田面ヨリ約一丈ノ高サニ築キ上グラレ且ツ南北ニ向ヘルモノナルガ地震ノ震動ノ方向ニ隨ヒテ長サ十五間程西方ニ崩壊シ田地ヲ押出セリ此地震ニ引續キ同地方ハ強弱震續發シ翌日ニ至リテ止マズ士民前年ノ櫻島爆發ヲ聯想シテ心中惄々露營セルモノ多シ又霧島ニアリテハ湯之野溫泉ノ泉源崖崩レノ爲メニ此處ニハ噴火ヲ豫想シテ恐慌ヲ來タセリ噴出セル等ノ爲メニ此處ニハ噴火ヲ豫想シテ恐慌ヲ來タセリ地震ハ其後次第ニ減少セシガ同月二十四日ニ至リテ再び強震ヲ起シ爾後次第ニ微弱トナレリ實際震央附近ノ居住者ハ其近クニ聳ユル栗野、白鳥等ノ舊噴火口ノ活動ヲ恐レタルガ固ヨリ斯ルコトノ起ルベキ筈ナク人心次第ニ鎮マリシモ十六日以後ハ却テ比較的ニ遠隔シタル地方ニ於テ霧島ノ噴火問題ヲ惹起シ一時新聞紙上ヲ賑セリ
今回ノ栗野地震群ノ中鹿兒島測候所ニ於テ觀測セラレタル主ナルモノハ左ノ如シ

第十一表 栗野地震群觀測表

測候所位置	日	時	初動時間	初期續微	振幅
上ノ原	十四日	二十一時十三分			
同	同	二十六分			
同	同	五十六分			
同	十五日	二時十一分			
同	同	同			
同	十四時五十三分	四時一分			
同	同	四時九分			
同	七時十分				
二十四日	三時四十四分				
同	十七時六分				
同	二時十三分				
二十五日	同				
			四・五秒		
			一・九〇毫		
			一・五〇毫		
			一・五〇毫		
			○・六〇毫		
			○・三〇毫		
			○・三四毫		
			○・六五毫		
			○・三五毫		
			○・二二毫		
			○・四二毫		
			○・二二毫		
			○・八〇毫		
			○・二五毫		
			一・九〇毫		
			○・二二毫		
			○・〇二毫		
			○・〇五毫		
			○・一〇毫		
			○・一五毫		
			○・三〇毫		
			二・〇〇毫		
			○・六〇毫		
			○・一五毫		
			○・三〇毫		
			○・二二毫		
			○・〇二毫		
			○・〇五毫		

瓶三個一ハ南々西ニ二ハ南ニ倒ル、垣石數個皆南ニ落ツ、初期微動繼續時間約一秒又ハ一秒ヨリモ少シク長シ
此地震後地震鳴動殆ド間斷ナク來ル一時間内ニ約二十回ヲ算ス中三回ハ比較的三強カリキ

同 同五時四十四分微一回
同 同六時四分微一回、續イテ微三回、次ニ正午迄ニ六回、午後二時迄ニ二回

同 午後五時五分一回、同十二分微一回
同 同 五時十二分ヨリ同十時マデニ強震一回、弱震二回

同 同 十時三分稍強、續イテ同十一時マデ
二十五日 午前三時十四分強一回續イテ小三回

同 同 十時五十三分弱（稍；弱半方）一回、微一回

同十一時十分弱一回

二十六日 午前十時十四分弱二回

同 國 十時弱一回

同 同 四時二分極微一回

同 同 七時九分弱一回
二十八日 午前三時弱一

同 同 十時五十九分弱一回

二十九日 午後〇時三十五分極微一回、弱二回

栗野嶽溫泉場

二十四日午後九時十三分ノ強震 垣石南ニ墜ツ
二十四日午前三時四十四分ノ強震 十四日ノ強震ヨリモ稍強カリシ様思ハル

第九十二號 九州地震帶

三十一日 少シ

八月一日 午前極微二回、午後弱二回

(以上溫泉管理者觀測)

八月六日 午前七時十分弱一回、方向北五度西

同 同七時十二分弱一回、方向正北伏角十六度、初期微動繼續時間〇・七秒、極微震及微震五六回

同 同七時四十分弱一回、方向北十二度東、初期微動繼續時間〇・三秒

(以上今村觀測)

栗野村々役場

地震東北東ノ方向ヨリ來ル、初期微動繼續時間一秒乃至〇・五秒

恒 次

地震ノ感覺ハ栗野村ニ比較シテ頗ル鈍シ

吉松村々役場
地震ノ方向東南、初期微動繼續時間一秒

牧園村種馬牧場

地震ノ方向北十五度西

以上觀測ノ結果ヲ綜合シテ余ハ今回ノ地震群ノ震原ヲ栗野嶽溫泉北方半里ノ位置ニ推定セリ即チ吉松ノ南東一里許ノ位置

ニ當ル而シテ大正二年ノ地震群ハ却ツテ吉松ノ西北一里位ノ

位置ニアリシコト前述ノ如クナルヲ以テ震原ハ實際最初ノ位

置ヨリ南東二里ノ點ニ移動シタルコト、ナル尙ホ又栗野地震

群ノ震原ヨリ南東四里ノ位置ニハ霧島活火口タル御鉢ノ存在

スルアリ此線ニ沿ヒテ相次イデ地震群ヲ發生セシメルコト蓋シ偶然ニアラザルベシ

丁 大正二年六月二十九日、三十日ノ日置地震
此地震群ヲ始メテ一般ニ感ジタルハ二十九日午後五時ノ強震

以後ノコトナレドモ前日ニモ微震一回アリシモノ、如シ而シテ二十九日ノ強震後ハ十數回ノ輕震頻々トシテ至リ遂ニ三十日午後四時七分ニ強震ヲ起シ尋イデ同四時五十分ニ至リ烈震トナリ薩摩中部ノ西岸ニ於テ多少ノ崖崩レヲ生ジ家屋廃舍ノ壓倒セラレタルモノアリ此烈震以後ハ頻度頓ニ減却シ數回ノ微弱震ヲ一兩日間感ジタルノミニテ略ボ靜穩ニ歸セリ

前記烈震ニツキ各地ノ概況左ノ如シ

日置郡永吉村——震度強、鳴動ノ方向北東、土砂崩壞ノ爲メ家屋破壞三棟、土

藏壁崩レ一棟及ビ同壁龜裂一棟

日置郡吉利村——震度強、鳴動ノ方向北東、里道三十間ノ間ニ龜裂ナ生ズ、土藏壁龜裂ス、煙草畠二畝歩位ニ於テ一尺以上掘上ゲアリタル畦ヲ平ニス

日置郡伊作村——震度強、鳴動ノ方向北東、崖崩レ十數ヶ所、小屋ノ壓倒一棟

日置郡田布施村——震度強、鳴動ノ方向北、石垣破壞二ヶ所長サ約十五間、墓

石ノ顛倒十基、崖崩レアリ

日置郡日置村——震度強、鳴動ノ方向北東、崖崩レ一ヶ所、土地ノ龜裂數ヶ所
土藏壁龜裂ス

日置郡上伊集院村——震度強、鳴動ノ方向北西、崖崩レ田地ノ埋沒セシ所數ヶ所、土藏壁龜裂一棟

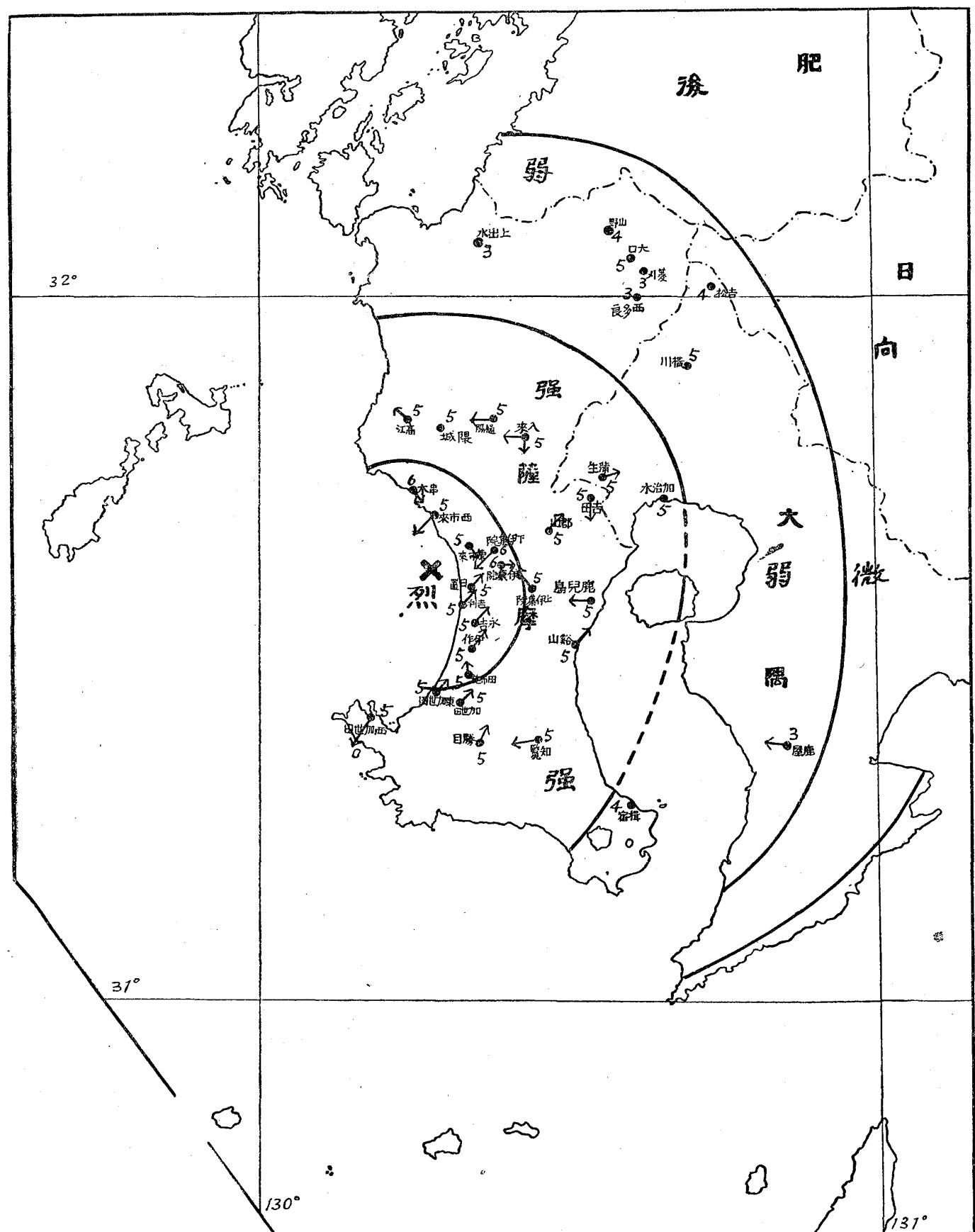
日置郡中伊集院村——震度烈、鳴動ノ方向東或ハ南、崖崩レ數ヶ所、振子時計止マリ硝子障子破損ス

日置郡下伊集院村——震度烈、鳴動ノ方向南西、土地龜裂數ヶ所、崖崩レノ爲メ田地二反步多少ノ被害アリ

日置郡郡山村——震度強、鳴動ノ方向北東、堤防及ビ崖ノ崩レ四ヶ所

日置郡東市來村——震度強、鳴動ノ方向南東、午前四時七分ノ強震ニテ崖崩レ
ナ生ズ、午後四時五十分ノ強震ニテモ崖崩レアリ地面ノ龜裂多ク其幅一分乃至八分深サ一尺ニ及ブ

(原震………×) 域震震地置日 圖八十第



日置郡西市來村——震度強、鳴動ノ方向南西、土砂崩レノ爲メ廄舍一棟壓倒ス
崖崩レ數ヶ所、煙草畑二ヶ所五畝歩餘埋沒ス

些少ノ被害アリ

川邊郡加世田村——震度強、鳴動ノ方向北東、被害ナシ

川邊郡東加世田村

周易系辭上曰：「昔者周文王拘於羑里，作周易。」周易之說，實出於羑里也。

川邊郡西加世田村
震度強、鳴動八方向南西

川邊郡勝目村——震度強、鳴動ノ方向北東、被害ナシ

薩摩郡入來村——震度強、鳴動ノ方向西或八南、被害大

薩摩郡下甑村手打釣掛崎燈臺——震度強

薩摩郡高江村——震度強、鳴動ノ方向北西

薩摩郡樋脇村——震度強、鳴動ノ方向西

薩摩都隈之城村——震度強

鹿兒島市——震度強、鳥居倒

周易歸本圖說卷之二

鹿児島郡谷山村——震度強、喰動ノ方向北東、被害ナシ

鹿兒島郡吉田村——震度強、鳴動ノ方向南、被害大

出水郡上出水村——震度弱

伊佐郡大口村——震度强

伊佐郡山野村十一震度稍強

伊佐郡西太良村
震度四

任佐郡陵州刺史
景度男

侯侯君夢文林一震慶弱

始良郡加治木村 震度強

始良郡蒲生村——震度強

始良郡横川村——震度強

始良郡吉松村——震度稍

指宿郡指宿村——震度稍強

子屬鹿星
震度陽、鶴動」方尚酉

朋屬君賦題

次ニ鹿兒島測候所ニ於ケル地震群ノ觀測表ヲ掲グ但シ震原ニ近キ場所ニ於テ地震發生ノ經過ヲ記録シタル二三ノ場所アルヲ以テ別表ニ於テハ此分ヲモ補足スルコト、セリ

備考 * 印ハ時刻正確ナラズ

以上地震ノ經過ヲ觀ルニ主要地震ハ三十日午後四時五十分ノ烈震ニシテ此以前ノモノヲ其前震トシ又以後ノ分ヲ餘震トシ得ベキガ如シ但シ前ニ述べタルガ如ク前震ハ比較的重大ニシテ主要地震發生凡ソ四十分前ニ起リタル強震ハ彼ニ比較シテ震度僅ニ輕カリシノミ之ニ反シテ其餘震ハ比較的ニ輕少ニシテ通常ノ斷層性大地震ニ於ケルガ如クナラズ是レ寧ロ火山性地震ノ特徵ナルベシ而シテ此特徵ヲ最モ能ク發揮セル他ノ一例トシテハ去ル明治三十八年六月七日ニ起リタル伊豆大島地

前表ニ就イテ見ルニ餘震ハ主要地震若シクハ前震ニ比較シテ震域上多少ノ相違アリ即チ前震若シクハ主要地震ハ串木野、市來、伊集院、永吉ノ地方ニ著シク感ジ南方ナル加世田方面ニハ比較的ニ輕カリシガ餘震ニ至リテハ此關係顛倒シ南方ニ於テ却ツテ著シク感ズルニ至レリ是レ震原ガ少シク南方ニ移動セシニ基ヅクモノナラン

主要地震ノ最强震域部（第十八圖參照）ハ日置郡ノ西部ヲ含ミ其南北ノ境界ハ夫々永吉、串木野附近ヲ通過セリ由來日置郡ノ西海岸ニハ火山灰ノ懸崖アリテ地震ノ爲メニハ崩落シ易キ地形ヲナセリ故ニ今回ノ地震ニ於テモ損害之ニ歸因セルモノ最モ多シ此等ノ關係、震動著シカリシ地方ニ於ケル鳴動ノ

方向竝ニ鹿兒島測候所ニ於ケル初、期微動ノ方向西微北繼續時間四・一秒ナリシコトヨリ震原ノ位置ヲ推測センニ鹿兒島市ヨリ西微北三十ー糠ノ處ニアリシナルベシ即チ東市來村ノ南部海岸ヨリ西方一里ノ海底（東經百三十度十三分、北緯三十一度四十分）ニ在リ此附近ハ屢強震ヲ發生セル所ニシテ去ル明治二十七年一月四日ノ地震ハ今回ノ場合ノ少シク南方ニ起リ同三十一年八月十五日竝ニ同三十三年八月十一日ノ地震ハ北西方ニ、同三十三年六月九日及ビ同三十四年十一月十六日ノ地震ハ少シク西方ニ同四十年十一月四日及ビ同九日ノ地震ハ北々西ニ、翌四十一年七月二十五日ノ地震ハ更ニ前者ノ北方ニ、又大正二年一月六日ノ地震ハ今回ノ地震ニ最モ接近シテ稍北西ノ位置ニ起リタリ而シテ此等ノ地震中最モ著明ナリシヲ二十七年一月四日ノモノトノ二トス

震ハ大正三年一月十二日ノ櫻島地震

櫻島ノ大正噴火ハ其ノ前徵ノ一トシテ噴火開始ノ三十一時間前ヨリ多數ノ地震鳴動ヲ發生シ又噴火開始後八時間即チ十二日午後六時廿九分ニ於テ最大ノ地震ヲ起シ此地震ノ爲ニ鹿兒島市ニ於テハ主トシテ其特有ナル粗造石壠或ハ石造家屋ヲ倒潰セシメ（全潰住家三十九、半潰住家百三十）尙ホ周圍ノ鹿兒島郡（櫻島ヲ含ム）ニ於テモ略ボ同數ノ被害アリ之ニ由ツテ壓死シタルモノ鹿兒島市ニ於テ十三人鹿兒島郡ニ於テ六人ナリ之ニ市外天神ヶ瀬戸ノ崖崩ノ爲メニ埋没死亡セルモノヲ加フルトキハ合計二十九人トナリ噴火ノ直接ノ結果トシテ死

亡セル人員（主トシテ溺死者）ト同數ナリサレバ此地震ハ火山性ノ地震トシテ最大ノ強度ヲ發揮セルモノト云フベシ櫻島噴火ノ現象及ビ之レト地震トノ關係等ニ就イテハ火山トシテノ櫻島ヲ講究スルニ當リテ（本章第三款乙參照）之ヲ詳述スペク今單ニ此烈震ノミヲ摘出シテ其性質ヲ講究セントス先ヅ此地震ノ火山性ナルコトノ特徵トシテ其震度ノ大ナルニ拘ラズ震域ノ狹小ナルコトヲ見ントス次ニ記セルハ各測候所ニ於ケル器械觀測ノ結果竝ニ九州各地ニ於ケル觀測ナリ

第十三表 櫻島地震觀測表

名	福	瀨	岡	長	佐	佐	宮	熊	鹿	兒	島	測候所		震度	摘要	要	
												候	所				
名	福	瀬	岡	長	佐	佐	宮	熊	鹿	兒	島	三〇	○〇	三分	烈	地鳴、潰家、人畜死傷アリ	
福	廣	瀨	岡	佐	世	保	崎	本	宮	崎	二九	二九	二八	五五	弱	家屋動搖ス	性質緩、震動時間長シ
廣	廣	瀬	岡	佐	世	保	崎	本	宮	崎	二九	二九	二八	三七	弱	性質急	性質急
瀬	瀬	瀬	岡	佐	佐	佐	宮	熊	鹿	兒	島	二八	五八	四五	弱（弱キ方）	性質緩	性質緩
瀬	瀬	瀬	岡	佐	佐	佐	宮	熊	鹿	兒	島	二八	五〇	〇五	微	微	性質急
瀬	瀬	瀬	岡	佐	佐	佐	宮	熊	鹿	兒	島	二八	五〇	〇五	微（感ナシ）	微（感ナシ）	性質緩

震度烈

吉野（急） 東加世田（震動ノ方向北東、急） 頼娃

震度強

上出水（急） 隈之城（南東、急） 永吉（東、急） 伊作（北東、急）

西加世田（東、急） 指宿（急） 大口（北東、急） 垂水（南東）

牛根（北東） 百引（南西） 清水（南） 蒲生（東） 築島東南方（稍強シ）

硫黃島、竹島（稍弱シ）（以上鹿兒島縣）

加久藤（南一北、緩） 三ヶ所（南西一北東、急）（以上宮崎縣）

震度弱

北種子 下屋久 口ノ島 志布志（以上鹿兒島縣）

高原（南西、急） 高岡 高鍋（急） 高千穂（稍急）（以上宮崎縣）

震度微

寶島 惡石島（以上鹿兒島縣）

福島（北西、急） 都城（南西） 細島（以上宮崎縣）

直見 久住 白杵 今市 阿蘇野 野上 中津江 西庄内 鐵輪 城井

（以上大分縣）

人吉 松橋 阿蘇 高瀬 隅府 山鹿（以上熊本縣）

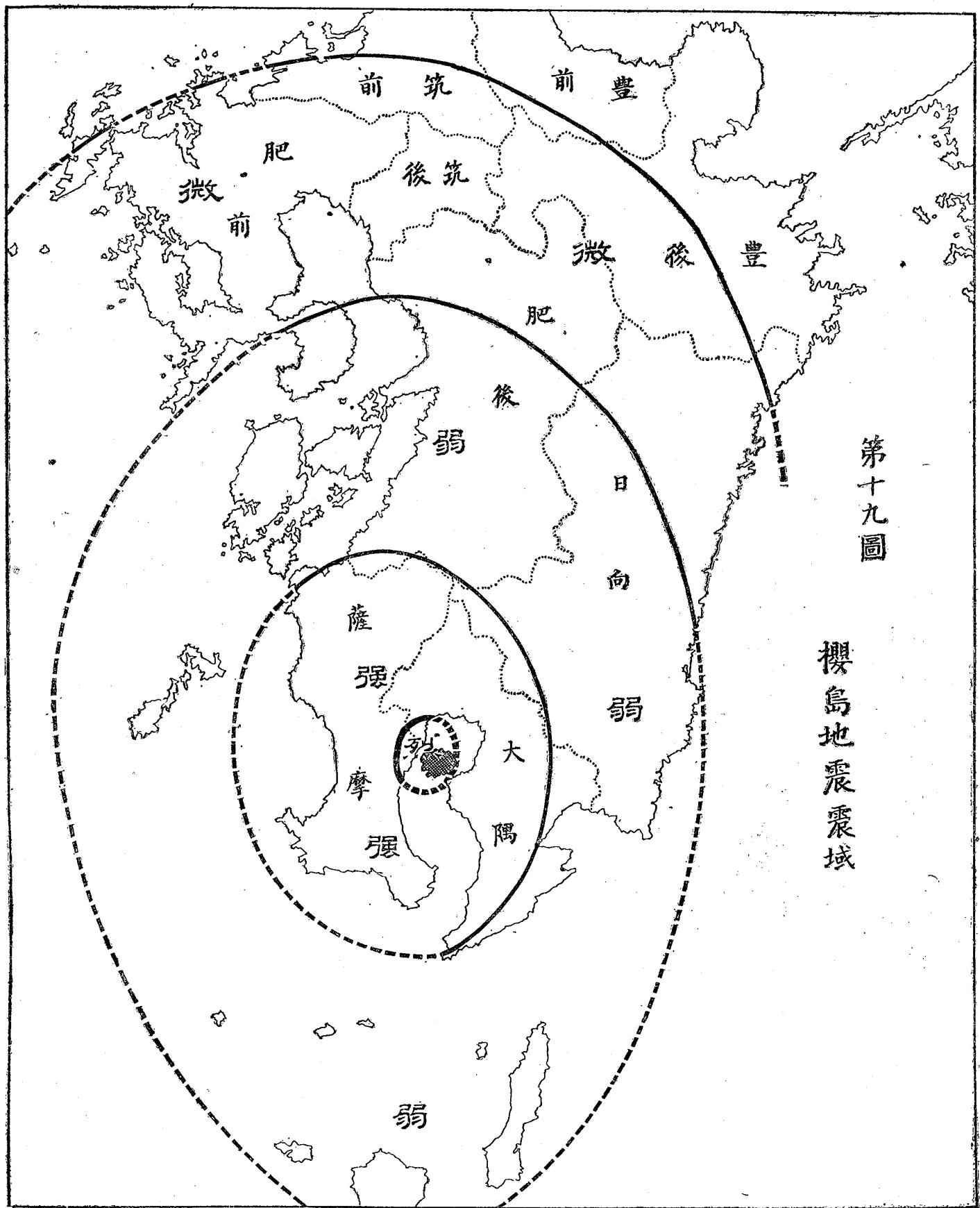
三養基 藤津 神崎 武雄（以上佐賀縣）

北松浦 平戸 富江 南松浦 東彼杵 諫早 溫泉 口加（以上長崎縣）

此地震ハ九州ノ東北部及ビ四國ニ於テハ無感覺ナリキ四國及び中國ニ於テハ之ニ先ダツコト凡ソ十七分即チ午後六時十二分瀬戸内海ノ地震ヲ感ジタルヲ以テ觀測者ハ往々之ヲ櫻島地震トシテ報告シタルモノアリ然ルニ該震動ハ土佐ニ於テハ幡多郡ノ南西方ニ於テ感覺ナク又伊豫ニ於テハ東西及ビ南ノ三宇和島郡ニ於テ感覺ナク却ツテ此等地方ノ北又ハ東ノ方ニ於テ即チ櫻島ヨリ見テ略ボ同方向ニアリテ而モ遠ク隔タレル位罝ニ於テ却ツテ著シキ感覺アリタルヲ以テ此等ノ地方ニ於テ當日午後六時後ニ著シク感ジタル地震ハ櫻島地震ニアラズシテ瀬戸内海地震ナルコトヲ知ル此關係ハ大分縣ノ北部ニ於テモ同様ナリ且ツ同縣ノ南西部ニ於テハ微震ヲ感ジタル地方前記ノ如ク數ヶ所アレドモ感覺ナカリシ地方却ツテ多ク又日向ノ北方延岡ニ於テモ同様ニ無感ナリシヲ以テ見レバ此等ノ地方ハ微震區域ノ北東境ナルベシ而シテ佐賀縣及ビ長崎縣ニ於テモ同様ノ關係ヲ認ムルヲ以テ當地震ノ區域ハ凡ソ第十九圖ニ示スガ如キモノトナルベシ此圖ニ就イテ見ルニ震域ハ略ボ北微西ヨリ南微東ノ方向ニ長軸ヲ有スル橢圓形ヲナシ震度ニ比較シテ面積比較的ニ狹小ニシテ明治二十六年ノ知覽地震、同三十八年伊豆大島地震等ト相伯仲シ正ニ火山性地震ノ特徵ヲ表ハセリ

第十九圖

櫻島地震震域



シ得シナランモ豫備調査後レシガ爲メニ此事ナカリシハ遺憾ニ堪ヘズ但シ震域ノ狹小ナリシコトヨリ通例ノ火山地震ノ如ク其震原モ亦淺カリシナラント思ハル、ナリ

次ニ鹿兒島縣各市郡ニ於ケル噴火地震々災概表ヲ掲グ

第十四表 櫻島噴火地震々災概表

市 村	種 別	死		人		焼失 戸數	倒 家	倒 壊	家	屋
		死	傷	死	傷					
鹿兒島郡 (左記三村ヲ除ク) 各村	鹿兒島市	谷	喜	蒲	國	西	東	西	岩	牛
水	生	櫻	入	分	國	國	國	國	分	松
根	村	島	村	村	村	村	村	村	村	百
川	材	村	村	村	村	村	村	村	村	合
計		五	〇	〇	〇	四	〇	〇	〇	〇
		二	三	三	一	九	〇	〇	〇	〇
		二	三	三	一	〇	〇	〇	〇	〇
		四	六	七	六	七	七	三	〇	〇
		三	〇	一	九	二	六	三	〇	〇
		一	九	二	六	七	〇	〇	〇	〇
		五	〇	〇	〇	六	〇	〇	〇	〇
		五	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇
		四	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇
		三	〇	〇	〇	一	〇	〇	〇	〇
		二	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇

前表ニ於テハ單ニ地震ノ影響ノミナラズ噴火ニ起因セルモノヲモ含メリ後者ノ關係中其最モ著シキモノヲ二トス一ハ櫻島及ビ牛根ニ於ケル二十九名ノ溺死者ニシテ他ハ櫻島ニ於ケル焼失家屋是レナリ蓋シ後者ハ十三日夜ノ鎔岩噴出ニヨリテ生ジタル結果ナリトス

右ノ災害ノ外鹿兒島櫻島間ニ沈置セラレタル海底電線ノ切斷ハ之ヲ記錄ヨリ除クベカラザルモノト思惟ス此損害ハ地震ノ直接ノ影響トシテ生ジタルモノナルカ又ハ之ニ伴ヒテ起リタル極メテ小規模ノ津浪ノ爲メニ生ジタルモノナルカ不明ナレドモ恐ラクハ前影響ニ由レルモノナランカ

次ニ鹿兒島市街地ニ於ケル震度分布ヲ稍詳細ニ講究セントス是レ同市街地ニ於ケル今後ノ土木工事或ハ家屋建築上参考トナルベケレバナリ今市街地ニ於ケル震度ヲ家屋及ビ石塀ノ倒壊ニヨリテ比較シ其分布ヲ土地發達ノ沿革ニ徵シテ明ニセントス

家屋、石塀等ノ倒潰ニツキテハ内田工學士ノ詳細ナル報告(本報告八十號)アレバ余ハ單ニ此等ノ被害ノ土地ニ關スル分布ヲ見ルニ過ギズ但シ被害表ノ説明トシテ多少附加フル所ナキ能ハズ(別表竝ニ説明ハ鹿兒島市役所取調ニ基ヅキテ作成ス)

家屋ノ被害
一、住家全倒シタルモノハ柱ヲ上下二通ノ貫ヲ以テ東ネタルノミナル簡單ナル構造ノモノ、ミニシテ相當ナル構造ヲ有スルモノニハ全倒ナシ

一、堅固ナル構造ノ家屋ニシテ破損甚シカリシハ廣キ土間ヲ有シタルモノニシテ其土間ノ部分ノ柱ニハ結束ナク隨ツテ動搖廓大シ延イテ他ノ堅牢ナル部分ニマデ影響セリ

一、防火壁ノ崩壊ニ由リテ全潰或ハ半潰トナリタル家屋多シ
一、木造家屋ニシテ壁間ニ筋違ヲ有スルモノハ何等ノ損害ナ

シ

一、屋根瓦ハ土居葺又ハ敷漆喰ナキ爲ニ錯亂シタル家屋多シ
一、石造倉庫ニ就イテハ地盤ヨリ軒迄高サ十五尺乃至二十尺
ヲ通例トシ地形ハ深幅共ニ四尺位ニ掘リ下ゲ栗石ヲ二尺位
突込ミ上ニ「コンクリート」ヲ七八寸ノ厚サニ固メタルナ
リ又軸部ハ木材ヲ用ヒ柱ヲ六尺間ニ配置シ之ニ通シ貫ヲ三
四通リ貫キ桁及ビ梁等ヲ渡シ二階柱ヲ各柱ヘ指シ合セタル
モノニシテ周圍ノ壁石ハ下層四五層ニ一尺二寸角ノ延石ヲ
用ヒ其上ニ九寸角ノ延石ヲ積ミ三四層位ニ錦又ハ「ボール
ト」ヲ以テ柱ニ結束ス此ノ如キ構造ニテハ軸部ニ對シテ屋
根ノ重量過大トナリ動搖甚シク左ナキダニ水平抗力小ナル
周壁ヲシテ一層甚シキ動搖ヲ受ケシメタリ

一、堅固ナル石造倉庫ニシテ壁石ノ厚サヲ高サノ十分ノ七乃至十分ノ八トシ「フーチン」ヲ六尺間乃至九尺間ニ設ケ二階梁或ハ屋根桁梁等ヲ壁石ニ持タセタル構造ハ毫モ破損ヲ

一、屋根及ビ壁ノ破損、煉瓦ノ墜落、平中瓦ノ錯亂ハ南北ニ長キ家屋ニ多ク又壁ノ損害ハ南北ニ面シタルモノニ多ク東

西ニ面シタルモノニ少シ
一、表中百分率トアルハ家屋ノ全潰數ト半潰數ノ半トノ和ノ
總戸數百ニ對スル割合ナリ

町名種別											
全 濟											
住家 其他 計											
鼓	稻	清	春	鷹	藥	西	新	常	武	高	下
上	下	上	上	ノ	屋	ノ	ノ	ノ	ノ	ノ	龍
龍	荒	田	園	麗	盤	數	田	師	師	日	尾
尾	田	園	麗	盤	數	田	師	師	日	水	川
二〇	一〇	〇〇	〇〇	一〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	〇〇	二〇
四四	一一	〇〇	一〇	三五〇	三三二	三三	二三	二三	二三	二三	四四
六四	五一	一一〇〇	二〇	三五〇	三三二	三三	二三	二三	二三	二三	六四
四六	四〇	四〇	〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇	一	一	一	一	四六
四三	〇五	二一七一〇	三一〇	二二〇	二二〇	二二	一〇	八五	八五	八五	四三
八八	四五	五六	一七	一〇	五一	一〇	四四	一〇	九六	九六	八八
二二	七	三	三	三	三	三	三	三	三	三	二二
一〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	一〇
四六	四四	四四	四四	七〇	三五	三三	二九	三〇	七八	七八	四六
二五	二五	七六	三六	三六	一七三	一〇五	一七三	二〇三	一七三	一七三	二五
一六	一六	三九	六六	三三	一六七	三七七	一七一	一七一	一七九	一四七	一六
八〇	二五	六四	六六	三三	三〇三	三三	三三	三三	九六	一七九	八〇
五四	七六	二一	一三	一七	〇二	一二	一〇	三二	二三	二三	五四
五四	七六	二一	一三	一七	〇二	一二	一〇	三二	二三	二三	五四

池ノ上	居下	産日	江原	吉崎	石生	中金	船大	吳山	之口	屋服	津黑	生石	見崎	住沙	洲泉	松堀	新築	生易	池山
○ ○ ○ 一二〇二一〇三一〇一〇〇〇一三一二三〇																			
○ ○ ○ 四〇一五一一七一二一〇〇〇〇三〇三七〇一																			
○ ○ ○ 四一三五三二七四三一一〇〇〇四三四九三一																			
○ ○ ○ 六八五〇三三六〇五〇〇五一三〇二〇一二六																			
○ ○ ○ 七五五三一五三二三一一〇〇六〇〇二五																			
○ ○ ○ 三三〇三八二八九二八一一五一三六二〇三七																			
一九二六三七二七一六三六一三六一八二一三六一	四〇八	三七	三五	三四	三五	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	
二二四五四四三三一五二七一七一五一五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
二二二五三五三九三一九一九一九一九一九一九	四五九	三七	三五	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八
三〇七四五六五五四六五五四六五五四六五五四六	二四一	三九	三八	三七	三六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二
○ ○ ○ 一九一〇五七三一〇七一〇七一〇七一〇七	四六	一〇																	

石壠ノ被害

一、石壠ニ就キ高サ六尺位ノモノハ土地ヲ深幅一尺七八寸掘リ取り栗石ヲ突固メテ地形トナシ下ヨリ三四層ハ九寸五分角石ヲ積ミ此上ニ高九寸五分厚六寸五分石ヲ積ムモ間々九寸五分角ノミニテ全部ヲ積ミタルモアリ控石ハ二間乃至三間位ニ設ク斯ノ如キ石壠ハ全部倒潰シタルアリ或ハ上ノ二三層墜落シタルアリ

一、高サ九尺以上ノモノニ於テハ地形上ニ「コンクリート」ヲ打込ミタルアリ下ヨリ四五層ハ一尺二寸角石ヲ積ミ、次ニ

新照院	西千石	小屋	川屋	之水	和泉屋	柳車	向榮	長冷	江田水
○○○○○○○○二二〇〇〇									
○○一〇○一〇○二一〇〇〇									
○○一〇○一〇○四三〇〇〇									
○○○二二〇○○三一〇〇〇									
○二〇〇四〇〇一五一〇〇〇									
○二〇〇二六〇〇一八一〇〇〇									
二〇呂三〇一六一四五五八五	三九	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
○一〇〇五三一三一四一七	二七	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五	二五
二〇呂三〇一六一四五五八五	二四	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三	二三
一七三三〇一六一四五五八五	四七	六三	六三	六三	六三	六三	六三	六三	六三
三〇一六一五六七〇三〇一六	二七三	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六	一六

九寸五分角石、又其上ニ高九寸五分厚六寸五分石ヲ積ム控
ハ一間半乃至二間位ニ設クルヲ通例トスノ如キ石塀ハ根
石ヨリ上方二三層ヲ殘シテ倒潰シタルアリ或ハ頂部三四層
倒潰シタルモアリ

第十六表 櫻島地震石塀被害表

○○耗内外ノ水平加速度ニテ顛倒スベシ
一、石塀ノ倒潰ハ其東西ニ面シタルモノニ多ク南北ニ面シタルモノニ少シ畢竟地震ノ主ナル方向ハ東西ニ偏シタルナリ
一、表中各町欄ニ於ケル右縦行ハ石塀ノ總間數ヲ示シ左縦行ハ其倒潰シタル間數ヲ示ス百分率ハ石塀百間ニ對シテ倒潰シタル間數ノ割合ナリ

○○耗内外ノ水平加速度ニテ顛倒スベシ

金 船 大 吳 山 橋 新 草 加 楊 和 惠 小 鹽 平 西 新 草 加 楊 和 惠 小 鹽 平 西

泉 美 千 照 牟 治 之 之

水 田 江 屋 須 川 屋 - 之 石 院 田 屋 口 口 服 黑 津 生

五五

六六

二二 三三 八八

五五

三三 六六

八八 四四 五五 二二

九九

五五五五

七七五五

一〇〇二二

八八四五

五五三三

三三五五

四五四

五五三三

五五

三三四三

五五

三三五五

三三五五

五五三三

五五三三

七六五三六

三八四九二七八〇

四七九三九一〇

一二三五

一二三五

一二三五

一二三五

六〇一五二〇

四四

五〇三七

一二三七

一二三七

一二三七

一二三七

五五五

五五三六

四五九四六

一四一三

三八三五

一二二八

一二二八

一六〇五

八五五六

一四五七

一二二二

一二二二

一二二二

一二二二

吾六〇

七〇六

五五三六八三五四

五五

三六八〇

三五四四

三三

五五六〇

六六

三三

三三

三三

一〇五

七七

一二六

一二六

七〇〇

一一〇

一〇一六

一〇一六

一〇一六

一〇一六

一〇一六

一〇一六

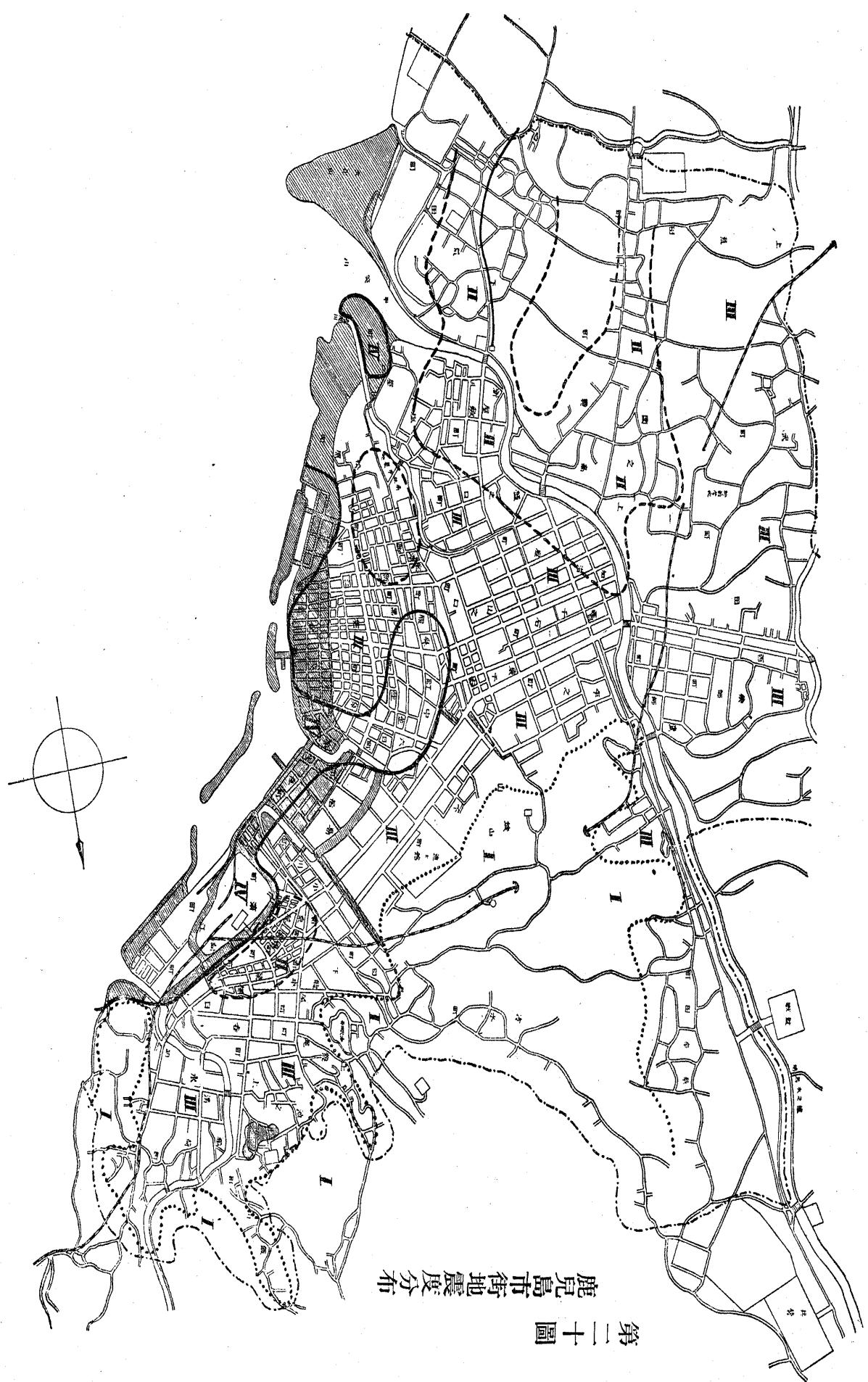
一〇一六

七〇〇

一一〇

一一〇

一〇一六



前記石壙ノ表ニ於テ被害間數ノ調査ハ震災ニ引繼キテ時日餘リ經過セザル時期ニ行ハレタルモノナレドモ總間數ノ調査ハ災後二ヶ月ノ後ニ於テ無難ナリシ石壙ノ間數ヲ實測スルコトニヨリテ行ハレタルモノナレバ震災當時トハ多少ノ相達ハ免レ難キ所ナリトス然レドモ之ヲ以テ作リタル被害百分率ハ震度分布ヲ見ルニ付無用ノモノニハアラザルベシ家屋竝ニ石壙ノ被害百分率兩ツナガラ大ナルモノハ震度最强ノ部ニ屬セシメ之ニ反シテ兩者微少ナルモノハ震度最輕ナリシモノトシハ大ニシテ他ハ小ナルカ或ハ兩者共ニ中等ノ值ヲ取ルモノハ其値ノ比較的ニ大ナルカ小ナルカニ因ツテ震度ヲ夫々強若シクハ輕トセリ但シ土地ノ構造竝ニ沿革明カルモノニ就イテハ之ヲモ参考シテ震度ヲ定ムルコト、セリ

土地ノ構造上最モ著シキヲ丘陵地ト平地トノ區別ナリトス丘陵地ノ震度ノ最モ輕キハ自ラ其所ナリ平地ハ天然ニ成レル地盤アリ又人工ヲ以テ築造セルアリ而シテ兩者各新舊ノ區別アリ之ニ由ツテ土地硬軟ノ差別ヲ生ズ今此差別ヲ明カニスルニハ一ハ沿革ヲ知ルニ足ルベキ古圖ニ據ルベク一ハ掘鑿ニヨリテ土質ヲ吟味スベシ又口碑ノ偶以テ沿革ヲ徵スルニ足ルベキモノアリ

右ノ外同誌所載各局部ノ埋立概要ヲ摘錄スレバ左ノ如シ

先づ鹿兒島市街沿革ヲ講究センニ城池ノ新築ハ慶長七年（西暦紀元千六百二年）ノコトニ屬ス然ルニ今日古圖ノ存在スルモノ正徳三年（西暦紀元千七百十三年）ノモノヲ以テ最モ古シトナス之ニ據ルトキハ舊練兵場（當今ノ市男女子高等小學

校所在一廓）マデハ陸地ナリト雖モ其レ以東ハ一面ノ海ナリ築城以前ニ於テハ甲突川ハ新上橋邊ヨリ東ニ折レ平、千石馬場ヲ過ギテ若宮八幡祠前ニ於テ海ニ注グリト云フ即チ築城以來正徳年間迄ニ於テ最早多少ノ埋立アリタルヲ證スベシ今鹿兒島築港誌所說ヲ見ルニ左ノ如シ

上山城以前ニ在ツテハ現今ノ甲突川ハ新上橋ヨリ東方平ノ町方面、千石馬場、加治屋町界隈ニ屈曲自在ニ流下シ俟寛堀（舊御著屋跡現今埋立タリ）邊ヨリ海ニ入りタル由ニテ萩原又ハ窪田瀬（誠訪小路元誠訪神社址ニ窪田ノ池アリ此界隈ナランカ）ト稱スル所アルハ清瀧川ト云ヒ一面ノ白砂ニ青松繁茂シ往古ハ奥ノ松原トカ稱スル名所ナリシト云フ又麿藩名勝考ノ記スル所ニヨレバ甲突川ノ原流ハ泉崎（府城ノ西隅）ノ匯潭ナ經テ大野ノ港ニ出テ海ニ入レリトアリ大野港ハ若宮八幡祠前ノ池塘其址ニシテ俟寛僧都流竄セラレシトキ此邊ヨリ船ニ乗レリト傳フルヲ以テ見レバ此界隈ノ海面ナリシコトハ信ズルニ足ルノミナラズ山之口地蔵角邊ハ地勢高ク松原町南林寺附近ハ海潮ノ中ナリシが島津家ノ居城ヲ移セシ以來士民諸所ヨリ移轉集合シ邸宅ヲ廣漠タル地ニ選ビ住居ヲ構ヘタルモノニシテ西千石町舊伊勢屋敷ハ葭草繁茂シタル渚洲ナリシトアルヲ以テ推究スレバ現今ニ於ケル鹿兒島ノ過半ハ海面タリシコトヲ確ムルヲ得ベシ爾來數百年間ノ遷變ニ付テハ確ムベキ記録ナシト雖モ文政年間（一説ニ安永年間）現今住吉町ヨリ築町ニ至ル一帶ノ海邊ヲ埋立て市區ヲ擴張シタル事蹟ヨリ考フルトキハ漸次海面ニ向テ寄洲ヲ生ジ從テ埋立ヲナシ今日ノ狀況ニ至リタルハ蔽フベカラザル事實ナリトス

生産町ノ海岸——明治五年ヨリ明治六年ニ至リ埋立ツ
小川町海岸——舊行屋堀東南ハ嘉永年後ニ埋立ツ

屋久島岸岐——文政年間築造
辨天波止——同前

一丁臺場——明治五年築造

新波止——弘化嘉永頃ノ築造ナラン

三五郎波止——天保十年頃ノ築造ナラン

甲突川——天保年前三河身定マラズ兩岸ハ洪水ノ氾濫ニ任セタリシガ是ニ至ツ
テ浚渫ナ行ヒ其土砂ヲ以テ天保山ヲ築ク

以上ノ記事ト天保地圖並ニ嘉永地圖（弘化後安政前ノ詳圖ニシテ假リニ嘉永地圖ニ據ルニ清瀧川下流ハ其幅甲突コトヲ發見スベシ又嘉永地圖ニ據ルニ清瀧川下流ハ其幅甲突川ノモノト略ボ相等シク現今ノ沖村遊廓地之ニ相當セリ而シ

テ稻荷川ノ往時ノ河身ハ行屋堀ニシテ上ノ濱ニテ海ニ入リタルモノ、又祇園洲臺場地ハ嘉永ノ頃稻荷川浚渫ノ土砂ヲ以テ築造セルモノナリ以上ノ工事ニ加フルニ明治三十四年ヨリ同三十八年ニ至リ鹿兒島築港ノ事行ハレ屋久島岸岐ノ南方ニ大門口埋築地ノ大區域ト住吉町、沙見町東面ニ小區域トヲ加ヘ之ニ反シヲ生産町、小川町ノ海岸埋立地ヲ切ツテ内港ヲ擴ゲ更ニ防波堤ヲ改修シテ現狀ヲ呈スルニ至レリ

今最近百年間ニ於テ埋立テラレタル土地ヲ考フルニ（第二十圖參照）其震度ノ最モ強カルベキハ想像スルニ難カズ今回ノ地震ニ於テ水平ノ加速度每秒く二千粍ニ達シタルナルベシ尙ホ此區域内ニハ山下町舊加治木屋敷跡即チ二百餘年前ニ

海底ナリシ土地ヲ含ムコトヲ注意スベシ之ニ反シテ震度最モ輕カリシハ丘陵地方ナルコト前述セル所ナルガ次ニ輕カリシ地方ハ地藏角ヨリ松原町、新町ニ至ル一廓、柳町、車町、恵美須町、和泉屋町ヲ含ム前者ハ土地稍高キヲ以テ見レバ天然ノ地盤ナルベク後者ハ稻荷川ニヨリテ自然ニ埋立テラレタル古キ土地ナルベシ尙ホ高麗橋以下ニ於ケル甲突川ノ兩岸モ同様ナリトス

土地ハ掘鑿ニヨリテ其ノ沿革ヲ確メ得ルコトアリ今掘抜井戸工事ニ多年從事セル小田暢氏ガ市ノ内外各所ニ於テ經驗シタル所概要左ノ如シ

山下町——加治木屋敷跡鹿兒島新聞社内、五六尺位ニテ濱砂出ヅ、其北方ニ於テハ一間位ニテ葱畠ヲシカリシ面ニ達シ葱ノ如キモノ青キ儘ニテ出ヅ、二間位ニテ水面ニ達シ素燒ノ土管出ヅ、此邊表面ハ黒土ナリ——練兵場跡、十二尺ニテ沙地ニ達シ良水出ヅ——二ノ丸（谷村氏）、沙地ナリ、十七八尺ニテ良水出ヅ——南泉院馬場、水不良——郵便局裏、細沙出ヅ、十五尺ニテ鐵臭ノ水出ヅ、築町——警察署前、初ヨリ泥土ノミ出ヅ

易居町——表面ヨリ十五六尺マテハ泥土ノ下沙

生產町——港務所前、表面ヨリ泥土、十七八尺又ハ二十三尺ニテ沙出ヅ

小川町——泥層ノミ

長田町——興正寺境内、十八尺位ニテ臭氣アル沙泥層トナリ良水出デズ

柳町——興正寺境内、同前

清水町——沙ノミ出ヅ

春日町——二十尺ニテ岩石層トナル——上ノ馬場通り五六十戸ノ井戸皆良水出

汐見町——十尺位ノ處沙ニシテ其以上ハ泥土ナリ

新町——本願寺前、沙地

吳服町——十七八尺ニテ良水出ヅ——初ヨリ沙、十三尺ニテ良水出ヅ

千石馬場——砂層、十五六尺ニテ良水出ヅ——西千石町、初ヨリ沙層

山之口馬場——沙層、十五尺位ニテ良水出ヅ——萩原小路、良水出ヅ

新屋敷町——本通リ（山口氏宅地）沙層、十五尺位ニテ良水出ヅ——同所電車

線路ニ接スル地所モ上ニ同ヅ

平之町——中之平（永山氏宅地）粘土質（火山灰ナラン）、二十尺ニテ岩石層ニ

達ス、水不良

薬師町——久木田氏宅地ニテ三回掘ル、二十尺位ニテ水出ヅ、二十尺以上黒土

ニシテ泥水出ヅ、三十尺以上ニテ良水出ヅ

西田町——水不良——黒田氏宅地、水不良、濱沙出ヅ

武町——停車場二ヶ所、沙ナレドモ水不良、鐵臭アリ

土之園町——沙地、良水出ヅ——第二中學校附近、五尺ニテ沙層トナリ良水出

ヅ——女子興業學校内、良水出ヅ

荒田町——沙層ナレドモ水不良——天保山、二十六尺ニテ良水出ヅ、然レドモ

泥臭シ

草牟田——粘土質（火山灰ナラン）ニシテ水不良

伊敷——兵營前、初ヨリ川沙ニシテ二十尺位ニテ良水出ヅ

此結果ニヨリテ見ルニ縣廳下朝日通筋ノ人工埋立地ナルコト
モ略ボ想像セラルベク其他ニツイテモ大抵前陳ノ沿革ニ能ク
調和スルコトヲ注意スベシ

被害分布ヨリシテ甲突川左右岸ノ中藥師町西田町方面ガ特ニ
地盤ノ堅牢ナラザルヲ思ハシメ其ノ基因ニツキ疑フ夾ミ居リ
シガ地下ニ泥層ノ存在スルハ地盤ノ多少不安定ナルヲ語ルモノ
ナルベシ

己 大正五年十二月二十九日肥薩國境ノ地震

肥後ノ南部水俣佐敷地方ニ於テハ午前六時四十一分ノ強震ヲ
初發トシテ引續キ多數ノ地震ヲ起シ同日以來數日ノ間ニ數十
回ノ地震ヲ算セリ最初ノ強震ニヨリテ壁龜裂シ石垣崩壊シタ
ル所アリ又佐敷ニ於テハ田地ノ龜裂ヨリ泥水ヲ噴出シタル所
アリ各測候所ニ於ケル初期微動ノ繼續時間鹿兒島八秒、長崎
九秒、宮崎十二秒、福岡十九秒ヨリ震源ヲ推定スルトキハ葦
北郡ノ南部ニ當リ地震ノ起リタル地方ニ略ボ一致スルコト、
ナル

第二款 火 山

甲 霧島山

霧島山ハ霧島火山系ノ北部ヲ占ムル偉大ナル火山彙ニシテ韓
國岳、大浪池岳、白鳥池岳、甑岳等ハ略ボ南北一二里ノ間ニ竝
列シ高千穗峰、御鉢、中岳、新燃鉢、獅子戸岳、栗野岳等ハ
中間ニ韓國岳ヲ挿ミテ南東ヨリ北西ニ向ヒ凡ソ五里ノ間ニ蟠
踞セリ此中噴火ノ記録ヲ有スルハ御鉢及ビ新燃鉢ノ二峰ニシ
テ其他ハ恐ラクハ皆有史以前ニノミ活動シタルモノナルベシ
霧島火山系ハ南方薩南諸島ヨリ開聞、櫻島ノ諸岳ヲ縱斷シテ
略ボ南北ノ方向ヲ取レドモ霧島ニ至リテ一轉シ其レヨリ北西
ノ方向ヲ取リテ肥後ノ南西海岸ニ走ラントスル趨勢ヲ示セリ
此趨勢ハ地質構造竝ニ温泉ノ分布ニヨリテモ明カナリ

御鉢及ビ新燃鉢（略シテ新燃下呼ブ）ノ二座ナルガ兩者共ニ

山彙ノ中央以東ニアリ特ニ御鉢ハ東端高千穂峯即チ矛ノ峯ノ

西腹ニアル活火口ニシテ今日盛ニ蒸氣ヲ噴出セリ噴火口ハ其

直徑約四百五十米アリテ口壁北西隅ニ最モ低ク周邊ノ北部ハ

矛ノ峯ノ登山口ニシテ所謂馬背越是レナリ噴火口内ニハ更ニ

中央ニ壺形ノ噴孔アリテ其西部ヨリ盛ニ蒸氣ヲ噴出シ噴氣ハ

時々火口壁ヨリモ高ク騰レリ（大正五年八月觀察）噴口ニ於

テ注意スベキハ孔底ニ硫黃ヲ含メル黃色ノ湯ヲ湛ヘタルコト

ニシテ火口活動力ノ稍衰微セルヲ示スモノ、如シ又新燃ハ

近年餘リ注意セラレザリシ活火口ニシテ御鉢ノ西北一里ノ處

ニアリ霧島ノ東西盟主タル高千穂峯ト韓國岳トノ中央ヲ占ム

其規模御鉢ヨリモ稍大ニシテ噴火口直徑六百五十米アリ火

口内ハ樹木密生シ中央ニ冷水ヲ湛ヘ全ク休眠ノ状態ニ在リ但

シ明治二十四五年ノ頃マデハ微弱ナル硫煙アリキト云フ（第

二十一圖乃至第二十六圖參照）

歴史ノ傳フル所ニ據レバ霧島山ハ桓武天皇延暦七年三月四日

以來大小凡三十回ノ噴火ヲナセリ噴火口ノ位置ハ一々之ヲ明

記セザレドモ前記ノ二座ニ外ナラザルベシ霧島神宮ハ其初山

上ニアリシモ噴火ノ際火災ノ厄ニ遭ヒ爾後次第ニ噴火口ヲ離

レテ安全ナル位置ニ退キ終ニ瀬戸尾（脊門丘）ノ地ヨリ現今ノ

場所ニ遷座アリキト云フサレバ神宮ノ現位置ハ噴火口ニ最モ

近クシテ且ツ安全ナル場所トシテ選定セラレシナルベクスクリ
想像スルトキハ御鉢ト新燃トハ舊來ノ活火口タリシヤ疑ナカ

ルベシ

霧島噴火地震ノ沿革概ニ左ノ如シ

天平十四年十一月二十三日（西紀七四二年）

十一月壬子大隅國司言、從本月二十三日未時、至二十八日

空中有聲如太鼓、野雉相驚地大震動、丙寅遣使於大隅國檢

問並請聞神命（本紀）。大森博士著日本噴火志ハ此現象ヲ以

テ霧島山噴火ノ部ニ加フ、其レ或ハ然ラン、然レドモ猶ホ

多少ノ疑ナキコト能ハズ當時國司ノ所在地ハ今ノ國分ノ地

ナルベク霧島山ヲ距ルコト約五里、而モ同山ヲ能ク展望シ

得ル位置ニ在リ若シ前記ノ現象ガ霧島噴火ナリシナランニ

ハ國司之ヲ認ムルハ容易ナリシナラン翻ツテ考フルニ去ル

明治十七年諫訪ノ瀬島ノ爆發ニ際シ鹿兒島縣内ニ於テハ數

日間時々空中聲ヲ聞キ其音遠方ノ砲聲ノ如キモノアリ當時

其原因ヲ知ルモノナク其真因ノ判明セシハ餘程後ノコトナ

リキサレバ天平年度ノ現象モ寧ロ此部類ニ屬スベキモノニ

アラザルナキカ

一、延暦七年三月四日（七八八年）大噴火

七月己酉太宰府言、去三月四日戌時、當大隅國贈嘸郡曾乃

峯上火炎大熾、響如雷動、及亥時火光稍止、唯見黑煙、然

後雨沙、峯下五六里沙石委積可二尺其色黑焉（續日本紀）

承知四年（八三）八月壬子日向諸縣郡霧島嶺神預官社（續日本紀）

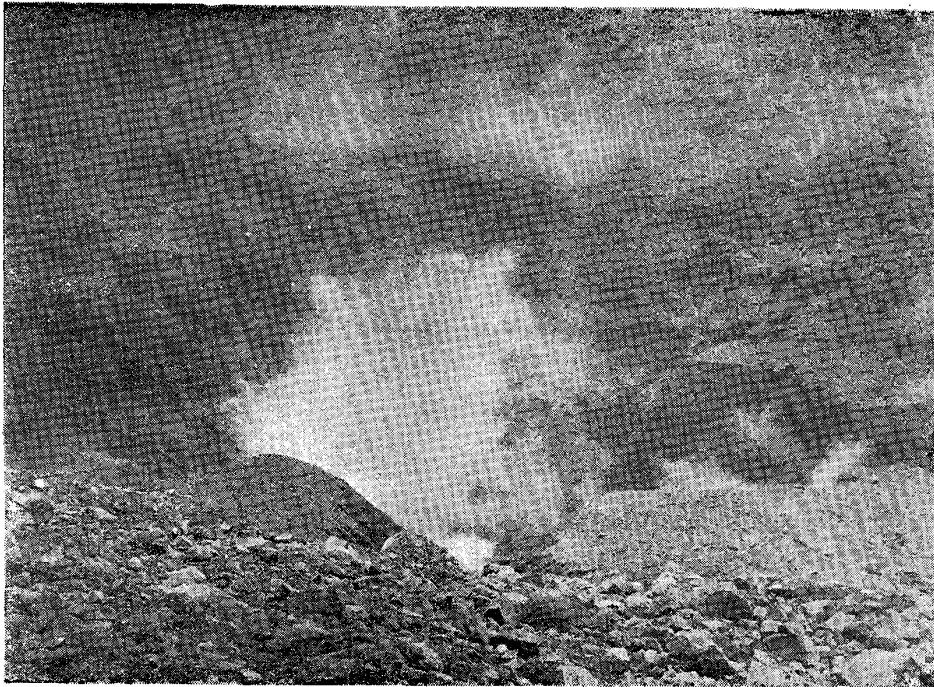
承和十年（八四）九月甲辰、日向國無位高智保皇神、奉授從

五位下（續日本紀）

第二十一圖 霧島噴火口御鉢ヲ西方ヨリ

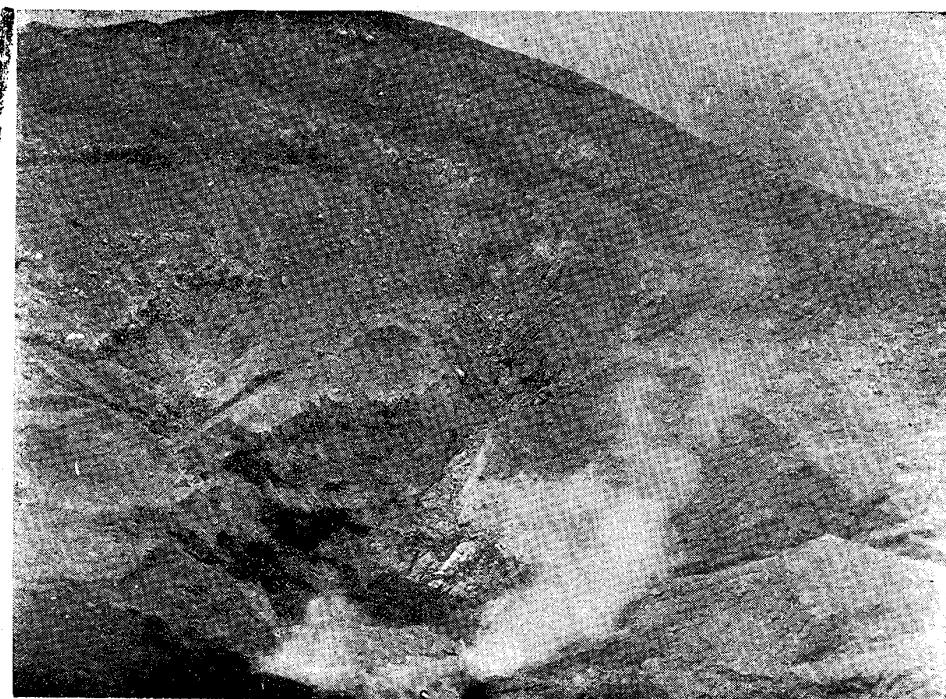
望ム

(大正四年八月十日撮影)



第二十二圖 同前ヲ馬背越北東壁上ヨリ

瞰下ス孔底ニ黃色ノ湯ヲ湛
フ (同日)

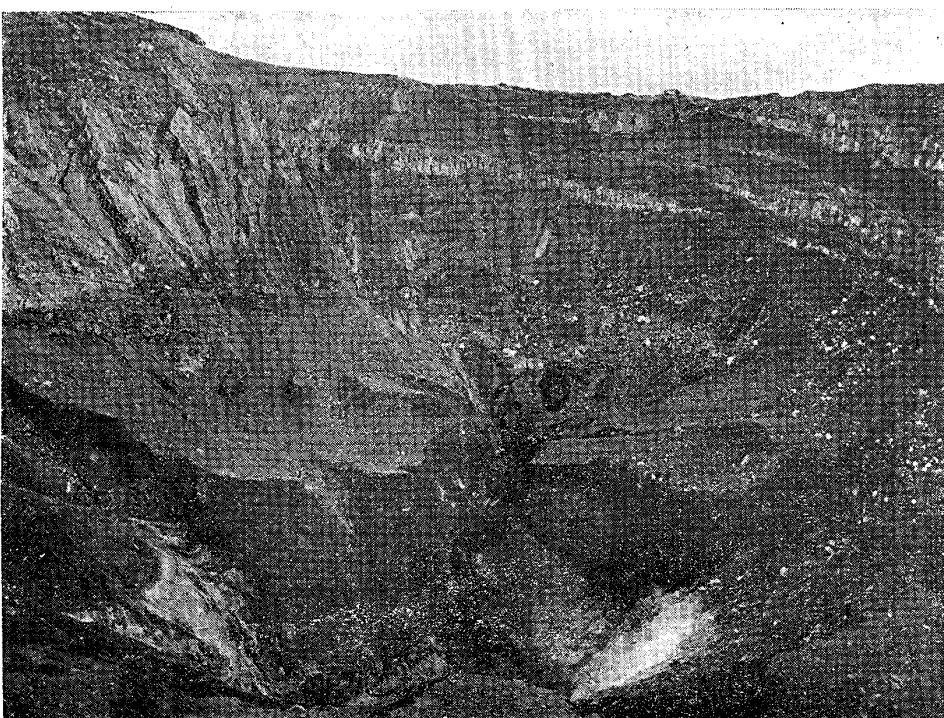


第二十三圖 第二十一圖ニ略ボ同ジ
但シ一年後ノ状況

(大正五年八月二十一日撮影)



第二十四圖 霧島噴火口御鉢ヲ北壁ヨリ
望ム (同日)

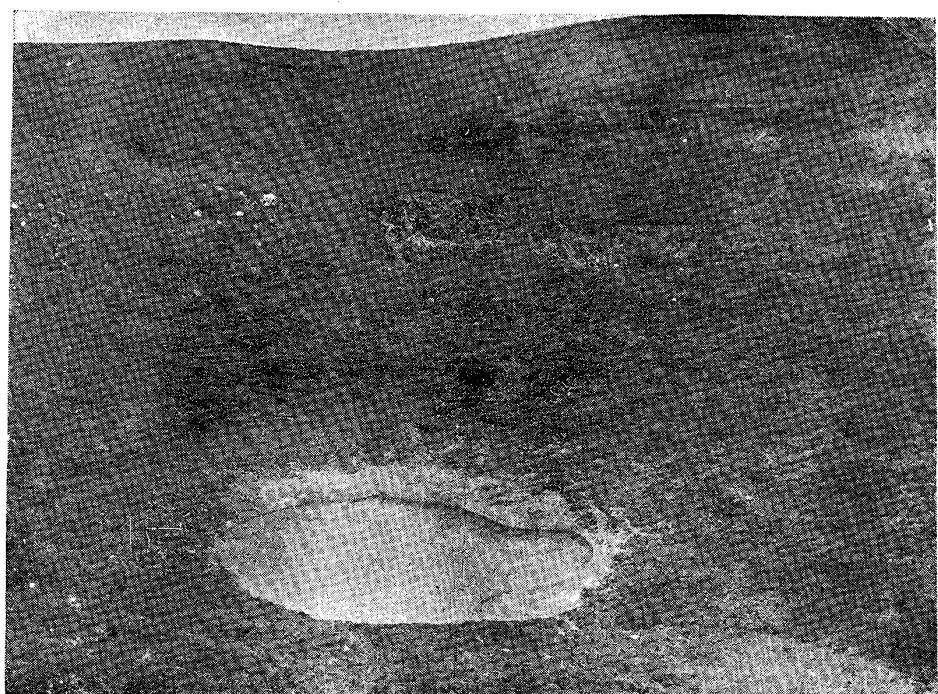


第一十五圖 第二十二圖ニ略ボ同ジ
但シ一年後ノ状況（同日）



第一十六圖 霧島ノ休眠火口新燃鉢ヲ
南西壁上ヨリ望ム

（大正四年八月十一日撮影）



天安二年（八五）十月二十二日授日向國從五位下霧島神從四

位上

（三代實祿）

二、天慶八年（九四）噴火

此年性空上人登山シ、我レ此神ノ本地ヲ拜ミ奉ラント誓ヒ
テ、七日參籠シテ法華經ヲ讀誦シケルニ、五日ノ子ノ刻ノ
頃、大地振動シテ岩崩レ猛火燃エテ殊ニ煙渦キ、暫クシテ
周圍三丈、其長十餘丈許ナル大蛇、角ハ枯木ノ如ク生ヒ、
眼ハ日月ノ如ク輝キ、大ニ怒レル様ニテ出來リ給フ、性空
山ヲ下リ庵ヲ嶽ノ西麓ニ結ビテ禪居ス

（平家物語）

三、天永三年二月三日（一一二二）震火甚シ

（華林寺縁記）

四、仁安二年（六七）噴火

霧島山大曼陀羅院西生寺由來記ニ此事見ユ同寺ハ小松内府

重盛病氣平癒ノ奉賽トシテ霧島山ノ東麓狹野ノ地ニ建立シ
タルモノナリシガ其後住持尋譽上人ノ時一夜神童來リ告ゲ
テ曰ク三日ヲ經テ霧島山ニ火起リ寺院回祿ニ罹ルベシ速ニ
三里ノ外ニ退ケト、於是僧侶當寺ノ本尊及ビ鎮守山王等ヲ
奉ジテ、南方今ノ地梅北ニ移ル、果シテ霧島山ニ火起リ、
殿堂燒崩ス、實ニ仁安二年ナリ

（勝國名勝圖會）

壽永二年十二月十七日（一一八三）噴火

本災異志及ビ大森博士著日本噴火志ノミニ「ミルン」氏調
査トシテ載スル所ナリ然ルニ「ミルン」氏著日本火山志ニ
ハ此記事ナシ左レバ小鹿島工學士ガ「ミルン」氏ノ何篇ヨ

リ之ヲ引用セルカ又「ミルン」氏ハ更ニ如何ナル舊記ヨリ
之ヲ引用セルカ共ニ疑問ナリトス按ズルニ「ミルン」氏ノ

日本火山志ニハ次ノ文暦元年十二月二十八日（一二三五）ノ
噴火ヲ誤リテ西暦紀元千百七十四年ト記セリ之ヲ更ニ本

邦紀元千八百四十四年ニ誤リ其前年ノ十二月二十八日ヲ
西洋暦ニ改算シテ本年二月七日トシ更ニ西暦紀元千百七
十四年二月七日ヲ邦暦前年十二月十七日ニ改算シタル結果
果ニハアラザルカ今ハ唯疑問トシテ之ヲ掲グ置ケリ

五、文暦元年十二月二十八日（一二三五）大噴火

發火甚ダ盛ニシテ高千穗峯ト御鉢トノ中間鞍部タル脊門
丘ニアリシ神社高千穗神社寺院及ビ什寶文書等悉ク燒失

斯（三國名勝圖會ニ據ル）

六、人皇八十六代四條院ノ御宇文暦元年甲午十二月二十八日

神火大ニ起リ山中及ビ社院咸丙丁ノ災ニ遇フテ灰燼トナル

（東霧島大權現由來記）

四條天皇文暦年間ヨリ霧島山ニ猛烈ナル噴火アリテ社殿悉
ク燒失ニ及ビ神靈ヲ東霧島（北諸縣郡高崎村）ニ移ス噴火

（古記録）

火ミテ慶長十五年又元ノ狹野ニ造營ス（狭野神社）

四條天皇文暦元年十二月二十八日猛烈ナル噴火アリテ狹野
地方マデ熱砂熱灰ヲ降シタリ社殿寺院等燒失ス御神靈ハ北
諸縣郡高崎村ニ遷座ス（狭野神社舊記）

諸縣地方ニテハ享保元年ニ噴出シタル灰砂ヲ享保「ボラ」
ト云ヒ層厚二尺アリ又文暦「ボラ」ヲ昔「ボラ」ト云ヒ層

厚五尺ニ及ブ之ニヨリテモ文暦噴火ノ大ナリシコトヲ知

ルベク爾後二百數十年間噴火記事ヲ缺クハ社寺ノ恢復セラレザリシニモ因ルベシ

弘安年中(一二七八) 霧島襲峯大ニ鳴動シテ大鼓ヲ擊ツガ如ク天地ヲ轟カシ同時ニ大浪ノ池モ大音響ヲ發シ國中ノ

耳自ヲ驚カス(挾野神社舊記)

徳治二年(一〇七)十一月襲峯大ニ鳴動シ大浪ノ池水波濤ヲ

起シ大音響ヲ發ス(狹野神社舊記)

大永二年(一五二)壬午大隅國桑原郡踊郷巢窪田村安樂ノ溫

泉涌出ス(溫泉神社古文書)

六、大永四年(一五四)噴火(ミルン氏日本火山志、地學協會報告)

大永四年甲申霜月二十三日(一五二四)夜大地震山岳崩(玉龍山續記)

前記噴火ガ如何ナル舊記ニ載セラレタルカヲ詳ニセザレ

ドモ大地震山岳崩ノ事實ニ伴テ有リ得ベキコトナリトス

七、天文二十三年(一五四)ヨリ翌弘治元年ニ至リテ燃ユ(勝圖會三國名)

天文二十三年ヨリ又火發リ明和九年(一七二)マデ二百三十四年ニ燃エシコト凡ソ十餘度(地理考)

前記地理纂考ハ天文ノ噴火ヲ以テ霧島噴火ノ新紀元トシ

明和噴火ヲ以テ明治噴火以前ノ最終噴火ドシタルモノニシテ文政四年ノ新燃噴火ヲ氣附カザリシモノナルベシ

八、永祿九年四月七日(一五六六)霧島炎上ス(飫肥松井蛙助年代記)

永祿九年九月九日(一五六六)火ヲ發シテ人多ク焚死ス(名勝)

永祿九年丙寅霧島山炎上(襲山)

九、天正二年甲戌正月(一五七四)霧島神火天地震動ス(玉龍山續考)

一〇、天正四年(一五七六)ヨリ同六年ニ至ツテ又燃ユ(勝圖會三國名)

一一、天正十三年(一五八五)霧島山震動噴火(地學協會報告)

天正十三年十月七日ヨリ大地震年ヲ逾ニ(飫肥松井蛙助年代記)

前記大地震年ヲ逾エタルハ東海道ノ大地震津浪ニ關係セルモノナルベク之ノミヲ以テ霧島山震動噴火ナリトハ速

断シ難キモ此年代ノ前後ニ於テ頻々タル噴火アリタルニ徵シ此年ノ噴火ハ有リ得ベキコトナリトス

一二、天正十五年丁亥四月十七日(一五八七)霧島ノ神火震動シ黒煙ノ上ニ白雲霏キ一日ニ三度巍々敷立ツ(古年代記)

一三、天正十六年戊子三月十二日(一五八八)霧島山神火ヲ發シ申酉ノ間大地震(上同)

一四、慶長三年(一五九八)ヨリ五年ニ至ツテ又燃ユ(勝圖會三國名)

一五、慶長十八年(一六〇三)ヨリ翌年ニ至ツテ又燃ユ(霧島神宮舊記)

一六、元和元年(一六〇五)ヨリ翌年ニ至ツテ又燃ユ(上同)

一七、元和三年(一六〇七)ヨリ翌年ニ至ツテ又燃ユ(三國名)

一八、寛永十四年(一六〇七)ヨリ翌年ニ至リテ燃ユ(上同)

寛永十四年噴火ノ爲メ野火起リ寺院焼失ス(記)

明暦二年(一六〇六)胎藏界池(新燃ノ火口湖)涸渇シ之ニ沈没シタリシ

樹木ヲ露出ス(ミルン氏日本火山志)

一九、萬治二年(一六〇九)ヨリ寛文元年(一六一六)ニ至ツテ燃ユ(勝圖會三國名)

二〇、寛文二年(一六〇二)ヨリ同四年ニ至ツテ又燃ユ(勝國名)

二一、延寶五年(一六〇七)丁巳霧島山神火起(古年)
(代記)

島縣火山志

勝國會

二二、延寶六年戊午正月九日(一六〇七)霧島山神火起(古年)
(上)

勝國會

二三、寶永二年乙酉十二月十五日(一七〇五)山上ニ火ヲ發シ
(上)

勝國會

二四、享保元年丙申二月十八日(一七二一)夜霧島山ノ内小林曾
(上)

勝國會

於郡境笈掛嶽ノ北金剛界胎藏界兩部池ノ邊新燃二ヶ所燃出
ル依之小林邊震動高原ノ内花堂松八重川水増魚死流(同)

勝國會

按ズルニ笈掛嶽ハ現今ノ中岳ニシテ金剛界池及胎藏界池

ハ一條ノ水ヲ以テ相交通セルヲ以テ之ヲ合稱シテ兩部池

ト呼ビタリ此池ハ往時ハ霞島四十八池中ノ著明ナルモノ

ナリシガ是ニ至ツテ消失シ此代リニ新燃池ヲ出ス(第二

十六圖參照)舊記ニ據レバ金剛界池縱横各百五十間ニシ

テ胎藏界池ハ縱百六十間横十八間アリト云フサレバ此兩

部池ハ現今ノ新燃鉢ノ舊火口内ニアリシモノナランカ即

チ此時ノ噴火ハ次ノ享保大噴火ノ前噴火ナリシナルベシ

二五、享保元年九月二十六日(一七一六)霧島山兩部池ノ邊新

ニ大ニ燃出ヅ高原東霧島神社、狹野權現ノ社、神德院寺中門

前、竝高原野町、小林、瀬戸尾權現ノ社竝ニ別當寺悉ク焼失、

小林山丸狩倉燒失、高原高崎邊石灰ニテ田畠多ク降埋ム。

東霧島社狹野神體ハ守出シ瀬戸尾社神體ハ後日燒跡ヨリ掘

出ス、今曉福山町ノ者共男女十一人瀬戸尾ヘ致參籠候處ニ

之儀申越候次第左ノ通

向候旨、小林ヨリ申出ヅ(鹿兒島縣)

此噴火ハ災害ニ關シ恐ラクハ最大ノ記録ナルベシ即チ次

ノ統計ヲ見テ之ヲ知ルベシ

九月二十六日夜半頃ヨリ霧島ノ西嶽震動シテ周圍三里半程
處々ニ噴火破裂シ爲メニ其地内ニ在ル所ノ山林及ビ神社佛
院等ハ悉ク燒失シ其他災害ヲ被リシモノ砂石入ノ外城(郷)
十二燒失シ此家數六百四軒、負傷三十人、斃死ノ牛馬四
百五頭、田畠六千二百四十町八段六畝十九歩、此農產高六
萬六千百八十石餘、其後三四年ノ間灰下リテ恰モ春霞ノ如
クナリシト云フ(日本災)

兩部池火口ヲ新燃鉢ト稱スルニ至リシハ是ニ始マル

二六、享保元年十二月二十六日(一七一七)及ビ同二年正月三

日(一七一七)新燃鉢噴火、是レ即チ前噴火ノ餘噴火ニシテ

其最大ナリシモノナリ

霧島山新燃今二十六日ヨリ二十九日迄四日相續大燃、高原、

高崎、庄内、高城、穆佐、都之城、小林、倉岡、綾、高岡、

須本、野尻邊迄石灰降、田畠大分損失、人馬及死失。正月

三日霧島山新燃又々大燃有之、此以後七日ヨリ十一日迄打

續大燃、彼邊火石ニテ家屋燒失、錫杖院寺家不殘燒亡、田

畠石灰ニテ降埋牛馬過分死失、高原、高崎、兩所役人共迄

方々へ引越居候。舊臘二十六日ヨリ當正月十一日マデ度々
大燃、日向國諸縣郡ノ内諸所損失調、二月九日江戸ヘ御届

田畠十三萬六千三百坪餘、石砂灰入高ニシテ三萬七千九百五十石餘。米雜穀千五百四十石餘。堂社十一宇。寺家三十軒。寺門前五十三軒。社家二十六軒。百姓家十四軒。死人一人(男)。怪我人三十人。死牛馬四百二十疋。(鹿兒島縣火山志)

二七、享保二年八月十五日(一七一七、一九)霧島山大ニ火アリ硫黃地ヨリ逆リ大石空ニ跳リ火氣炎々トシテ晝夜絶エズ其響迅雷

ノ如シ、土灰近國ニ飛ビ近郷田ヲ埋ムルコト數十里(同上)

二八、明和八年(一七)ヨリ翌年ニ至ツテ又燃ニ、凡享保元年ヨ

リ此歲ニ至リ大ニ火アリテ屢々熾ナリ、燒石焰トナリ虛空

ヨリ隕チ、砂石糠ヲ簸ルガ如ク、灰燼降テ晝モ夜ニ異ナラズ、行人蓬蓽ヲ戴テ其壓傷ヲ遮リ防ギケリ、數里ノ間田疇ヲ埋沒シ草木焦枯ル(勝國名)

明和九年霧島山炎上シ日向國諸縣郡ノ諸邑民屋田園災ヲ被ルコト多シ(地理)

二九、文政四年十二月二十日(一八二二)新燃鉢噴火シ硫氣ノ泥水ヲ松永川ニ流出セシム

當月二十日朝霧島山北へ有之候中嶽ノ絶頂ヨリ火發候様子ニテ白煙少々相立候處晚方ニ相成黒煙夥敷炎上リ近邊ノ地迄モ致震動候只今ニ至リ候テハ漸々相靜候得共煙ハ止不申候今日晝時分ヨリ此表少々雨降候處國分新川ヘ硫黃流出淺瀬迄モ水底相不見程ニ御座候新川筋ノ儀ハ日當山ノ中ニテ安樂川ト相會候場處有之硫黃右松永川筋ヨリ相流此邊ヨリ水上三相成候テハ硫黃氣殊更濃ク川水モドロツキ候程ニ有之候由松永川上ハ踊ノ内明攀山ヨリ出曾於郡大久保ヘ相通候因テ相流候硫黃ノ次第聞合仕候處右明攀山邊豫テ温泉湧出候場處有之中嶽燃ニ付右川中ヨリ俄ニ硫黃吹出候杯ト風聞仕前文新川筋硫黃氣ノ勢ト合セ考候ニ僅ノ

雨降ニテ燃出候灰洗下シ候位トハ相見得不申候右ニ付國分川東諸村ノ田地へ相掛候用水過半ハ右松永川ヨリ相掛候處萬一以來前件通不斷硫黃氣相流候ハ、手廣田地都テ加久藤白鳥邊ノ地面同様ニ成立可申誠ニ以不輕事候其上燃出候儀固ヨリ非常ノ事ニ付當鄉ハ勿論曾於郡横目等へ早即糺方等委申越候得共只今ニ至リ何レモ尙明不申候故先私見聞仕候形行早々御届申上候以上但本文中嶽何郷ノ境内ニ候哉未相知不申候尤國分新川西宮内新田溝筋ノ安樂川ヨリ用水相掛候得共硫黃氣無御座候

己十二月二十二日

國分表締方横目

御裁許掛衆

寺師 次右衛門

右書付差出候處翌二十三日曾於郡横目稻留彦右衛門、川越清兵衛ヨリ糾方ノ返答書相達候披閱候處全々不通ノ文章故即刻右兩人へ相用申越候處又翌二十四日右稻留彦右衛門差越候付國家名山大川ノ成行共委敷申聞候處鄉士年寄共ニモ右様ノ頓着モ未不仕由申候付行司山方役共ヘ申付明二十五日晚ヨリ嶽山へ差登リ燃出本且硫黃涌出候場可相究旨申達彦右衛門差返申候

其翌二十五日濱之市詰同役山田増右衛門余ノ旅宿へ到來候間右ノ成行申達候處致同意且二十六日ニハ右登山ノ者共罷下ル賦候間余曾於郡麓迄差越直ニ可相糾旨致相談候處其通ニテ糾方ノ書方連名ニテ申上後ニ草稿爲相見候テ可然旨增右衛門ヨリ承届候右ニ付二十六日朝ヨリ曾於郡重久村ヘ差越居候處夜八時分前文行司共歸來候間子細承届致一泊二十七日住吉村ヘ罷歸書付相認御裁許掛ヘ差遣右草稿書寫山田氏へ遺候左ノ通リ

去ル二十二日御届申上置候通リ今度霧島山炎上ニ付國分新川迄硫黃氣流下リ候得共此表鄉役々一向頓着不仕候付一昨日曾於郡行司山方役共ニ懲々嶽山へ差登セ右ノ燃口爲見届候處中嶽ノ北半七八分目新ニ燃出候口四ヶ所計有之只今最中燃盛煙夥敷候ニ付委敷ハ不相知候得共其間何レモ一町程ヅ、モ相隔リ候體ニ見及尤此邊ノ地形西下リノ廻頭ニテ硫黃交リノ泥時々湧出シ迫尻大河内ト申谷川へ流入夫ヨリ下リ明攀山南ヨリ霧島宮ノ下相通リ直ニ松永川へ流出候迄モ見届

昨夜罷下リ申出候右ニ付相考候得者右嶽享保元申年燃出候ヨリ當年迄百六年相成其時ノ燃跡先年以池ニ相成爲居由候處此度燃出候場所右ノ側ニ相當リ候付其邊へ自然ト水氣有之前之通り硫黃氣ノ泥湧出候賦ニ御座候尤此表鄉ハ其節ノ砂入硫黃相除爲申由國分邊ヨリ中嶽ハ凡七八里程相隔リ燃方ハ追々不相止體ニ候得共最初二十日ノ朝火發候ヨリ西風吹續此表ヘハ灰砂降不申故人々何ノ用意モ不仕候得共去ル二十二日始メテ硫黃氣相流候テ其翌日ハ少々相止候處同四十日ニハ又々相流初發ヨリ尙々甚敷此ニ至リ其氣一切相絶不申川筋ノ魚類モ悉致毒死勿論曾於郡ノ内田口松永ノ兩村ハ井戸出水等モ無之場處ニテ右川水召仕申候處前文通リニ就テハ朝夕ノ仕水井半島側方等迄モ別テ難儀仕候由田地用水ノ儀ハ當分都テ相落シ有之候得者少モ差支不相見得候得共右松永ノ井手頭ニ相係リ候村々ハ曾於郡ノ内田口大窪川北蹄ノ内持松村大井手下ニテ相用候村數ハ曾於郡ノ内清水ノ内姫木口當山ノ内東郷國分ノ内新町府中野口松木小村合セテ十二ヶ村ニテ大抵右ノ御高五六千石餘皆々右用水ノ由ニ御座候右ニ付曾於郡地圖相見合申候處大河内川ヨリ下松永ノ井手場迄大概五六里程有之其間段々谷川等御座合候ニ付硫黃水ノ流ハ鑿リ決リ脇方ヘ可相導場處ハ有之間敷哉ト段々詮議仕候得共右様地形ノ場處一切相見得不申前文行司等見届候次第ニ御座候得共燃場處遠方ニテ當表ノ諸郷只今ハ危難ノ節差テ相見得不申候得共此涯不相煩以來時々今通有之候ハ、災殃相受候者此表ノ諸郷眞初ニテ其上御記録方御用ニモ可相係格別ノ儀旨御役共ヘモ申諭炎上ノ儀相究并最初御眉心得ノ様體等委敷相糾重テ此段申上候尤中嶽燃出場ノ儀ハ曾於郡小林郷境目ニテ大半ハ曾於郡内ニ御座候以上

巳十二月二十七日

國分表締方横目

寺師次右衛門
山田増右衛門

御裁許掛衆

昨日ハ御光來御親切御教示等承知仕添ク存候其節御啗申上候此度霧島山燃出糾方トシテ即刻發足曾於郡へ差越候處山登ノ者共段々夜ニ入龍歸候ニ付直ニ成行

等承通候處夜更相及候故無是非一宿仕右ニ付所役共ニモ近日地頭所等ヘ届ケ出由承締方ノ披露相後候テモ不手涯ノ筋ト存候ニ付早速相糾候形行書調乍推計昨日被仰聞候由テ右草稿寫取左之通入御覽候御存知之通愚昧ノ拙者ニテ作文極々拙ク候ニ付千辛萬苦漸々綴立候ヘバ貴覽ニ備候儀モ殊ニ無御面目候乍然蟻ノ心切ニ相考候ヘバ今度霧島山炎上ニ付テハ誠ニ異變ノ大ナル物ニ候得者文體モ此ク異様ニ相認可然ト存短才ヲフルヒ書調候ニ付全ク御國體ニ不似合頗ル他州抔ノ體格ニ似寄候ニ付御裁許掛衆御笑草ニ相成可申拙者事當役十餘年相勤候得共未差テノ御用尚等相勤不申候故鹿兒島横目體ノ書付別テ御案内ニテ晝夜心掛稽古仕候得共一切相進ミ不申動スレバ野鄙ノ文字書出シ恐愧無此上存申候何トソ御優恕可被下候(本文ハ寺師次右衛門ヨリ山田增)
(右衛門ニ與ヘタル書ナルベシ)

三〇、明治十三年（一八）九月御鉢小噴火

御鉢ノ最近ニ於ケル活動ノ開始ハ此時ニ在リ此以前ハ坑内全ク靜謐ニシテ矮樹密生シ獵師雉兎ヲ追フコトアリシガ是ニ至リテ俄然小爆發ヲナシ爾後今日ニ至ルマデ活動ノ狀ヲ絶タズ草木枯死シ蒸氣硫煙ノ噴出其勢ヲ増シ遂ニ噴火孔内ニ硫黃ヲ夥シク堆積セシメシカバ之ヲ採掘スルニ至レリ然レドモ明治二十一年及同二十二年ノ大爆發ニヨリ堆積セル硫黃ハ孔外ニ飛散シテ採掘ノ業ヲ中止スルニ至レリ

三十一、明治二十年（一八）乃至同三十六年（一九）御鉢噴火

明治二十年八月——此頃ヨリ霧島北方ノ火坑噴出破裂シ遠雷ノ如キ音響ヲ發スルト同時ニ震動シ狹野、花堂附近ハ戸障子等ノ動搖スルコト甚ダシ霧島山ヲ仰ゲバ噴煙渦巻キ昇リ噴煙中ニハ電光石火閃キ悽々タル狀ヲ呈ス二三分ニシテ忽チ砂混リノ拇指大ノ燒石ヲ降ラシ屋根瓦又ハ木竹ノ幹

葉ヲ叩ク音悽絶慘絶ヲ極ム

(社野神)

明治二十一年(八八)二月二十一日噴火ス、鳴動一晝夜ニ三四回ニ及ビ噴煙天ヲ蔽ヒ飛灰四五里ニ及ブ五月九日亦噴火ス(日本山獄志)

明治二十一年十二月二十八日(舊十一月二十六日)午後一時噴火烈シク鳴動ヲ起シ噴煙忽チ東北方ニ漲リ拇指大ノ燒石竝ニ灰ヲ降ラシ日中暗黒トナルコト十數分間燭火ヲ點ズルモ咫尺ヲ辨ゼズ硫氣紛々トシテ鼻ヲ撲チ親ハ子ヲ呼ビ子ハ親ヲ尋ヌルノ恐慌ヲ來タセリ日中ノ事迎農民樵夫等ヨリ畜類ニ至ルマデ負傷ナク又火災等ヲモ起サズ降灰積ムコト二分ニ及ベリ

ト雖モ田畠ヲ害スル程ナラズ(社野神)

明治二十二年十二月十日及ビ同十八日噴火——御鉢ト稱フルハ明治十七八年ノ頃ヨリ漸ク噴火ノ勢ヲ増シ同二十一年二月頃ニ至リテハ鳴動噴火甚シク實ニ容易ナラザル形狀ナリキ然レドモ爾來其勢ヲ殺ギ一日一回乃至二回ノ噴煙ヲ見ル位ナリシガ、十二月十日午前一時頃突然大ニ噴火シ其響激雷ノ如ク黑煙忽チ天ニ漲リ噴出セル火石遙ニ中天ニ上リ昇降ノ際互ニ打合ヒ或ハ飛散シ或ハ破裂スル等其狀恰モ花火ノ如ク散亂シタル火石ハ降積シタル硫黃灰ニ燃移リ延焼ク數里ニ及ビ噴煙甚ダシク灰ヲ降ラシ砂礫ヲ飛バスコト晝夜七八回ニ及ビシガ就中同十八日午後零時三十分頃ヨリノ噴火ハ鳴動、發火、噴煙共ニ一層甚シク天色忽チ朦朧ニ變ジ

降灰ノ地上ニ堆積スルコト殆ド二三分ニ至レリ、幸ニ西風

起リシ爲メニ東裏山村ハ其害ヲ免レタリシモ高原村ノ如キ

ハ該風吹靡キ黒煙天ニ漲リ爲メニ晴朗ノ天俄ニ暗黒トナリ

白晝途ヲ失ヒ燭ヲ照シテ逃避スルアリ、爾後晝夜鳴動噴煙止マズト雖モ別ニ甚シキ異狀ヲ認メズ(鹿兒島縣報告明治二十一年一月二十三日官報)

明治二十四年(九一)六月十九日噴火——十九日頃ヨリ非常ニ噴火シ一晝夜凡十四回鳴動劇烈ニシテ黒煙ヲ發シ噴氣盛ナルニ至リテハ石ヲ飛バシ灰ヲ降ラス等ノ異狀ヲ呈シ山麓一里内外ハ草木等ノ葉ヲ枯凋セシメシモ田畠ノ諸作物ヲ害スルニハ至ラズ(地學雜誌第三集)

同年十一月十日噴火——十一月十日頃ヨリ晝夜十四五回ヅツ非常ニ噴火鳴動黒煙ヲ發揚シ近傍一里内外ニ灰ヲ降ラシ草木ノ葉ヲ枯凋セシメシ處アリ、同二十日頃ヨリ噴火鳴動共ニ漸次減却セリ(地學雜誌第三集)

明治二十七年(九四)二月二十五日小噴火(日本火山志參照)

明治二十八年(九五)七月十六日小噴火(同)

明治二十八年十月十六日噴火——午後〇時三十分頃御鉢ノ舊噴火口俄然噴火シ其響激雷ノ如ク黑煙忽チ天ニ漲リ噴出セル火石ハ四方ニ散亂落下シ其遠キハ二十町許リニ及ビ巨大ナルモノハ五疊敷程アリ又里餘ニ亘リテ黑白灰ヲ降下セリ且ツ落下シタル火石ノ爲メ松樹ヲ挫キ或ハ數町歩ノ原野ヲ燒燼セルアリ噴火口ヨリ南西ノ方位ニ當レル里餘ノ場所ニハ殆ンド巨彈ヲ打込ミシガ如キ痕跡點々散在シ地中三四

尺空洞ト方リテ之ニ熔岩ヲ埋没セルアリ

(地學雜誌第七集)

破裂當時ノ諸報告ニ照ラスニ此際鳴動一時ニ劇シク黒煙空ニ漲リ燒石西ニ飛ビ多少ノ降灰アリ鹿兒島ニ於テモ地盤ノ震動ヲ感ジタリ其性質急震唯一回ニシテ已ミ續イテ起ラザリシト云フ燒石ノ飛ブヤ久シカラズシテ御鉢ノ西ニ接スル中嶽ノ山腹ニ於テハ諸所ニ火ノ起ルヲ認ム暫時ニシテ止ム噴火口ニ最モ接近セル村落ニ於テハ當時激シキ鳴響ヲ聞カズト云ヘリ然レドモ當日ノ登山者ニシテ實地ヲ目擊シタルモノ、言ニ依ルモ轟然タル響一時ニ起リシハ事實ナリ破裂ハ一回ニシテ止ミ噴煙次第ニ淡色トナリ數時ノ後故ニ復セリト云ヘリ、今回ノ破裂ニヨリテ噴出シタルモノハ主トシリタルニ過ギズシテ植物ノ害ヲナスニ至ラズ小林近傍ニハ岩塊ニシテ降灰ハ多カラズ降灰ハ僅ニ四近山林ノ梢頭ヲ掩シ噴出ノ岩塊ハ其數頗ル夥シク其大サハ長徑二米ニ及ブモノアリ此等夥多ノ岩塊ハ噴出ノ勢ニヨリ西方ニ位スル中嶽ノ側面ニ向ツテ無數ノ圓錐形小孔ヲ穿チタリ其最モ遠キニ達シタルモノハ噴火孔ヲ距ルコト約二糸ノ地ニ存セリ而シテ此等ノ圓孔ハ御鉢ヨリ西方ニ當ルノ地ニ最モ多ク其他ノ方面ニハ極メテ少ナカリキ、昨二十七年二月噴火ノ後今回ノ破裂ニ至ルマデ別ニ著シキ異狀アルヲ聞カズ但シ同年四月登山セルモノニシテ其際噴火孔内ニ於テ孔底ヨリ孔外ニ向ツテ岩塊ノ一上一下シテ一定ノ高サヲ往來セルヲ目擊セ

(地學雜誌第八集)

ルコトアリ又今回ノ破裂前ハ噴煙著シク微ナリシコトノ確報アリ破裂前四近ニテハ數日前ヨリ鳴動アリキト言フモ事實判然セズ其他破裂ノ前徵ト見做スベキ何等奇異ノ現象アリシコトヲ聞カズ聞ク御鉢ノ噴火孔内ニ水ノ瀦留スルカ或ハ曾テ硫煙ノ上昇スル時ハ噴煙一時大ニ衰へ從ツテ最モ戒心ヲ要ストノ口碑アリト注意スベキコトナリ

(地學雜誌第八集)

明治二十八年十二月十八日噴火——午後三時三十分頃俄然大鳴動ヲ發シ黒烟天ヲ衝キ餘響遠ク二十里外ニ達シ爲メニ家屋ノ反響亦甚シク燒石ハ同山ノ東麓ニ飛散セシモ幸ニシテ枯草ノ焼失セシ外人畜其他ニ被害ナシ同日ハ西風ナリシガ爲メ灰烟ハ東方ニ吹キ送ラレ都城地方ハ硫黃臭ノ降灰頻

リニシテ面ヲ向クベクモアラズ又飫肥邊ニモ降灰アリ該地方ニ於テ降灰アリシコトハ未ダ曾テ見ザリシ所ナリト云フ延テ同二十一日午後一時十五分再び鳴動噴煙甚ダシク山麓ノ村落ハ一時咫尺ヲ辨ズベカラザルニ至レリ然レドモ幸ニシテ被害ナシ

(地學雜誌第八集)

明治二十九年(一八九六)三月十五日噴火——午前八時二十六分霧島山ニ爆發噴煙アリテ登山者ニ死傷者ヲ生ジタリ負傷者テ此等ノ圓孔ハ御鉢ヨリ西方ニ當ルノ地ニ最モ多ク其他ノ方面ニハ極メテ少ナカリキ、昨二十七年二月噴火ノ後今回ノ破裂ニ至ルマデ別ニ著シキ異狀アルヲ聞カズ但シ同年四月登山セルモノニシテ其際噴火孔内ニ於テ孔底ヨリ孔外ニ

響ト共ニ火焰見ルノ脚下ヨリ起リ砂石ヲ吹立ツルニゾ前

ニ立チタル吉松ハ忽チ吹飛バサレテ所在ヲ失ヒリ氏ハ手ヲ以テ眼ヲ蔽ヒ居ル中帽子ハ吹拂ハレ砂石沛然トシテ五體ヲ撲ツガ如ク少時ニシテ少シク凌ギ易クナリシヨリ四邊ヲ見ルニ吉松ヲ見ズ已ヲ得ズ獨リ元來シ道ニ取テ返セシニ今一坂ニテ霧島社前ノ宿屋ニ着クベキ所ニテ打倒レ居タルヲ一樵夫ニ助ケラレテ漸ク蘇生シテ宿屋ニ入ルコトヲ得タリ又吉松ノ屍體ハ前場處ノ近傍ヨリ發見セシガ全身糜爛シテ頭蓋骨ハナカリシト云フ猶ホ霧島山ハ同月二十六日ニ至ルモ鳴動噴煙ヲ繼續セリ(地學雜誌第八集)

明治二十九年六月二十二日、同二十六日、同十二月二十一日、三十年五月三日、同六月二十五日、同九月四日、三十一年二月八日、同三月十一日、同十二月二十六日、乃至三十日、同三十二年七月二十八日小噴火(日本噴火志)

明治三十二年(一九)八月二十八日小噴火——午前一時三十分頃俄然鳴動シ音響殊ニ劇シク山麓ノ家屋ハ震憾シ餘音遠雷ノ如ク二三分間繼續シ同時ニ噴火シテ黒煙ヲ吐キ光景頗ル凄ジカリシガ幸ニ人畜ヲ害スルニ至ラズ(地學雜誌第十一集)

明治三十二年九月十二日、同十月十三日、同十一月七日、三十三年二月十六日、三十六年八月二十九日、三十六年十一月二十五日小噴火但シ最後ノ分ハ稍劇シク西岳村宇牛ノ驅馬渡尾首山等ニ夥シク灰及ビ砂礫ヲ降下シ牛ノ驅地籍ニハ拳大ノ石ヲ降ラセリ(日本噴火志)

三二、大正二年(一九)同三年御鉢小噴火

大正二年十一月八日午後十一時御鉢小噴火アリ狹野、西麓、小林、加久藤ニハ降灰アリ尋イデ十二月九日午前四時十分再ビ小噴火ス大小ノ火石高千穂峯及ビ其山腹ニ撒布シ西岳村字中ノ山附近ニハ周圍四五寸ノ火石降レリ降灰ハ高原ノ南西部ヲ蔽ヒ宮崎ニマデ及ベリ此二回ノ噴火ハ其ノ勢力去ル明治三十六年十一月二十五日ノモノニ比較シテ著シク劣勢ナリキ尙ホ翌三年一月八日ニモ小噴火アリキ牛臘方面ニハ栗實大ノ石ヲ降ラシ御池ノ西方ニ當レル小字赤道ノ一部落ニ於テハ砂石落下シテ屋上囂音ヲ聞キ東襲山村ニ於テハ降灰ヲ見タリ

大正二年十一月八日午後十一時頃噴火鳴動シテ當里附近マデ降灰アリ凡ソ一分間ニシテ止ム同十二月九日午前四時十分頃噴火鳴動シ激烈ナル震動約二分間ニ及ベルガ噴火口ヨリハ電火閃キ黒煙簇出シテ奇觀名狀シ難ク須叟ニシテ石火散ジテ附近ノ枯草ニ燃移リ山ノ半腹以上ハ一面ノ火ニテ飾ラレ其壯絶ナルコト筆紙ニ盡シ難シ幸ニシテ異風（反對ナリシナランカ）ナリシ爲メニ火口ヨリ渦卷キ昇ル噴煙ハ西岳村方面ヘ横ハリ當村附近ハ一時不安ノ念ニ襲ハレタルモ人畜ニハ死傷ナシ西岳村ノ西部附近ニハ拇指大ノ破片降下シ又其西部國有林内ニハ飛火シタルヲ以テ村民舉テ消火ニ努メタル結果消止ムルコトヲ得タリト云フ右二回ノ噴火ニ際シ當社竝ニ氏子一同無事ナリシハ幸ナリキ(石塚氏ノ日誌)

大正四年七月十四日栗野地方ニ強弱震頻々トシテ起リ此爲

メニ該地方ニ恐慌ヲ來タセシガ更ニ霧島噴火ヲ豫想シテ一層恐慌ヲ大ニセリ余ハ當時東京ニ於テ此ノ電報ニ接シタリシガ噴火ノ豫想ヲ理由ナキモノトシ唯單ニ注意ヲ加フルニ若カザル意味ヲ地方當局ニ打電シ置キシニ翌々十六日ニ至ツテハ遂ニ噴火セリトノ公報ヲ受領シ一時困惑セシモ間モナク噴火ハ誤認ナリシトノコト多數ノ探檢者ニヨリテ主張セラル、ニ至リ余ハ八月六日ヨリ十二日ニ至ルマデ霧島地方ニ出張シテ實地ヲ踏査シタル結果、當時噴煙ト認メラレシハ或ハ火口内ヨリ盛ニ噴出セラレタル水蒸氣ノ類ニシテ岩石ノ破片、灰沙ノ如キ固形物ヲ含有セルモノニハアラザリシルベク、從ツテ噴火ト稱スベキ程ノコトニテハアラザリシト思惟セリ

以上列舉セル所ニヨリテ霧島山ノ活火口ハ明カニ二個ヲ數フベク而シテ其一火口タル御鉢ノ明治年間ニ於ケル活動狀況ハコレガ明治十三年頃其ノ長キ睡眠ヨリ覺醒シ同二十一、二年頃ニ於テ盛況ヲ示シ、後次第ニ衰退セシモ、而モ急ニ靜謐ニ歸スルニハ至ラズ延引四十年ニ垂ントスル今日ニ於テ漸ク睡眠ノ狀態ニ復セントスルモノ、如シ斯クノ如ク長年月ニ亘リテ前噴火、餘噴火ヲ多ク伴フハ恐ラクハ御鉢活動ノ特性ナルベク即チ過去四百年間ニ於ケル噴火中(七)天文二十三年ヨリ(一七)元和四年ニ至ル六十五年間殆ンド間斷ナク起リタル噴火モ之ニ屬セシモノナルベク又(一九)萬治二年ヨリ(二三)寶永二年ニ至ル四十八年間斷續シテ起レルモノモ同様ナルベ

シ此後者ニ就イテハ被害ノ狀況竝ニ次ノ享保ノ噴火口ヲ新燃鉢ト稱セル事實ヨリ然カ想像セラル、ノミナラズ新井白石ノ霧島嶽記(日本噴火志下卷參照)ニヨリテモ之レヲ肯定シ得ベシ但シ霧島嶽記ハ長崎ノ三士人ガ高千穂峰ノ東麓、祓川ヲ出發シテ矛ノ峯ニ登リ更ニ西腹ノ火口ヲ究メ以テ神宮所在地ニ下リシ記事ヲ漢譯シタルモノニシテ登山ハ元祿五年(九二)ノ事ニ屬ス即チ其時期ハ正ニ延寶噴火ト寶永噴火トノ中間ニ在リテ御鉢ハ當時盛ニ噴煙セルモノ、如シ天文乃至元和ノ噴火ニ就イテハ其ノ簡單ナル記事ノミヲ以テ噴火口ノ位置ヲ推測シ難キモ噴火ノ長期ニ連續セシコトニヨリテ寧口然カ想像スルヲ穩當トスベシ其他(一八)明和ノ噴火ハ一見享保年間ニ於ケル新燃大活動ノ餘噴火ノ如キ感ナキニアラザレドモ其兩者ノ間ニ餘リニ年次ノ懸隔アルコト、橋南溪ノ西遊記ニ收メタル登嶽記ニヨリテ此時代ニ御鉢ノ活動セルコトヲ想像シ得ベキコト、ニヨリテ其ノ新燃噴火ニアラズシテ御鉢噴火タルコトヲ適當ナル見解トスベシ但シ南溪ノ登嶽ハ天明三四年頃ナリシナルベク即チ明和ノ噴火後十數年ノ後ニアリテ而モ案内者ノ陳述ニヨリテ當時御鉢火口ハ尙ホ時々爆發スルコトアリシヲ想像シ得ベシ

御鉢噴火ハ以上ノ外尙ホ多々アルベシ即チ前記噴火記錄ハ御鉢ニ於テ起レルモノヲ主トシ新燃鉢ニ於テ起レルモノ其間ニ點在ス但シ往古ノモノニツキテハ天慶噴火ハ性空上人ノ關係ヨリ其御鉢ナルコト疑ナカルベキモ其他ニツキテハ之ヲ區別

シ難シ（一八）寛永噴火モ此部ニ屬ズレドモ尋イデ明暦年間ニ於テ新燃火口湖ニ異状アリシコトヨリシテ強セテ想像ヲ逞シウスルトキハ余ハ寧ロ之ヲ新燃ノ小活動ナリト見ントスルモノナリ。

斯クテ天文以後ノ活動年次ヲ列記スルトキハ次ノ如シ

御鉢——天文乃至元和（一五九七年間）

萬治乃至寶永（一六八三年間）

明和（一七二五年間）

明治乃至大正（一八九七年間）

新燃鉢——寛永（一六三七年間）

享保（一七二〇六年間）

文政（一八二八年間）

即チ御鉢竝ニ新燃鉢ハ最近四百年間交互ニ活動シ其一活動期ノ中心ヨリ次ノモノニ至ル間隔ハ各自凡ソ百年ニシテ若シ兩者ヲ一括スルトキハ凡ソ五十年トナル前記年次表ニハ寛永噴火ヲ新燃鉢ノ部ニ加ヘタレドモ之ヲ除キテモ明暦ノ新燃異狀ハ除外スルコト能ハズ故ニ結局略ボ前記ノ如キ結論ニ到達スルコト、カル但シ享保ノ新燃噴火ハ其勢力餘リニ偉大ナリシガ爲メニ次ノ御鉢噴火モ簡單ナル明和噴火ノミニテ終リヲ告

ゲ通常見ルガ如キ連續的噴火ヲナサマリシモノナランカ又文

政ノ新燃噴火ノ勢力ノ振ハザリシモ同様ノ現象ナリシト解シ得ベキガ如シ

前ニ列舉セル所ニヨリテ霧島噴火ニハ次ノ如キ習性ノ存在ヲ認メ得ベシ

一 霧島火山ハ御鉢及ビ新燃鉢ナル二個ノ活火口ヲ有ス

二 近時御鉢及ビ新燃鉢ハ凡ソ五十年ノ週期ヲ以テ交互ニ活動セリ

三 御鉢ハ其一活動期ニ於テ數十年間ニ亘リテ斷續的ニ噴火スルヲ通常トシ新燃鉢噴火ハ永續セズ

四 霧島噴火ハ爆發性ニシテ近時鎔岩ノ流出ナシ

五 霧島火山ノ陰性活動ハ屢々頻々タル地震發生ニヨリテ現出ス

御鉢火口ハ其四圍ノ地古來荒蕪シタルモノナルベク隨ツテ噴火每ニ著シキ損害ヲ與フルコトナキモ新燃鉢ハ村落或ハ溫泉場ニ接近シ而モ今人漸ク其活火口タルコトヲ忘レテ四近ノ地ニ林業ヲ試ミントスルモノアリ若シ數十年内ニ實收ヲ得ベキ事業ナラバ可ナランモ餘リニ長年月ヲ要スルモノナルトキハ恐ラクハ功ヲ成シ難カラシ近時新燃鉢ハ全ク休眠ノ狀態ニアレドモ霧島火山ノ次ノ活動火口ハ此物タラザルヲ保シ難シナレバ今後其火口特ニ其火口湖ノ物理學的變化ニ就イテハ觀測者ノ注意ヲ加フベキ所ナルベシ

乙 櫻島

本稿ヲ草スルニ當リ大森博士櫻島噴火ニ關スル論文ヲ本會歐文紀要第八卷ニ於テ發表セラレ尋イデ日本噴火志ヲ公ニセラレタリサレバ本稿モ此以下ノ部ハ成ルベク記事ノ重複ヲ避ケ同博士ノ論文ヲ參照スルコト、セリ

櫻島ハ鹿兒島灣内ニ孤立セル火山島ニシテ霧島火山系ノ中樞ヲ占ム北ニ霧島山アリ中間ニ小島ノ小火山島ヲ從フ南ニ開聞岳アリ更ニ南方ニ諫訪ノ瀬島鳥島アリ時々相呼應シテ噴煙ヲ揚グ特ニ櫻島ハ對岸一二里ノ處ニ鹿兒島ノ市街ヲ望ミ其活動

ノ人文ニ影響セルコト少シトセズ加フルニ最近ニ於テ一大爆
發ヲナシ世界ニ於ケル最モ著名ナル火山ノ一トナレリ

櫻島噴火ニ關スル沿革概ネ左ノ如シ

一、靈龜二年（七二）白山權現顯座シ同四年大隅向島（櫻島ノ）涌

出ス（舊記）

養老二年（七八）丁巳向島涌出ス（神代皇記）

按ズルニ向島ノ涌出ト稱スレドモ恐ラクハ新ラシキ噴火ノ

意ナルベシ

二、天平寶字八年（七六）櫻島北方三里ノ海底ヨリ噴火ヲ始メ

新島ヲ作ル國分海岸ノ小島是レナリ

續日本記ニ曰ク天平寶字八年十二月西方有聲似雷非雷、時當大隅薩摩兩國之堺、煙雲晦冥奔電去來、七日之後乃天晴、於鹿兒島信爾村之海、砂石自聚化成三島、炎氣露見、有如冶鑄之爲、形勢相連、望似四阿之屋、爲島被埋者、民家六十二區、口八十餘人。

天平神護二年（七六）丙午六月、大隅國神造新島震動不息、以故民多流亡、仍加賑恤（續日本紀）

前記鹿兒島信爾村ニツキ諸家ノ說アリ鹿兒島縣火山志ニハ

或ハ眞孝村ナラントシ大森博士ハ敷根村ナラントシ又多クハ此村名ヲ失フトセリ按ズルニ敷根村ハ距離餘リニ遠ク眞孝村ノ書損モ穿チ過ギタルノ感アリ此村名ヲ失ヘルコト恐ラクハ事實ナラン而シテ其原因ハ此地ニ國分村ヲ建設シタルニアルナランカ大隅第一ノ川タル新川モ此地ヲ貫流シ小

島ノ海ニ注グ此川名或ハ舊村名ト多少ノ因縁アルヤモ知レズ但シ信爾村ノ故實ハ兎モアレ新造島ノ小島タルコトニハ異議ヲ夾ムモノナシ

（本噴火ハ小島ノ噴火ニシテ櫻島本島ノ噴火ニアラザレドモ相互ノ距離系統ヨリ櫻島ニ附屬セシムルコト、セリ）

三、應仁二年（一四六八）乃至文明八年（一四七六）ノ大噴火

應仁二年櫻島山上ニ火ヲ發ス（福昌寺舊記）

文明三年九月十二日（一四七一）櫻島山上ニ火ヲ發シ黒神村ノ

上愈、熾ニシテ同七年野尻村火ヲ發シ八年九月十二日（一四七八）又大ニ燃上ル人馬死傷不可勝記近國ニ到ルマデ沙灰

ヲ雨スコト五日（福昌寺舊記）

文明三年九月十二日向島黒神村神火燃、同七年八月十五日（一四七五）野尻村神火燃、同八年九月十二日向島大ニ燃出ス

此五日以前ヨリ大ニ地震ス是ニ至ツテ岳上燃崩レ沙灰近國

マデ雨ルコト七日許ナリ其十九日ニ及ビテ未刻ヨリ眞ノ暗夜ノ如シ當島ノ西南ニ地湧出シテ本島ニ連ル其周回二里許

炎火沙石ノ爲メニ舍屋埋沒シ人畜死亡セシコト其數ヲ知ラ

ズ（地理纂考）

右ノ外地學雜誌ハ別ニ文明五年及ビ同十年ノ噴火ヲ記セリ其出處ヲ詳ニセザレドモ文明五年ハ天明五年ノ誤ニハアラザルカ又文明十年噴火ハ桂庵和尚ノ島陰集ニ載セタル次ノ事項ヲ誤解シタルモノニアラザルカ島陰集ニ曰ク文明十年戊戌八月十九日歷七里原、西南有一島曰向島、文明八年丙

申秋火起焚島、煙雲簇也塵灰散也、青茅之地忽變白砂堆、滄桑之歎不克蔑于懷、作是詩「烈火曾燒一島來、桑田碧海總休猜、去年澗底草深處、七里平原沙作堆」是レ即チ文明八年ノ大噴火ニヨリテ荒廢シタル七里原ヲ同十年ニ歌ヒタルニ過ギザルナリ

按ズスニ前記一群ノ噴火ノ初期ハ島ノ東部ナル黒神方面ノ活動ニシテ後期ニ於テハ活動ノ位置西南部ナル野尻方面ニ轉ジ山腹ヨリ鎔岩ヲ流出セシメ又降灰大隅ノ内陸ヲ荒廢セシメタリ

四、寛永十九年三月七日(一六四二)ノ晚向島神火燃(玉龍山續年代記)

(島)

五、寛延二年(一七四九)己巳八月向島野尻村ノ上太平山焼ケル(櫻島上山二所藏年代記)

以上ノ二噴火外延寶六年正月九日(一六七〇)寶永二年(一七一二)十二月噴火ヲ地學協會報告ニ載セアレドモ前者ハ霧島噴火ノ誤ナランカ孰レモ其出處ヲ詳ニセズ又日本災異志ニハ寛保二年三月二日(一七四二)寶歷六年(一七五六)噴火ヲ載スレドモ是又其出處ヲ詳ニセズ假令此等ノ噴火記事ヲ悉ク眞ナリトシテモ何レモ輕微ナルモノナリシナルベシ但シ寶歷六年八月十五日ニハ横山ノ上坂守塚ニ於テ以前ヨリ地ノ温リタル處ヲ掘ツテ溫泉ヲ湧出セシメタルコトアリ此ノ溫泉ハ其後噴出ヲ止ム前記寶歷噴火ハ之ヲ誤リシモノナルベシ

川原三間程廣マル。同四月二十八日朝夜明ケニ鳴物シ大地震アリ間少シヅツ有リテ小地震三度震フ。同六月二十一日夜八ツ前ヨリ八ツ時頃マデ鳴物九度、地震七度、中二度ハ大震(櫻島上山二所藏年代記)

按ズルニ日本災異志明和三年四月十三日櫻島噴火トセルハ前記水害ヲ誤レルモノナルベシ

一、安永八年十月一日(一七七九)大噴火

安永年度ニ於ケル櫻島ノ大噴火ハ恐ラクハ同島大噴火ノ標式的ノモノナルベク少クモ同火山ノ近代ニ於ケル噴火ノ特徵ヲ具ヘタルモノト謂フベシ今左ニ之ヲ列記ス

(一)破裂ノ前日ヨリ頻繁ナル前震ヲ發生セリ

九月二十九日午後五時頃(七ツ半時分)ヨリ震ヒ出シ夜ニ入りテ七時頃(六ツ半時分)ヨリハ煙草一服ノ間ニ二三度ヅツモ震ヒ夜明ケマデニ凡ソ百回モ震ヒシナルベシ其ノ後益々頻繁ニシテ數フルニ邊ナク遂ニ同日午前十一時頃ノ破裂ニ至ルマデ滅退スルコトナカリキ

(二)破裂前ニ於テ山麓ノ水脈ニ異狀ヲ呈セリ
破裂當日ノ朝ニ至リテ海濱ノ井水沸キ騰リテ流水ノ如クナリ海水ハ紫色ニ變ジタリ

(三)噴火ハ數ヶ所ヨリ或ル順序ヲ追フテ起リ初メハ輕ク次第ニ濃厚トナリ一兩日ニシテ極度ニ達シ鎔岩ヲ流シ三四日ニシテ始メテ衰フ

破裂ノ第一現象トシテ十月朔日午前十一時頃即チ最初ノ地

震發生後約十八時間ニシテ舊噴口ノ一ナル南嶽ヨリ白煙ヲ幾度モ射出シ（之ニ先ダチ半腹ヨリ白煙ヲ噴出セルヲ見タリトモ云フ）午後二時ニ至リテハ南嶽ノ南腹ニアル燃ノ頭ヨリ黒煙ノ大噴出ヲ始メ尋イデ北嶽ノ東北麓瓶掛ノ邊ヨリモ大噴出ヲ始ム當時鹿兒島明時館（俗稱天文館）ニ於ケル器械觀測ノ結果ニヨレバ其高サ三里二町十六間ニ及ベリトゾ

噴火ノ最モ旺盛ヲ極メシハ最初ノ噴火アリテヨリ約十二時間ノ後ニ始マリ其ノ後二晝夜程ハ勢力減退セズ鎔岩モ此時流出セリ即チ南方ニ於テハ十月三日夜間ニ海岸マデ流出シ北方ニ於テハ二日早朝ヨリ流出シ始メタルガ如ク櫻島ノ北岸ニ俣ニ於テハ此時火石落下セリ而シテ鎔岩ノ海岸マデ押出セシハ三日朝ニシテ高免村ハ此時火災ニ罹リタルノミナラズ全部鎔岩下ニ埋メラレタリ同村ノ現位置ハ此變災後新ニ開拓シタル所ナリ

（四）噴口一列ニ竝ベリ

北嶽東北腹ノ噴孔ハ數個アリテ此等ト南嶽竝ニ其南腹ノ新噴孔ハ略ボ同一ノ直線上ニアリ蓋シ地皮ハ此線ニ沿フテ裂罅ヲ生ジタルモノナラン

（五）新噴口ノ最高ナルモノハ四合目程ノ處ニアリテ之レヨリモ鎔岩ヲ流出セリ

（六）噴火後櫻島竝ニ其ノ四近ノ地方ニ於テ土地ノ沈降ヲ生ジ此ノ爲メニ潮水陸地ニ溢レ水田及ビ鹽田ノ損害多シ別項

島津侯ノ居書ニ記載セル潮揚ハ津浪ノミニヨルニアラズシテ土地沈降ニ基因セルモノアルベシ噴火後四五年ニシテ鹿兒島城下海岸通リニハ朔望ノ頃潮水ノ溢レシハ橘南溪ノ西遊記ニモ見ユ

以上ハ櫻島噴火ノ他ノ場合ニ於テモ見ルガ如キ現象ヲ列舉セルモノニシテ尙ホ此場合ニ於ケル他ノ著シキ現象ヲ舉グレバ左ノ如シ

家屋ノ倒潰、燒失又ハ埋沒シタルモノ五百軒以上ニ及ビ死者百五十人ヲ越ユ此内北方ニ於ケル被害地ハ文明鎔岩ヲ以テ被ハレタル地方ニシテ唯僅カニ高免ノ一部落アルノミナレバ家屋ノ埋沒燒失モ此一村ニ止マリ而モ一人ノ死者モ出サズ然ルニ南方ニ於テハ有村、脇、瀬戸ノ如キ人家稍彌密ナル部落ニ於テ落下セル火石ニ打タレ或ハ降灰ニ鎖サレ又ハ埋沒セラレタルモノ多ク加フルニ瀬戸ノ海峽ハ浮石ノ爲メニ數日間ハ全ク閉塞セラレ救助船ヲ出スコト能ハザリキト實際此上ヲ徒步シテ安全ニ對岸ニ達シタルモノアレドモ又不幸ニシテ沈没シタルモノモアリキ死者合計ノ届出ニハ百五十三人トアリ或ハ百五十人若クハ百四十八人ト計上スルモノアレドモ事實ハ更ニ之レ以上ニシテ恐ラクハ二百人ニモ達シタルモノナルベシ蓋シ當時幼年者ニシテ戸籍上届出ナキハ殆ンド一般ニシテ隨ツテ此死者ハ前掲ノ數ニ含マレザルベケレバナリ

安永噴火後ニ起リタル現象中特ニ著シキヲ本島ノ東北數町

乃至半里ノ距離ニ在ル海底ヨリ數多ノ島嶼ヲ涌出セシメタルコトナリトス即チ大噴火開始後二週間目（十月十四日）ニ海岸ニ近ク一番島ヲ現出（翌年七月一日沒ス）シタルヲ初トシ翌十五日ニハ二番島、十一月六日ニハ三番島、十二月九日ニハ四番島、翌安永九年四月八日ニハ五番島（初メ二島ナリシガ五月朔日合シテ一トナル）、六月十一日ニハ六番島ノ甲、九月二日ニハ其ノ乙、十月十五日ニハ其ノ丙（後甲乙丙合シテ一トナル）ヲ次第ニ涌出セシメタリ此等ノ諸島ノ中最大ナルハ五番島即チ新島ニシテ現今此等ノ安永島中住民ヲ有スル唯一ノ島ナリ諸島ノ或ルモノハ海底ヲ傳ハリテ流下シタル鎔岩ノ隆起ニヨリテ生ジタルモノナルベク又或ルモノ特ニ新島ノ如キハ國分小島ノ如ク海底噴火ニヨリテ生ジタルモノナランカ蓋シ餘噴火中安永島噴火ニ屬スルモノハ記録ノ證スル所ナレバナリ

安永大噴火ハ最初ノ噴火後二十餘年ノ間ニ於テ十數回ノ餘噴火ヲ起セリ但シ初ノ四五年間ハ海底餘噴火ナリ左ニ之ヲ摘錄ス

安永九年八月十一日（一七八〇）夜燃島噴火ス夜九ツ時分ニテ候哉燃島炎揚ガル、初メ燃出ヅルハ替リナク、火煙何里トナク、煙ノ中ニ光物アリ、且ツ大音ス、初メ燃出ヅルト同時ニ浪アガルコト三丈許、小池濱邊二丈許、白濱村ノ者共相逃シ可申處、間モナク靜ニ相成ルニヨリ無其儀、砂島大キク相成候（上山一藏）

ルコトナリトス即チ大噴火開始後二週間目（十月十四日）ニ海岸ニ近ク一番島ヲ現出（翌年七月一日沒ス）シタルヲ初トシ翌十五日ニハ二番島、十一月六日ニハ三番島、十二月九日ニハ四番島、翌安永九年四月八日ニハ五番島（初メ二島ナリシガ五月朔日合シテ一トナル）、六月十一日ニハ六番島ノ甲、九月二日ニハ其ノ乙、十月十五日ニハ其ノ丙（後甲乙丙合シテ一トナル）ヲ次第ニ涌出セシメタリ此等ノ諸島ノ中最大ナルハ五番島即チ新島ニシテ現今此等ノ安永島中住民ヲ有スル唯一ノ島ナリ諸島ノ或ルモノハ海底ヲ傳ハリテ流下シタル鎔岩ノ隆起ニヨリテ生ジタルモノナルベク又或ルモノ特ニ新島ノ如キハ國分小島ノ如ク海底噴火ニヨリテ生ジタルモノナランカ蓋シ餘噴火中安永島噴火ニ屬スルモノハ記録ノ證スル所ナレバナリ

同九年十月四日（一七八〇）燃島噴火ス。夜四ツ前ニテ候ヤ燃島炎アガリ、光物有之、大音聞ヘ、海大ニ鳴リ、大浪アガリ、無間靜ニ相成ル（上山一藏）

天明元年三月十八日（一七八一）燃島噴火ス。晝七ツ頃元高免村ノ前ニ出來タル島燃上リ、津浪大ニアガリ浦ノ前へ白濱村ヨリ薪採リニ參リ居リシモノ、舟打破リ、濱近ニ居リシ男五人女一人波ニ引カレ相果タリ、此處ニ漁獵セシ谷山和田濱ノ丸木舟三人乗、四人乗ノ二隻覆没ス、三人ハ死骸上リ、四人ハ行衛知レズ、小池村ノ濱ニ高サ七八間程ノ浪上ルコト十度ナリ、又海中ヨリ泥火石上ルコト數不知、白濱村ノ上ヨリ黒神瀨戸村マデ潮揚ゲ、泥交リノ雨トナリテ降ルコト夥シク、泥ノ積モルコト一尺許ナリ、松浦村ヨリ元高免村大燃崎ノ邊ヘ庭松取リニ行キシモノ燃ニ遇ヒテ三人乘組ノ中一人行衛知レズ、二人ハ漸ク助カリ、半死半生トナル（上山一藏）

同元年四月八日（一七八一）燃島小噴火（島津侯）

同元年十二月五日（一七八二）燃島小噴火。晝七ツ時元高免村ノ沖燃上リ、小池ヨリモ夥シク見ユ（上山一藏）

同三年八月七日（一七八三）櫻島嶽大ニ噴火シ、灰砂ヲ雨ラシ遠ク京師ニ及ブ（地學協會報告）

（按ズルニ此記事ノ出處詳ナラズ若シ果シテ事實ナラバ櫻島本島ノ餘噴火ノ先驅ナルベキカ）

同五年十月十九日（一七八五）北嶽東北腹ノ新噴口ヨリ噴火

ス。夜九ツ過後平以前ノ燃跡邊ヨリ燃出レドモ間モナク
靜マル、瀬戸村ニハ灰降リ、牛根垂水ヘ相迦シ、黒神村ハ

輕石少シク降レドモ相迦サズ、作方障ナク、怪我人ハ無之
(上山一藏)

寛政二年六月十八日(一七九〇)本島噴火。夜九ツ時御嶽大
ニ鳴ル十九日八ツ時分御嶽大ニ鳴レドモ煙ハ見エズ、雨降

ラズ、霞掛リテ絶頂相分ラズ、十九日ヨリ二十三日マデ灰降
ルコト晝夜止マズ、煙立ツコト限ナシ、島中西瓜煙草残ラ
ズ大痛ミ(同)

寛政三年八月十四日(一七九一)本島噴火。晝七ツ時御嶽燃
エ、煙立チ強ク鳴ル、西風吹キ前平(櫻島ノ西側面)ニ灰
降ル、後平(東側面)黒神邊ハ日中全ク夜ノ如シ、然レド
モ別ニ障ナシ、最初ノ燃ノ時ノ通リ、黒煙卷上ゲ夥シク見
ユレドモ逃ル程ニハナシ(同)

寛政六年(一七九四)連年櫻島燃止マズ、四五月ノ頃風ニ隨ヒ數
十里間大ニ灰降ル、今秋萬穀大ニ實ル(同)

寛政九年(一七九七)夏大饑饉ニテ大麥一俵ニ付一貫五百文、粟
一俵ニツキ一貫六百文、米一斗ニ付七十八貫文ナリ、櫻島
ナレドモ、外郷ハ諸作十分ナリ(同)

寛政十一年二月二十二日(一七九九)ヨリ嶽少々煙立チ灰降
ル、後平ニハ多ク灰降リテ麥作痛ム二十七日ヨリ夥シク響
強ク夜晝不止、三月七日ニ至リテ止ム(同)

享和二年(一八〇二)マデ風ニ依リテハ近郷灰砂降候得共翌年春

ノ頃ヨリ灰降止ム(清尾利)

文化五年(一八〇八)于今折節大燃小燃灰降ルコト、春ヨリ夏マ
デ東風ニハ鹿兒島中遠ク雷鳴、稻妻見ユルコト間々有之(同)

安永噴火被害調査(藩主ヨリ幕府ニ提出シタルモノ)
第一回ノ分(大噴火約一月後ノ調)

一 高二萬三千五百六十三石餘 内譯(一萬五百二十石餘
一 潟家 五百軒
一 堂社 十二字
一 寺 二軒
一 米雜穀 七萬石餘
一 小船 十二艘
一 死人 百五十三人 内(男)七十九人
一 死馬 二百八十五疋
一 枯樹木 十二萬九千五百本
第二回ノ分(前回漏及ビ新損害翌安
永九年五月初マデノ調)
一 高一萬五千六百五十石七斗六升餘(當損)

死牛 百三十五疋
死馬 千五百七十六疋
海底五十尋ヨリ七十三尋程有之候海中ヘ左ノ通島燃出候
一 流五十七間、横五十間、高九尺
一 流九十五間、横五十八間、高五丈四尺
一 流二百二十間、高八十四間、高六丈
一 流五十二間、横四十間、高一丈八尺餘
一 流百七十間、横六十間、高右同

一 流百四十間、横百十間、高六丈

但此島當分燃最中ニ御座候

第三回ノ分(前回後ヨリ同)
(年八月マテ調)

一 高六百七十石餘(永損)

一 高一萬七千六百四十七石餘(當損)
米三千三百六石餘(救米)

一 汐揚屋敷 四百十七ヶ所

一 汐揚家 七百九十八軒 内(百六十八軒)
一 土手道 一萬三千百八十間餘
一 石垣 千二百三十七間餘

六百三十軒 潰

半潰家

一 川筋 六百七十間餘

一 川筋 千三百四十九間

第四回ノ分(天明元年三月十八日)
(海底餘噴火ノ調)

去々年以來御届申上置候私領大隅國大隅郡櫻島燃ノ儀漸々相鎮方ニ候處先達而
海中へ燃出候島近邊當三月十八日俄ニ燃出最初之燃跡且其邊海中ヨリモ總體一
同ニ如初發夥敷燃立致地震等砂石灰降埋死失等別紙之通御座候其後少々勢モ薄
候處右同所又々致鳴動今月八日燃出候得共無程火勢薄相成候云々
(別紙)

一 死人 八人

一 行衛不相知者 七人。

一 怪我人 一人

一 船大小 六艘

第五回ノ分(前回届漏及四月八日)
(海底餘噴火ノ調)

一 高千五百三石餘(當損)

一 米雜穀 一萬九千百八十石餘

一 汐揚屋敷 二百七十三ヶ所
一 汐揚家 六百七十二軒

一 潰家 二十三軒

一 石垣 千百九十間

一 川筋 千六百二十五間

一 橋 六ヶ所

以上ノ記事ニヨリテ櫻島ノ安永大噴火ハ著シキ前兆ヲ以テ始
マリ初ノ兩三日間ハ勢力最モ旺盛ナリシガ爾後次第ニ鎮靜セ
リ但シ二週間目ヨリ海底ニ島嶼ヲ涌出セシメ而モ數年ノ間ハ
専ラ此方面ノ餘噴火ヲ繰返シ而シテ陸上ノ新噴火孔ヨリノ餘
噴火ハ最初ノ噴火ヨリ四年或ハ六年ノ後ニ起リ始メ爾後數年
置キニ小活動ヲ繰返シ最初ヨリ凡ソ三十年間ハ時々灰ヲ降ラ

セリ此等ノ餘噴火ノ後櫻島ハ全ク休眠ノ状態ニ入り、以テ大
正ノ大噴火ニ及ビシモノナルガ日本災異志ニハ安政七年二月
(延ト改元ス)噴火ヲ掲記シ日本噴火志ニモ萬延元年(一八六〇)噴火ヲ
掲ケアリ但シ後者ハ疑問トシテ引用セラレタリト見ユ按ズル
ニ此件ハ次ノ温泉噴出ヲ誤判シタルモノナルベシ高隈ハ大隅
國中部ニシテ櫻島ト直接ノ連絡ハ之レ無カルベシ該記事ハ左
ノ如シ

安政七年二月大隅國高隈郷高隈村水無山湯湧出ス。同年七月
大隅國垂水郷海瀬村飛岡濱温泉湧出ス

七 大正三年(一九一四)一月十二日大噴火

此ノ大噴火ハ豫知セラルベキ性質ノモノナリシコトヲ左ニ
概説セントス

(二)沿革上櫻島ハ百年或ハ其以レ上ノ間隔ヲ以テ噴火ヲ繰

返セリ然ルニ安永大噴火後此年ニ至ルマデ百三十五年ヲ經過シ近年ニ至リテハ噴氣ノ勢力モ殆ンド消滅シ次期ノ噴火ノ勢力蓄積成レルニ似タリ

(二) 櫻島竝ニ其ノ附近ニ於ケル地盤近年ニ至リテ著シク隆起セリ即チ櫻島横山邊ニ於テハ六七十年前迄ハ海岸ニ接シタリシ道路が次第ニ汀線ヲ遠ザカリテ二十間モ隔タレルニ至レルアリ又對岸ナル薩摩大隅ニ於テハ甲突川、別府川、網掛川等ニ於テ潮水ノ上レル界限ノ次第ニ下流ニ下リシコトヲ注意シ甲突川ノ川口左岸ニ於テハ大潮ノ際潮水溢レテ堤防ヲ越エ鹽屋ノ水田ニ侵入セルコトアリシモ最近數十年ハ全ク此事ナキニ至レリ(但シ噴火後地盤沈降シテ此ノ現象ヲ復活セリ)是レ地殼内ノ壓力漸次ニ增加シタル結果ナルベシ

(三) 最近ニ於テ富士火山系特ニ霧島火山系活動ヲ始メ近クハ霧島山ニ於テ數回ノ爆發(大正二年十一月八日、十二月九日及ビ三年一月八日)アリキスクノ如ク兩火山系ノ活動期ニ於ケル櫻島ノ爆發ハ安永年度ニ於テモ經驗セラレタル所ナリ

(四) 數ヶ月以前ヨリ山麓附近ニ火山性地震ノ發生アリキ即チ真幸地方ニ於ケル地震群ハ大正二年五月十八日以降、同島ノ西方約八里ノ位置ニ於テハ同年六月二十九日ト三十日トニ於テ強震ヲ起シ多少ノ損害ヲ釀セリ加之爆發前數十日

(五) 噴火前數日ヨリ山體ニ火山性地震ノ頻繁ナル發生アリキ即チ櫻島ニ於テハ一月十日ヨリ地震ヲ感ジ始メ十一日ニ至ツテハ次第ニ頻繁トナリ此時島民ハ避難シ始メタリ鹿兒島市ニ於テモ十一日午前三時頃ニ弱震一回ヲ起セルヲ始メトシテ引續キ頻繁且ツ強勢トナリ鹿兒島測候所ノ普通地震計ハ十二日午前六時マデニ三百三十七回ノ震動ヲ記録シタリスノ如キハ文明ノ大噴火ニ於テモ亦安永ノ大噴火ニ於テモ經驗セラレタル所ニシテ恐ラクハ櫻島大噴火ノ著シキ前徵ノ一トスルコトヲ得ベシ

(六) 噴火前ニ山麓又ハ山腹ヨリ冷泉或ハ溫泉ヲ涌出セシメ又在來ノモノニ變調ヲ起セルコト即チ十二日午前八時半頃ニハ脇村及ビ有村ノ海濱ヨリ熱湯ヲ噴出セシメ有村溫泉ハ熱湯ヲ三尺ノ高サニ吹キ上グルニ至レリスクノ如キハ安永度ニ於テモ經驗セラレタル所ナリキ

(七) 大爆發前ニ輕微ナル噴煙ヲ起セルコト即チ十一日午後四時半頃ニハ前平ノ新噴火孔タルベキ位置ヨリ輕微ナル噴煙ヲ發シ目擊者タル奈良原幸彦氏ハ之ヲ寫生セリ十二日未明ニ於テハ櫻島ハ雲霧ニ鎖サレシモ時々白煙ノ立チ騰レルコトヲ注意シ得ラル、ニ至リ午前八時頃ニ至レバ南岳ノ頂

ノ間ニ於テハ島ノ附近ヨリ時々微弱震ヲ起セリ此最後ノモノハ鹿兒島測候所ノ調査ニヨレバ當時其ノ震原詳ナラザリシモ後日ノ調査ニヨリテ其ノ櫻島地震タルコト判明セリトゾ

上ヨリ饅頭形ノ白煙ヲ拋出スルヲ見ルニ至レリ

櫻島ハ右ノ順序ヲ追ヒ遂ニ十二日午前十時ニ至リテ前平四合目ノ邊ヨリ大爆發ヲ始メ尋イデ約十分ヲ經テ後平ニ於テモ同様ノ噴出ヲ始メ此地方ニ於テハ前古未聞ノ大變災ヲ起スニ至レリ此ノ以後ノ狀況ハ多クノ火山爆發ニ於テ見ルガ如ク噴煙空ヲ蔽ヒ天日爲メニ暗ク爆音耳ヲ聾シ電光石火相搏チ壯絶ノ光景名狀スベカラズ地震ハ數ニ於テ次第ニ減少セシモ同午後六時半ノ半破壊的地震ハ家屋石垣ヲ倒シ斷崖ヲ崩シ鹿兒島市及ビ其ノ他ノ地方ニ於テ二十九名ノ死者ヲ出セリ是ニ於テ櫻島ノ逃避者ニシテ水ニ溺レシモノヲ加ヘテ死者合計五十八名ヲ算スルニ至レリ翌十三日ニ至レバ一大爆發ト共ニ鎔岩ノ流出始マリ火石飛散シテ附近ノ部落ヲシテ灰燼ニ歸セシム鎔岩ハ其後次第ニ流下シテ村落ヲ埋メ餘勢海ニ入り西ニ於テハ烏ケ島ヲ埋没シ東ニ於テハ瀬戸海峡ヲ閉塞シテ櫻島ヲシテ全ク大隅ノ一半島タラシムルニ至レリ噴火ノ旺盛ナリシハ最初ノ數日間ニシテ爾後次第ニ怒勢ヲ減ジ凡ソ旬日ニシテ猛威ヲ失ヒ曩ニ急遽逃避セル鹿兒島市民モ此ニ至ツテ漸ク歸家スルニ至レリ然レドモ災害ヲ最モ多ク惹起セシハ櫻島東部ヨリ其東方大隅中部ニ於ケル降灰ノ害ナリトス但シ土地沈降ニ起因セル沿岸ノ水害モ亦輕々ニ看過スベキモノニアラズ凡ソ此種ノ調査ニ就イテハ各方面ノ權威者皆獨特ノ見地ニ據リテ幾多ノ有益貴重ナル報文ヲ提供セリ即チ

地質學者トシテ小藤博士ノ論文（東京帝國大學理科大學紀

要第三十八冊第三編）アリ又地震學者トシテ大森博士ノ著（震災豫防調查會紀要第八冊第一、二、三號）アリ又長谷川理學士ノ概況報告（氣象要覽臨時增刊、大正三年三月號）アリ建築學上ヨリハ内田工學士ノ報文（震災豫防調查會和文報告第八十號）アリ又鹿兒島縣立農事試驗場ノ編纂ニ係ル「櫻島噴火ト農業」、九州鐵道管理局編「大正三年櫻島噴火記事」、陸地測量部編「櫻島爆發後ニ於ケル鹿兒島縣下地形ノ變狀及地盤ノ變動」ハ何レモ専門的ニ有益ナルモノナリ若シ夫レ一般的記事ニ至リテハ鹿兒島新聞記者十四名ノ共纂ニ成レル櫻島大爆震記、東孤竹氏著櫻島大噴火記、九州日本新聞社發行櫻島大爆發實記等アリ尙ホ畫帖寫眞帖等ノ出版少シトセズ若シ之ニ鹿兒島縣廳ニ於ケル委員組織ノ下ニ編述セラレントスルモノヲ加ヘナバ殆ド全ク遺憾ナカルベシ當時谷口鹿兒島縣知事ニヨリテ報告セラレタル被害（大正三年三月調）ノ計數左ノ如シ

鎔岩下ニ埋没セラレタル戸數

西櫻島村 千百七十一戸（赤水二八五、横山四一五、小

池二一九、赤生原一五二）

東櫻島村 四百十戸（瀬戸二二七、脇六〇、有村一二三）

燒失戸數

西櫻島村 二百六十九戸（武二二三、藤野四〇、西道一七）

東櫻島村 百九十六戸（黒神一九六）

降灰ノ場所

櫻島 黒神五尺乃至六尺、高免一尺五六寸、白濱一尺乃至一尺三寸、大隅ノ中ニテ櫻島ノ前記場所ト同様ナル

モノ 牛根、百引、高隈、市成、野方、恒吉、東西志

布志

以上ノ外地震其他ノ災害ヲ加ヘテ鹿兒島縣下ニテノ損害價格三千七百十六萬餘圓トナリ此中櫻島ノ分ハ七百二十萬圓ニ當ル

實際災害ノ最モ著シカリシハ櫻島ナリシト雖モ面積比較的ニ狭キガ爲メニ損害ノ合計ハ大隅内陸ノ方却ツテ大ナリキ今農

耕地ニツキ鴨下、大工原兩農事試驗場技師及木下農務商技師ガ各自被害地ヲ踏査シタル所ト鹿兒島縣廳ノ實地調査トニ基ヅキテ計算シタル所ヲ舉グレバ左ノ如シ

一、鎔岩下ニ埋沒セラレタル土地ハ近ク利用ノ途ナキモノ

トス

二、降石降灰ノ爲メニ埋沒セラレタル土地ノ價格減損金二千八百九十八萬五百三十六圓

三、海水位變位ノ爲メニ生ジタル損害

前記第二項ニ對シ復舊補助費トシテ見積リタル價額金二百六

十萬二千九百三十九圓七十四錢五厘ニシテ之ヲ甲乙丙丁ノ四種ニ分テバ左ノ如シ

甲、降灰除去費用金百六十萬九千六百三十一圓九十九錢五

厘

内 譯

乙、潰レ地代金三十五萬二千二百五十一圓七十五錢

櫻始島郡	六九六、六〇	二八八、三六九、四七五
嶋良郡	一、五七七、四九	一六六、一五九、〇〇〇
肝屬郡	四、九五五、一〇	七五五、五六四、三三〇
合計	一、八〇二、九〇	三九九、五三九、二〇〇
	九、〇三二、〇九	一、六〇九、六三一、九九五

櫻始島郡	六八、六一	六六、四〇六、五〇〇
嶋良郡	四〇一、四〇	一八八、一三三、五〇〇
肝屬郡	二一五、五八	九七、七三三、七五〇
合計	六八五、五九	三五二、二五一、七五〇

(備考) 櫻島ニ於テハ降灰石ヲ直チニ海底ニ沈ムルモノトシ潰レ地ヲ生ゼ

ザルコト、ス

丙、酸性中和剤灰石代金三十三萬四百八十一圓

丁、農村宅地復舊費三十一萬五百七十五圓

前記第三項海水位變更ノ爲メニ生ジタル損害ニ對シテハ噴火後徐々ニ始マリタル事項ナリシヲ以テ其損害ハ前記ノ調査中ニ含マレズ今此水位變更ノ實況ヲ左ニ概説セントス

鹿兒島灣ノ沿岸特ニ櫻島ヨリ一二里南ニ距レル東西線ノ以北ニ於テ海水位ノ變更ヲ氣附キタルハ噴火後三週間目位ヨリノ

コトニシテ此際東部噴火口ヨリ流出シタル鎧岩ハ瀬戸海峽ヲ閉塞シタリシヲ以テ俗説ハ此閉塞ヲ以テ直チニ海水位上昇ノ原因トナセリ但シ水路ノ狹窄ハ内灣ニ於ケル潮汐ノ振幅ヲ減小スル原因トハナリ得ベキモ平均水位ヲ高ムル原因トナリ得ベカラザルコトハ論ヲ俟タズ余ハ其實況ヲ視察セントノ目的ヲ以テ三月上旬數日間調査スル所アリキ此時鹿兒島縣土木課ニテハ明治三十六七年港内量水標ノ示セル所ト當時ノ觀測トニ於テ數寸ノ差異アルノミニテ著シキ變化ヲ注意セズ余モ其觀測表ヲ一見シテ然カ思惟シ其結果ハ荒田、花倉、濱市、小村等ニ於ケル調査即チ潮ノ高マリ二三尺ニ上ルコトニ調和スト思ヘリ凡ソ海水位ノ變化ハ其平均水位ニ於ケルモノト潮汐ノ振幅ニ於ケルモノトニ區別スルコトヲ得ベシ而シテ櫻島噴火ノ影響ヲ除外シテハ其平均水準及ビ振幅ニ於ケル變化ヲ興フルモノニ天體ノ外力アリ氣象ノ原因アリ此中天體ノ外力ニ關シテハ振幅ニ對シ半日、一日、半太陰月、一太陰月、半年一年、九年及び十八年週期等アリ又平均水位ニ對シテモ一年九年、十八年週期ナルモノ、外ニ不規則又ハ非週期性ナル年年變化アルベシ觀測ノ材料極メテ乏シキモ九年前即チ明治卅八年同月頃ノ水位ニ比較スルトキハ稍々妥當ナル解釋ヲ得ベキ望アリ即チ二月後半ニ於テ水位平均四寸五分ノ上昇ナリ又三月ニ於テハ六寸、四月ニ於テハ三寸七分ノ上昇ナリ又振幅ニツキテハ二月十一日、三月十二日ナル望ハ二月廿五日ナル朔ヨリモ一尺大ナラザルベカラズ一月十二日ノ望ハ變災ノ當

日ニシテ誰シモ其大サニ注意スルモノナカリシナランサレバ二月十一日又ハ三月十二日ニ至リテ振幅ハ太陰太陽ノ關係ニヨリテ自ラ増大スベキニ或ル原因ノ爲ニ更ニ平均水準ノ増位ヲ加ヘ從ツテ潮汐ノ異常ナル上昇ヲ感ジタルモノナルベシナリトシ之ヲ異常ノ全部ナリト思惟セリ少クモ鹿兒島港ニ於テハ然ルベシト思ヘリ此ノ如キ變化ハ地震ニ伴フ土地ノ陥没ニヨルカ噴火ニヨリ固體氣體ノ放出ニ從ヒ地下張力ノ減小ヲ來タシ隨ツテ地盤ノ低下ヲ起セシモノナルカ余ハ恐ラク前者ニアラザルベク或ハ後者ニ屬スルナランモ前記ノ如キ數寸ノ水準變位ナラバ海水溫度ノ增加ニヨリテ説明シ得ベキコトヲ思惟セリ實際鹿兒島灣内ノ水溫（水面ニ近キ海水ノ溫度）ハ灣外ノ沖合ニ於ケル水溫ニ比較シテ例年此等ノ季節ニ於テ華氏四五度低キニ反シテ本年ハ此關係全ク顛倒シ灣内ノ水溫却ツテ華氏四五度高キハ灣内出入ノ船舶ノ經驗セル著シキ事實ナリキ故ニ此ノ水溫ノ異常ノミニテモ海水ノ平均水位ニ數寸ノ差ヲ生ジ得ベキコトヲ指摘シタリ然レドモ之レニ無關係ニ陸地ノ水準測量ヲ急速ニ行ヒ以テ土地ノ水準變動ヲ實測シ若シ此ノ爲メニ發見セラルベキ土地ノ低下ガ海水位實測ニヨリテ發見セラレタルモノニ一致セバ強ヒテ水溫ノ關係ヲ説明ニ加フルノ要ナキモ若シ土地ノ低下ガ海水位ノ上昇ヨリ減ジテ尙ホ差違アラバ此殘量ハ恐ラク年々ノ不規則變化ト共ニ水溫ノ變化ニヨリテ説明セラルベキモノナラントノ意見ヲ有セ

リ歸京後陸地測量部ニ杉山技師ヲ訪ヒ水準測量ノ何時行ハルベキカヲ問フ所アリシニ測量部ノ豫定ハ當年末ナラントノコトナリシヲ以テ余ハ其學術上ノ點ヨリモ又鹽田、水田ノ經營及ビ護岸工事ノ地方產業行政上ヨリ右調査ノ急速ヲ要スルモノニシテ遲クモ來ル初秋ノ水位上昇、大風發生ノ季節前ニ一切ノ調査ヲ結了セラルベキコトヲ希望セシニ同技師モ事情ヲ諒トシ大ニ斡旋セラル、所アリテ遂ニ夏季實測ヲ遂行セラルコト、ナリタリ是ハ勿論本會ノ請求ヲ陸地測量部ノ容ル、所トナリシニ據ルモノナレドモ其遂行ニツキテハ此機會ヲ利用シテ杉山技師ノ盡力ヲ謝セザルベカラズ

余ガ曩ニ鹿兒島縣土木課ニ於テ得タリシ水位觀測ノ材料ハ中間ニ標準一尺變更ノ注意アリシモノナリシガ當時之氣附カザリシコトヲ發見シ爲メニ真相ハ前記セルモノヲ訂正セザルベカラザルニ至レリ即チ噴火後海水位ノ上昇ハ之ヲ九年前（明治三十八年）ノ同月ニ比較スルトキハ次ノ如シ

大正三年二月後半

一尺四寸五分

同 三月 一尺六寸〇分
一尺三寸七分

此海水位ノ上昇ノ全部或ハ其大部分ハ最早地盤ノ低下ニヨラザレバ説明シ能ハザル分量トナレリ而シテ夏季ノ水準測量ハ地盤ノ低下ヲ證明シ又同年七月以後ハ一層地盤ノ低下ヲ促シ同年末ニ至リテハ海水ノ上昇遂ニ三尺ヲ算スルニ至リシハ大森博士ニヨリテ詳論セラレタル所ナレバ余ハ茲ニ贅言セズ但

シ余ハ斯ノ如キ水準變更ニ九年週期及ビ十八年週期ノ水準變更ヲ加ヘテ講究シタル所アレバ他日項ヲ更メテ再說スル所アルベシ、水準測量ハ初メ大正三年七八月ノ兩月ニ於テ施行セラレタルガ材料十分ナラザリシガ爲メニ更ニ同年十二月ヨリ翌年五月マデニ於テ鹿兒島灣ノ沿岸ヨリ東北ハ日向國細島ノ檢潮儀觀測點ニ至リ又西及ビ北ハ薩摩ノ西海ヲ經テ肥後國佐敷ニ及ビ精測ヲ遂ゲラレタリ其結果ハ本會記要第八冊第二卷ニ大森博士ノ精細ナル論評アリ今同博士ノ調査ニ據ルトキハ土地ノ沈降ハ凡ソ一立方糸ノ立積ニシテ鎔岩、灰其他一切ノ噴出物ノ全立積二・二立方糸ノ凡ソ半分ニ當ルベシ

水準點真高一覽圖（前記ノ報告第二十九圖版）ヲ見ルニ土地ノ沈降五十糰又ハ三十糰ナリシ線ハ櫻島ノ北部白濱ヨリ一里位ノ點ヲ中心トシテ圓ニ近キ橢圓狀ヲナセドモ十糰線及ビ五糰線ハ特種ノ形狀ヲ有セリ即チ北東及ビ西方ニ於テハ中心ヨリ離ル、コト僅小ナリト雖モ南方及ビ北々西ニ向ツテハ頗ル擴張シ水準點ノ缺ケタル故ヲ以テ南方ハ其ノ境界ヲ詳ニセザレドモ西北ニ於テ十糰線ハ薩摩ノ北海岸タル米之津附近ニ達シ五糰線ハ尙ホ之ヲ越エテ遠ク延長セルガ如キ傾向ヲ示セリ惟フニ是ハ觀測ノ不精密ニ基因スト云フガ如キモノニハアラズシテ實際ノ事實ヲ示セルモノナルベシ今此方面ノ地震帶ヲ察スルニ鹿兒島灣ヲ南北ニ貫ケルモノハ霧島ノ西方ヲ過ギ此ノ地方ヲ曲リ目トシテ次第ニ北々西ニ折レ以テ薩肥ノ國境ヲ通過ス而シテ地質構造及ビ火山溫泉ノ配列モ亦之ニ調和ス是

ニ由テ之ヲ觀レバ土地沈降ノ軸線ハ前記ノ地震帶又ハ火山脈ニ接觸ヲ保テルコトヲ示スモノニシテ之ヲ基礎トシテ考フルトキハ沈降ノ立積モ前記大森博士ノ計算ニ比較シテ著シキ超過ヲ示スベシ今試ミニ大森博士記入ノ等沈降線中三十粍線ヲ少シク北西ニ擴グ又十粍線ヲ米之津附近ニマデ擴張セシムルトキハ沈降立積ハ一・八立方糸トナリ寧ロ噴出立積ニ近ヅクコトヲ注意スベシ但シ觀測數少キ今回ノ如キ場合ニ於テ漫然想像ヲ加ヘテ當否ヲ論ズベキモノニアラザルベク唯茲ニ沈降區域ガ地震帶ト密接ナル關係アルベキコトヲ指摘スルヲ以テ足レリトス

噴火ニ伴ヘル地盤ノ低下ハ鹿兒島灣ノ沿岸ニ於テ水田、鹽田ノ損害トナリ尋デ當年夏季以降ノ沈下進行ト大風トノ爲メニ損害一層擴大セリ左ニ鹽田被害ノ概況ヲ掲グ

郡市別	被害鹽田	被害 穫爲 穫	被害價格	
			大正二年 度製鹽高	大正三年 度製鹽高
鹿兒島市	四十五町	六四〇〇斤	七糸六円	八五〇〇斤
肝屬郡	二五〇〇	三九〇〇斤	八六六	一四二〇八
姶良郡	三五八〇	四三九〇〇斤	三六四〇〇	二九五〇〇
計	三五三〇	五七三〇〇斤	五三四元	一〇七九〇〇
			四九六〇八	

此項ヲ終ルニ臨ミ鹿兒島市役所ガ大正五年十二月市内南泉院馬場ニ建設シタル櫻島爆發記念碑ノコトヲ附加スルモ無益ノ業ニアラザルベシ是レ蓋シ災害輕減法ヲ後世ニ遺スモノタル

ノミナラズ余ハ此事ヲ當事者ニ勸誘シタルコト、碑文ノ原案ヲ草セルコト、ノ縁ヲ有スルモノタレバナリ左ニ碑文ヲ掲グ
大正三年一月十二日櫻島大ニ爆發ス之ヨリ先我邦ノ火山相次デ活動シ霧島數々噴火セリ識者謂フ櫻島亦警ムベシト一日曉來地震アリ時ヲ經テ頻々且激ヲ加ヘ又烟氣山腹ヨリ騰ルヲ見ル衆相危ブム翌朝島内處々溫泉沸キ冷泉逆ル島民疑懼遂巡老幼マヅ避難ス午前十時ニ至リ前後ノ山腹相次デ大ニ爆發シ忽チニシテ黒烟天ニ漲リ飛石光芒ヲ曳イテ四散シ爆音地動閃電雷鳴耳ヲ聾シ目ヲ眩ゼシム市民先ヲ争フテ逃避ス午後六時俄ニ激震アリ家屋ヲ毀シ石壁ヲ倒シ斷崖ヲ崩シ爲メニ壓死セルアリ倉皇海ニ投ジテ溺死セルアリ天神ケ瀬戸ノ崩壊ノ如キ一時ニ十名ヲ斃シ其數六十二名ニ及ベリ翌十三日夜又大爆發ト共ニ一大火柱ヲ天半ニ沖シ空ヲ燒キ波ヲ照ラシ赤熱ノ熔岩噴騰シテ附近ノ部落灰燼ニ歸シ全山焦土淒絶殆ンド名狀スベカラズ災異以來人心惄々流言百出毒瓦斯ノ害ヲ傳ヘ津浪ヲ叫ビ狼狽狂奔纔ニ身ヲ以テ逃レ難ヲ近郡田郊ノ間ニ避ケ却テ自ラ禍ヲ大ニセルアリ光景慘ヲ極ム是ニ於テ縣市當局部署ヲ定メ有志ト共ニ救濟ニ力メ灣内汽船ヲシテ難ニ赴カシメ以テ多ク事ナキヲ得此間歩兵第四十五聯隊ハ士卒ヲ配シテ市中ヲ警メ佐世保鎮守艦隊亦來航シ以テ變ニ備フ十六日大森理學博士臨檢シテ市ニ危險ナキヲ説キ知事亦告諭スルアリ市ハ特ニ吏員ヲ各地ニ派シ避難者ヲ慰撫セリ旬日ニシテ爆勢漸ク衰ヘ人心稍安シ而

モ餘怒容易ニ收マラズ灰砂濛々屋ヲ埋メ田ヲ沒シ大隅ノ中

部不毛ノ地トナル方十數里ニ及ビ熔岩東ハ有、脇、瀬戸西ハ横山、赤水、小池、赤生原ノ諸村落ヲ埋メ餘勢海ニ入り一ハ瀬戸ノ海峡ヲ塞キ一ハ島島ヲ沒シ遠ク海中ニ突入ス且

海水ノ激増ハ沿岸ノ田園ヲ海トナシ夏秋ノ候更ニ土地ノ沈降ヲ促セリ眞ニ桑滄ノ變モ啻ナラズト云フベシ 皇上乃チ

日根野侍從ヲ遣ハサレ又罹災御救恤金壹萬五千圓ヲ賜ハル

聖恩浩大須ラク銘記スベキ也爾來二周星噴煙漸ク鎮マリ山容依然民皆堵ニ安ンズ今ニシテ當時ヲ想ヘバ恍トシテ夢ノ

如シ之ヲ安永文明ノ噴火ニ比スルニ現象大差ナキニ似タリ

サレバ専門ノ學者豫メ櫻島ノ狀態ヲ講究シ有識ノ父老舊記ニ徵シテ變兆ニ鑑ミナバ今次ノ災異恐ラクハ豫知セヲレ禍ノ害亦幾分ノ輕減ヲ見シナラン既往ハ追フ可ラズ來者以テ戒

ムルニ足ル蓋百年ノ後又此ノ如キ爆發ナキヲ保セズ爲メニ概況ヲ記シテ不朽ニ傳フ庶幾クハ今回罹災ノ不幸ヲ弔シ併テ後世永ク追憶シ以テ未來ノ慘禍ヲ輕減スル資タラシメンコトヲ

以上記載セル所ニヨリテ櫻島火山ニハ次ノ如キ習性ノ存在ヲ認メ得ラルベシ

一、櫻島火山ハ百年或ハ數百年ノ長期間隔ヲ以テ大噴火ヲナス但シ大噴火ニ繼續スル餘噴火ハ一括シテ之ヲ本噴火ニ附屬スル活動ナリト見做スモノナリ

二、大噴火前長年月ニ亘リ櫻島竝ニ其四近ノ地盤次第ニ隆起シテ噴火スルニ及ビテ次第ニ沈降ス

三、大噴火ニ於テハ火山性地震ヲ數日前ヨリ頻繁ニ發生ス

四、噴火セントスルニ當リ先づ山麓ノ溫泉及ビ冷泉ヲ興奮士火山系ノ活動ト相伴フコト多シ

五、大噴火ハ霧島火山系ノ活動期ニ起ルコト此活動期ハ富

士火山系ノ活動ト相伴フコト多シ

六、大噴火ノ順序トシテ先づ山腹四合目ヨリ輕微ナル白煙ヲ發スルコト

七、新噴火口ハ山腹四合目邊ヲ最高ノ場處トシテ山ノ中心附近ヲ貫ケル一直線ノ上ニ近ク排列スルコト

八、大爆發後一兩日ノ後ニ於テ新噴火口ヨリ鎔岩ヲ流出セシムルコト

以上ハ主トシテ文明、安永、大正ノ三大噴火ニツキ共通ナル性質ヲ列舉セルモノナルガ此外過去ノ大噴火ハ大抵餘噴火ヲ伴ヘリ大正ノ大噴火ハ其後既ニ五年ヲ經過スレドモ今ニ至ツテ此事ナキハ其時機尙早ナルガ爲メカ將タ遂ニ噴火スルコトナキカ大正ノ大噴火ハ鎔岩、灰砂ノ噴出過去ノ二大噴火ニ比較シテ遙ニ勝レリサレバ餘噴火ヲ起ス程ノ勢力ヲ餘サミル程、本噴火ニ於ケル勢力ノ消耗莫大ナリシモノナランカトモ思ハル、又齎ツテ考フルニ安永ノ噴火ニ於ケル初ノ三四年間ノ餘噴火ハ安永島若シクハ其近海々底ノ噴出ニ屬シ山腹ノ新火口ハ此間全ク靜謐ノ狀態ニアリ其最初ノ餘噴火ヲ起セシハ本噴火後四年若クハ六年後ノコトニ屬スサレバ大正三年ヲ過

ギシコト五年ナルニ當ツテ此間山腹新火口ガ全ク靜謐ノ狀態ニアルヲ見以テ今後トテモ同様靜謐ナルベシト推斷スルハ早計ヲ免レザルベシ兎ニ角猶ホ注意ヲ加フベキコトニ屬ス

丙 開聞岳

薩摩ノ南端ニ數個ノ火口アリ此中開聞岳ノミハ歴史年代ニ於テ一二回噴火シタルコトアレドモ最近一千年ノ間休眠ノ狀態ニアルモノナランカ其他ハ何レモ死滅セル火山ノ遺跡ニシテ唯硫氣蒸氣及ビ溫泉ニ其沿革ヲ語ルアルノミ

開聞岳ハ孤立セル一小火山ニシテ山體美麗ナル圓錐形ヲナシ山頂ノ平地廣サ百步ニ過ギズ其標高僅ニ九百二十四米ニシテ山體斯クノ如ク小ナルハ噴火勢力ノ發現モ著シカラザルニ因ルモノナルベシ噴火ノ沿革左ノ如シ

一、貞觀十六年三月四日（八七四）噴火

秋七月二日戊子地震、太宰府言、薩摩國從四位上開聞神山頂有火、自燒煙薰滿天、灰砂如雨、震動之聲聞百餘里、近社百姓、震恐失精、求之耆龜、神願封戶、及汚穢神社仍成此祟、勅奉封二千戶

（實錄）

（三代）

二十九日乙卯大宰府言、去三月四日夜、雷霆發響通宵震動、遲明天氣陰蒙、晝暗如夜、于時雨砂色如聚墨、終日不止、地積之厚或處五寸、或處可一寸餘、比及昏暮、沙變成雨、禾稼得之者皆致枯損、河水和沙、更爲盧濁、魚鼈死者無數、人民有得食死魚者或死或病（同上）

鹿兒島縣火山誌ニ曰ク貞觀二年三月二日薩摩國開聞神ニ從四位下ヲ加ヘ（三代）後六年ヲ經テ貞觀八年復從四位上ヲ授ク（類聚國史）後八年ニシテ貞觀十六年ノ嶽變アリ依テ神封二千戸ヲ奉ズ（實錄）後復八年ニシテ正四位下ヲ授ク（神階集）後三年ニシテ仁和元年ノ嶽變アリサレバ貞觀二年八年ノ兩度及ビ元慶六年ノ敍位モ亦非常ノ嶽變ニ依テ奉授セシモノナルベシ

二、仁和元年七月十二日（八八五）同八月十一日（九、二七）ノ噴火

仁和元年十月九日庚申、先是太宰府言、上管肥前國、自六月澍雨不降、七月十一日國司奉幣諸神、延僧轉經、十三日夜、陰雲晦合、間聞如雷聲、遲明見雨、粉土屑沙交下境內、水陸田苗稼草木枝葉皆悉焦枯、俄然降雨、洗去塵沙、枯苗更生、薩摩國言、同月十二日夜冥、衆星不見、砂石如雨、檢之故實、穎娃郡正四位下開聞神發怒之時、有如此事、國率潔齋奉幣、雨沙乃止、八月十一日震聲如雷、燒炎甚熾、雨砂滿地、晝而猶夜、十二日自辰至子、雷電砂降未止、砂石積地、或處高一尺以下或處五六寸以上、田野埋瘞、人民騷動。（實錄）

以上ヲ開聞岳ノ噴火トナスサレバ此火山ハ爾後千三十餘年ノ間全ク靜謐ノ狀態ニアルモノナルカ或ハ噴火ノ記事ヲ失ヒシモノナルベシ但シ開聞神社再興或ハ改築ノ次第ハ永享九年（一四三七）以來相傳フル所アリシヲ以テ此以前ノ記事ノ缺ケタルハ其所ナランモ若シ此以後ニ噴火アリシナランニハ記錄ノ徵

スペキモノ恐ラクハ存在スルニ庶幾カランカ而シテ曾テ其事ヲ注意セザルハ實際此後ノ四百八十餘年間ハ全ク休眠状態ニ在リシモノナルベク又此火山ノ外形簡單ニシテ火山作用ノ甚ダシカラザリシゴトヲ示スコトニヨリテモ前記事ノ噴火後恐ラクハ實際ニ靜謐ナリシモノナランカ

丁 謙訪ノ瀬島及ビ其他

霧島火山帶ヲ開闢岳以南ニ追跡スルトキハ硫黃島、口之永良部島、中ノ島、諫訪ノ瀬島、鳥島等ノ火山島ヲ得、硫黃島ハ主峯硫黃岳ノ硫蒸氣噴出ニ火山ノ殘骸タルコトヲ示シ、口之永良部島ハ往古ノ村落ノ噴火灰砂ニヨリテ埋沒セラレタル遺跡ナリト傳フル處（元村ト名ヅク）アレドモ此噴火ガ如何ナル年代ニ起リシカヲ詳ニセズ中ノ島ハ主峯燃巖ニ於テ硫氣及び蒸氣ノ噴出間断ナキモ噴火ト名ヅクベキ程ノ活動ハ既ニ終ヲ告ゲタルモノニアラザルカ鳥島ハ前記諸火山島中最南ニアリ山崎博士ニヨレバ寛政八年十月（一七九六）噴火シ噴灰ハ沖永良部島ニ及ビ該島ノ作物ヲ害セリ此時前月頃ヨリ地中ニ鳴動アリシヲ以テ居民豫メ其害ヲ徳之島ニ避ケタルモアリ次ニ最近ニ於テハ明治元年二三月頃（一八〇三）ニ弱勢ナル噴火アリ又日頃ヨリ噴煙增加シ四月五日正午頃ニ一回ノ鳴動ヲ感ズ十一

諫訪之瀬島ハ薩南諸火山島中最大ナル噴火勢力ヲ有セリ噴火ノ沿革左ノ如シ

一、文化元年（一八一三）噴火破裂シテ居民他ノ諸島ニ移住シ隨ツテ明治十六年ニ至ルマデ無人島タリ此時鎔岩ヲ島ノ南西ナル追尻及ビ水河方面ニ流出シテ海中ニ突出シタリ新噴火口ノ直徑ハ三百米ニ達ス（大森博士調査）

二、明治十年（一八七八）頃噴火（上）
三、明治十七年（一八八四）大噴火アリ鎔岩ヲ島ノ北東ナル作地方面ニ流出シテ海岸ニ達セリ此時ノ噴火口ノ直徑ハ約四百五十米アリ（上）

四、明治二十二年（一八八九）噴火ス名瀬ニ於テハ十月二日午前一時三十分頃東北ニ當リ遠雷ノ如キ響アリテ微震シ約十分間ヲ經テ砲聲ノ如キ響アリ之ニ引續キテ一分間震動シ其レヨリ強震三四回ニシテ屢々鳴動ス爾後十餘日間ハ一日ニ五六回宛ノ震動アリ漸次減少シテ十三日ニ至リ止ム當時諫訪ノ瀬島噴火ノ報アリタレバ是レ其影響ナリシナルベシ（上）
五、大正三年（一九一四）三月二十日噴火ス此日噴煙高ク鳴動盛ナリシガ翌朝七時附近ヲ航行中ノ汽船沖繩丸ヨリ望見セル所ニヨレバ鳴動淒ジク火焰ヲ五千尺ノ高サニ吹上グタリト
大正四年（一九一五）六月六日又噴火ス當時附近航行中ノ沖繩丸冲シ約三千尺ノ高サニ昇騰セリ噴火口ノ位置ハ最高峯ノ東方七合目位ノ箇所ニテ絶エズ遠雷ノ如キ音響ヲ發シ日没後

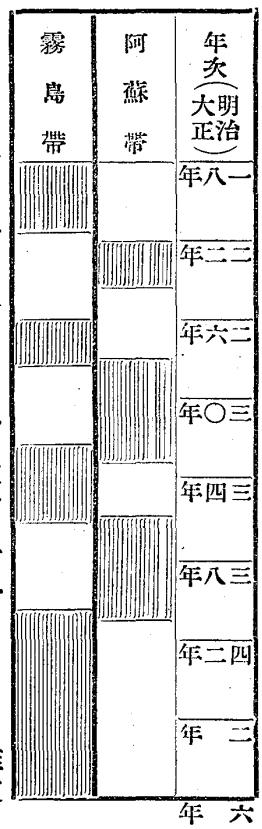
ハ火煙或ハ噴出シ約四五百尺ノ高サニ飛散シツ、アリ附近海上ニハ多量ノ降灰アリキト云フ

第四章 阿蘇霧島兩地震帶ノ活動關係

第一款 最近ノ地震噴火

明治十八年以來今日ニ至リ最近凡ソ三十年間ニ於ケル阿蘇及ビ霧島兩地震帶ニ於テ地震竝ニ噴火活動ノ狀況ヲ通覽スルニ兩地震帶交互活動ノ趨勢ハ此短期間ニ於テモ認メ得ラル、ニ似タリ但シ各帶ノ活動トシテハ主ナル火山ノ噴火ノミナラズ他ノモノ、活動竝ニ本支脈ニ於ケル地震發生ヲモ併セ考フルモノトス即チ明治十八年ヨリ同二十一年マデハ霧島帶ノ活動時期タリ次ニ二十二年及ビ二十三年ハ有名ナル熊本地震竝ニ其餘震ヲ以テ阿蘇帶ノ活動ヲ代表シ越エテ二十六年及ビ二十七年ニハ南薩知覽地震竝ニ其北方ニ連接シテ起リタル強震ニヨリテ霧島帶ノ活動トナリ次ニ二十七年乃至三十二年ノ阿蘇帶活動アリ三十二年乃至三十五年ノ霧島帶活動之ヲ繼ギ最近ニ至リテ阿蘇帶ハ三十五年乃至四十年ニ活動シテ爾來休息シ之ニ反シテ、霧島帶ハ明治四十年ヨリ大正五年ニ至ルマデ西薩地震、吉松及ビ栗野地方地震群、水俣地震霧島噴火櫻島大噴火ヲ以テ盛ニ活動シ其後一兩年間ハ兩者交駁ノ狀況ニ在リ而シテ各々ノ活動ニ於テ阿蘇山或ハ霧島山ノ噴火ガ孰レモ殆ンド例外ナクシテ各自其ノ對應地震帶ノ活動中ニ含マル、コ

トハ注意スベキ事項ナリトス
以上ノ關係ヲ表示スルコト左ノ如シ但シ陰影ヲ附シタルハ活動期ニシテ然ラザルヲ休息期トス



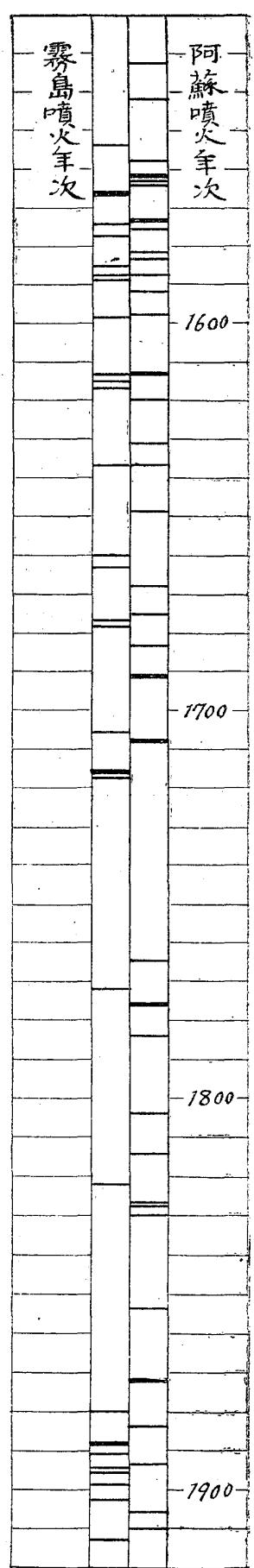
以上ハ明治十八年地震觀測開始以來ノ材料ニヨリテ推定セル所ニシテ更ニ此以前ノ時期ニツイテハ明治十七年ニ阿蘇山ノ噴火アリシゴトニヨリ尙ホ遡リテ交互活動ノ成立スルコトヲモ認メラレザルニアラザルナリ

第一款 過去ノ噴火

地震觀測ハ今日ニ至リテ漸ク三十年ニ達シ而モ其中最初ノ頃ハ觀測モ不十分ナリシガ爲メニ本問題ノ講究ニハ時期餘リニ短ク又材料精確ナラズ故ニ阿蘇、霧島兩火山ノ噴火ヲ年代順ニ追跡シ其缺ヲ補ハントス
阿蘇ハ噴火ノ記錄能ク整頓セルコト前ニ記シタルガ如シ霧島噴火ハ大永年度以後ニ於テ稍備ハレルヲ以テ此以後今日ニ至ル迄凡ソ四百年間ノ材料ヲ取ツテ之ヲ比較スルコト、此次ノ圖式ハ阿蘇霧島兩火山ノ噴火ヲ年次ニ隨ヒテ横線ヲ以テ表ハシタルモノニシテ其ノ最高位ハ西歷紀元千五百二十年ニ

相當シ最低位ハ同千九百二十年ニ當ル横線ノ細キハ通常又ハ

輕キ噴火ヲ示シ太キハ大噴火ヲ意味ス



此圖式ニ就イテ見ルニ阿蘇ハ其噴火度數霧島ヨリモ稍多ク
隨ツテ絕對ニ交互活動ヲ持續スルコトノ不可能ナルハ明カナ
リ但シ最近五十年間ニ於ケル噴火ニツキ其連續シテ起レル噴

火ヲ一群ト見ルトキハ右ノ交互作用ノ成立スルコトハ之ヲ認
メ得ベク又遡ツテ過去凡ソ三百年間ハ其作用ノ多ク現出スル
ヲ認ムベク少クモ同時活動ヲナセリトハ言ヒ難シ然ルニ天正
以後寛永ニ至ル六十五年間即チ千五百七十三年ヨリ千六百三
十七年ニ至ル間ハ兩火山共ニ噴火頻々ニシテ比較的ニ盛ナル
同時活動ヲナセリ

ト、ナルサレバ櫻島噴火ヲ合セ考フルトキハ是レト霧島トノ
交互活動ヲ認メ得ルノミナラズ霧島系ト阿蘇系トガ通常ノ場
合ニハ交互活動ヲ營ミ極メテ特種ナル場合ニ於テノミ同時活
動ヲ行ヘルコトヲモ認メ得ベシ

火山地方ニ於テ噴火セントスル勢力ノ蓄積甚ダ大ラズ且ツ一
方ノ火山甲ハ活動中ニ在リテ勢力ノ消耗著シキトキハ隣接セ
ル他ノ火山乙ハ其勢力ノ伸張ヲ支ヘラレテ同時活動ヲナスニ
困難ナルベクスクリシテ年諸ヲ經ルニ從ヒ甲ノ勢力消耗シテ噴
火止ムニ至リ始メテ乙ノ活動時期ニ入ルベシ交互活動ハ多分
右ノ如キ順序ニ於テ起ルモノナルベシ然レドモ勢力ノ蓄積異
常ニ大ニシテ（永キ休息ガ續キタルトキノ如ク）甲ノ活動即
チ勢力ノ消耗ガ乙ヲ緩和シ難キ場合ニ於テハ即チ同時活動ヲ
ナスニ至ルベシ阿蘇霧島兩系ガ天正乃至寛永年代ニ於テ同時
活動ヲナシタリシ時代ニ於テ淺間、富士、岩木山、白山、渡
島ノ駒ヶ嶽等モ亦噴火シタリシハ注意スベキ事項ナリトス
當ニ場處ヲ埋メ阿蘇噴火ト其數順序ニ於テ略ボ相對應スルコ

之ヲ要スルニ過去五十年間ハ阿蘇霧島ノ兩帶共ニ順調ナル交互活動ヲ營メバ今後ト雖モ恐ラク同様ノ狀況ヲ繼續シテ夫ノ異常ナル同時活動ヲナスコトナカルベシ又最近ニ於テ阿蘇帶ハ休息シ之ニ反シテ霧島帶ハ明治四十年以後ノ十年間ハ活動シタリシガ此後者モ亦去ル大正五年末ノ水俣地震ヲ以テ活動ノ終局ヲ告ダタルモノ、如シサレバ阿蘇帶ハ現時猶ホ休息ノ狀態ニアレドモ今後ハ次第ニ活動期ニ入ルコトナキヲ保セズ大正五年ニハ既ニ數回ノ強弱震アリ又阿蘇山モ時々噴煙セントスルノ徵候ヲ示セリ或ハ今日既ニ活動ノ初期ニアルカトモ思ハレザルニアラズ但シ茲ニ述ブル阿蘇帶ノ活動ハ決シテ大噴火ヲ意味スルニアラズ（阿蘇山ノ噴火頻繁ナルヲ以テ大噴火ヲナスベキ勢力ノ蓄積ナシ）又地震トテモ何レモ火山性ノミナレバ勿論人命家屋ニ損失ヲ與フルガ如キ大地震ヲ釀スコトナカルベシ唯人ヲ驚カスニ足ルベキ地震ヲ往々發生スルコト又阿蘇山ノ通常ノ噴火モ或ハ起リ得ベキコトノ意ニ外ナラザルナリ

大正八年五月

地震學教室ニ於テ